埋蔵文化財調査報告書 50

古沢町遺跡（第３次・第４次）

２００４

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書 50

古沢町遺跡（第３次・第４次）

２００４

名古屋市教育委員会

例　　言

1．本書は名古屋市中区伊勢山二丁目12に所在する古沢町遺跡第３次・第４次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、日本たばこ産業株式会社（ＪＴ）による仮称名古屋ビル新築工事に伴う事前調査である。

3．調査は、名古屋市教育委員会文化財保護室とジェイティ不動産株式会社名古屋支店との間で調整し、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館が担当した。それぞれの調査の期間、対象面積、担当者は以下の通りである。

第３次調査

期　　間　平成14（2002）年12月２日から平成15（2003）年３月20日

対象面積　約1,380㎡

担 当 者　伊藤厚史　木村有作

第４次調査

期　　間　平成15（2003）年11月４日から平成15年12月26日

対象面積　約300㎡

担 当 者　伊藤厚史　伊藤正人　深谷淳

4．本書は、第３次調査のうち古墳時代、古代の遺構、遺物は木村が執筆し、自然遺物の分析については名古屋大学新美倫子氏にお願いした。それ以外は伊藤が執筆し編集した。

5．出土遺物の実測、図版浄書は樋上佐知子、稲田望子、岡地田津、杉浦綾子による。

6．調査にあたり、様々な方々にご協力やご教示を得た。記して謝意を表する。

荒木定子、荒木実、岡村弘子、梶山勝、金子健一、定森秀夫、佐野元、杉浦秀昭、瀬川貴文、仲野泰裕、野場喜子、早野浩二、藤澤良祐、水野知枝、名古屋市上下水道局

7．調査では方位は国土座標第Ⅷ系（世界測地系）による座標北を、水準はT.P.（東京湾基本海面）を用いた。

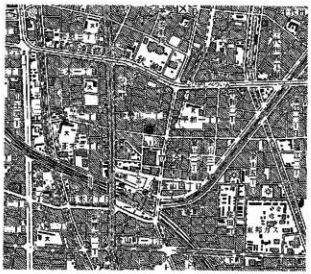
8．発掘調査の記録、出土遺物は名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

目　　次

第1章　位置 …… 1
第2章　第3次調査 …… 2
　第1節　調査の経過 …… 2
　第2節　遺構 …… 4
　　(1) 古墳時代・古代 …… 4
　　(2) 中世 …… 39
　　(3) 近世・近代 …… 49
　第3節　遺物 …… 53
　　(1) 縄文時代～弥生時代 …… 53
　　(2) 古墳時代 …… 53
　　(3) 古代 …… 59
　　(4) 中世 …… 64
　　(5) 近世・近代 …… 74
　　(6) 動物遺体 …… 83
　第4節　小結 …… 84
第3章　第4次調査 …… 103
　第1節　調査の経過 …… 103
　第2節　遺構 …… 104
　第3節　遺物 …… 113
　第4節　小結 …… 119
報告書抄録・奥付 …… 124

第１章　位置

古沢町遺跡は、名古屋台地の東縁部に立地している。付近の標高は約10mである。遺跡付近はＪＲ、名鉄、地下鉄の金山総合駅があり、国道19号線、大津通が南北に走る、交通の要衝である。古沢町遺跡は、1965（昭和40）年の地下鉄工事で主に弥生時代後期の遺物が発見されたことにより存在が明らかになった。また、1969（昭和44）年の市民会館の建設工事に際して行われた調査では、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺構、遺物が出土した。



第１図　遺跡の位置（S＝１／25,000）

1994（平成６）年には、市民会館の北側でビル建設に伴って約1400m²を対象に調査が行われた。調査の結果、弥生時代後期の方形周溝墓２基のほか、竪穴住居跡２棟、大型土坑４基、中世の堀などが検出され、弥生土器、須恵器、古代の瓦、山茶碗などが出土した。今回の調査を実施するにあたり、昭和40年代の調査を第１次としたため、1994年の調査を２次、今回の調査を３次及び４次と呼称する。

周辺には、古墳時代の方墳が多数検出された東古渡町遺跡、最近新規発見され調査された金山北遺跡、尾張元興寺跡、古渡城跡など弥生時代から古墳時代、古代、中世にわたる遺跡が密集している。第２図は、遺跡の位置と立地を理解するために、遺跡地点を等高線図に示したものである。名古屋台地の形状をあらわしており、北端の名古屋城付近は標高15mを測るが南にいくにしたがい次第に低くなり、南端の熱田神宮付近では標高６～７mである。台地は開析され谷地形もみられる。確認されている遺跡は、主に台地縁やこうした谷地形に面して立地している。古沢町遺跡や富士見町遺跡、高蔵遺跡は東縁に、竪三蔵通遺跡、正木町遺跡、伊勢山中学校遺跡は西縁に立地している。断夫山古墳、白鳥古墳が西縁に築造されているのに対し、那古野山古墳、大須二子山古墳が谷頭の台地内陸部に立地しているのが興味深い。

遺跡名

1　古沢町遺跡
2　竪三蔵通遺跡
3　那古野山古墳
4　大須二子山古墳
5　旅籠町遺跡
6　竪塚遺跡
7　正木町遺跡
8　伊勢山中学校遺跡
9　富士見町遺跡
10　古渡城跡
11　金山北遺跡
12　尾張元興寺跡
13　東古渡町遺跡
14　高蔵遺跡
15　断夫山古墳
16　白鳥古墳
17　熱田神宮境内遺跡

第２図　周辺の遺跡と調査地点

第２章　第３次調査

第１節　調査の経過

調査は、日本たばこ産業株式会社の名古屋支店の建設に伴い実施された。該当地は、戦後の区画整理事業により四周を公道に囲まれた１区画分が日本たばこ産業の敷地であり、東半には社屋、西半には製品倉庫が建設されていた。建設されるビルは、敷地西側を使用して事務所と販促物品庫が建設されるもので、古沢町遺跡範囲の北限部分にあたる。調査は、平成14年12月５日より開始した。調査は、場内に排土を置くため南北２つに分け、まず南半部分、事務所棟部分の約３分の２を実施した。調査をすすめるにあたり、10mグリッドを設定し、任意に南西隅を原点とし、南西隅から東へ１区、２区、東南が４区、その北側は西から５区～８区とし、北東端の20区まで設定した。包含層中からは主に須恵器や中世陶器が出土した。遺構検出をすすめていくと、竪穴住居跡、土坑などのプランが姿をあらわし、中でも中央付近から南西部分にかけて小穴が著しく多く検出され、その掘削には多くの時間を割くこととなった。遺構内から出土する遺物から、古墳時代、中世を主体とし、古代の遺物も少し出土する状況が次第に明らかになってきた。

年内は12月27日まで行い、年が明けてからは平成15年１月６日から再開した。調査中、近世の遺物は皆無に近かったが、窯道具のエンゴロ（匣鉢）が調査地の各所で見かけることに注意がいくようになった。その後東壁断面にかかった土坑が窯道具の廃棄土坑であることが確認されるに至った。名古屋市博物館野場氏より当地付近には東雲窯が所在し、廃業後も横井米窩という人が譲り受け、米窩焼と呼ばれていたことをご教示された。また、瀬戸市埋文センター佐野氏より調査区南壁断面中にみられる焼土層が窯跡に関係するものとのご教示を受けた。

１月24日に前半区（南半部分）の写真測量及び全景写真撮影を実施した。29日～２月１日に埋め戻しを行い、前半区の調査を終了した。３月から後半区（北半部分）の表土除去を始めた。後半区は、前半区につづく事務所棟部分と販促物品庫部分の２か所に分かれた。

表土除去と並行してグリッド設定を行う。SK31～33とした比較的大きな土坑からは、たくさんの須恵器、土師器が出土した。３月12日に写真測量を実施した。また断面に見えていた窯跡らしい部分を拡張して掘削したところ、焚口部分を検出した。３月15日に現地説明会を実施した。17日～19日に埋め戻しを行い、20日に後片付けをして終了した。

写真１　調査区遠景

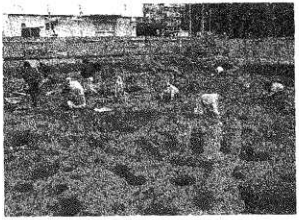
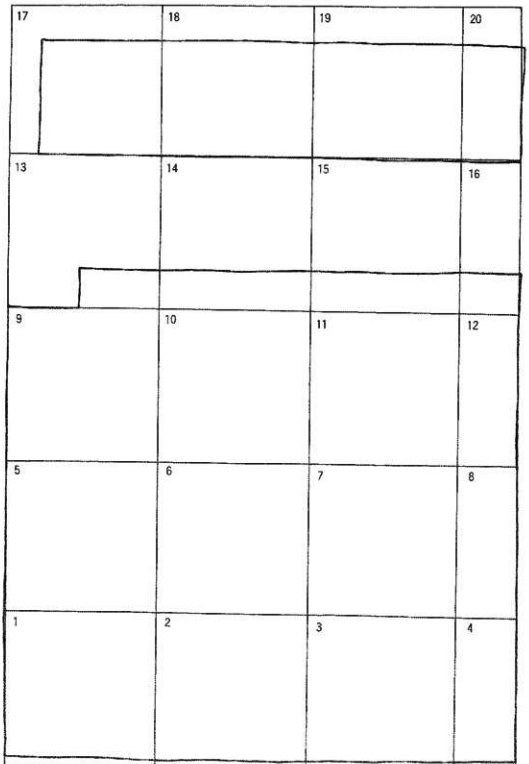


写真２　調査風景



第３図　グリッド区割図（S＝1／250）

第2節　遺構

調査区内ほぼ全域にわたって遺構が検出された。以前は製品倉庫が建っていたが、この建物基礎による破壊は、コンクリートパイルが打ち込まれている箇所はあったものの極めて少なかった。前半区では西端から北東側にかけて柱穴状の小穴が極めて多く検出された。小穴のうち確実に掘立柱建物跡を推定できた柱穴列は、1棟分にすぎないが、多くの建物が建てられていたと推定される。このほか竪穴住居跡5棟、墳丘墓の周溝と考えられる溝1条、古墳時代や中世の土坑などが検出された。

後半区は、北側調査区では竪穴住居跡2棟、近代以前の大きな溝、防空壕1基、戦後の廃棄土坑、南側調査区では竪穴住居跡6棟、土坑、防空壕2基などがある。

(1) 古墳時代・古代

古墳時代　3次調査範囲のとくに南半を中心に、おもに黒褐色土を埋土とする遺構が残存していた。検出面は、ほぼ地山シルト検出面であり、9.3～9.5m T.P.付近である。古墳時代前半（四世紀前半）の墳丘墓1基、古墳時代後期（5世紀後半～6世紀）と思われる竪穴住居跡13棟のほか、7基の土坑をはじめ大小のピットを検出した。

墳丘墓

SZ1（第17図、写真11・12）　3次前半調査区南東隅の8区から、4次南西隅の第1トレンチにかけて位置する方形の墳丘墓と推定される。3次調査8区には、周溝および墳丘部の北西コーナーを含む一画がかかる。北側および西側の周溝で黒褐色の埋土がのこっており、発見当初は竪穴住居跡（SB5→欠番）として掘り下げはじめた。掘りすすむと、土師器・器台が出土し、溝状遺構がほぼ直角に曲がり、墳丘墓の周溝であると考えた。また、4次調査第1トレンチの西壁際に黒褐色土の落ち込みがみつかり、土師器片を含むことや3次調査区との位置関係などから、墳丘墓を想定しSZ1とした。

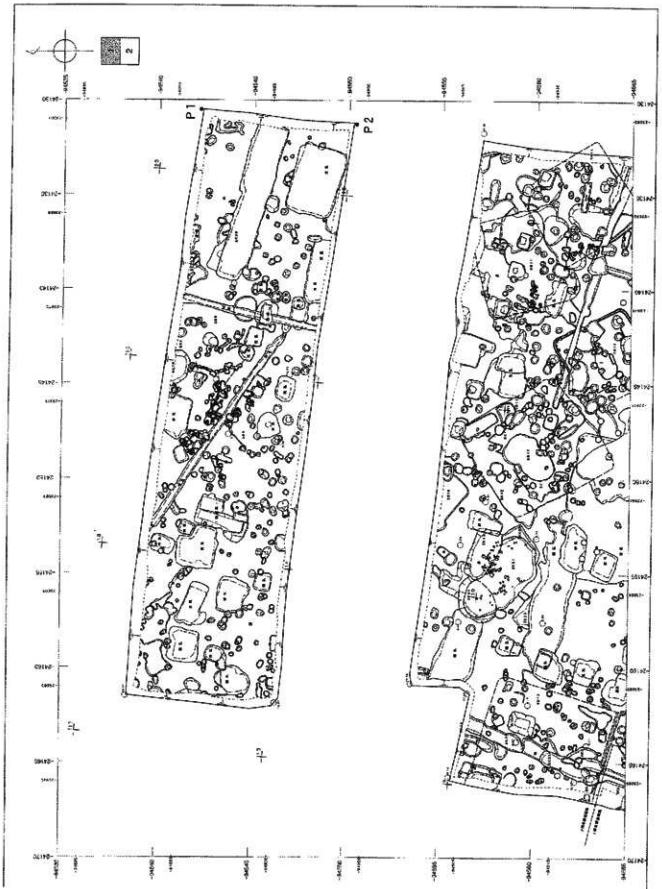
検出された周溝は、幅1～1.5m・深さ20～40cmであり、単純な方形平面を想定すれば、周溝を含めた推定規模は10×10mとなる。墳丘部は7.5～8m四方と推定され、3次調査区南東隅で茶褐色の盛土がわずかにのこされていた。北西コーナー付近はSB7竪穴住居跡の南東コーナー部で壊されており、今回検出した範囲内では、ブリッヂ（周溝に掘りのこされた陸橋部）は認められなかった。

竪穴住居跡

出土遺物の多い少ないはあるものの、古墳時代後半（5世紀後半～6世紀）におさまるものと思われる。調査区東半は、黄色の硬質砂層が地山であり、検出・掘り上げともに難しく、竪穴住居跡とわかる頃には埋土が掘り上がる前後という場合が多かった。また、全体を通じて、焼土の検出が少なく、炉・カマドなど火処の所在がわからない住居跡がほとんどであった。

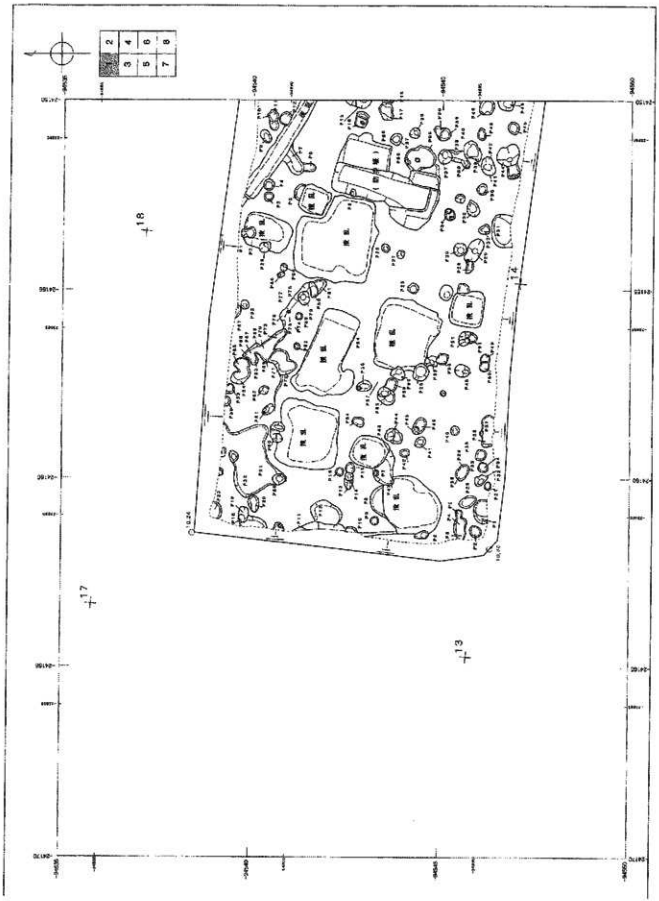
SB1（第18・19図、写真13～16）　前半調査区5区西壁にかかり、隅丸の東コーナーを含む一画が検出された。古墳時代のSK14やSK13、古代のSH2（柱穴列）など後世の掘り込みに切られる。埋土は黒褐色土であり、床面近くから須恵器などの遺物がまとまってみつかっている（第19図、写真13）。床面は、地山橙色シルトがうすく貼り付けられ、須恵器片などが所々で出土する。

SK14は、SB1の北東壁内におさまる浅い土坑である。西壁付近で須恵器・土師器が集中してみつかっている（第19図、写真15・16）。西壁断面でみるとSB1の床面を壊して掘られているのが観察できる。ここでは、SB1内の遺構としてとらえておく。

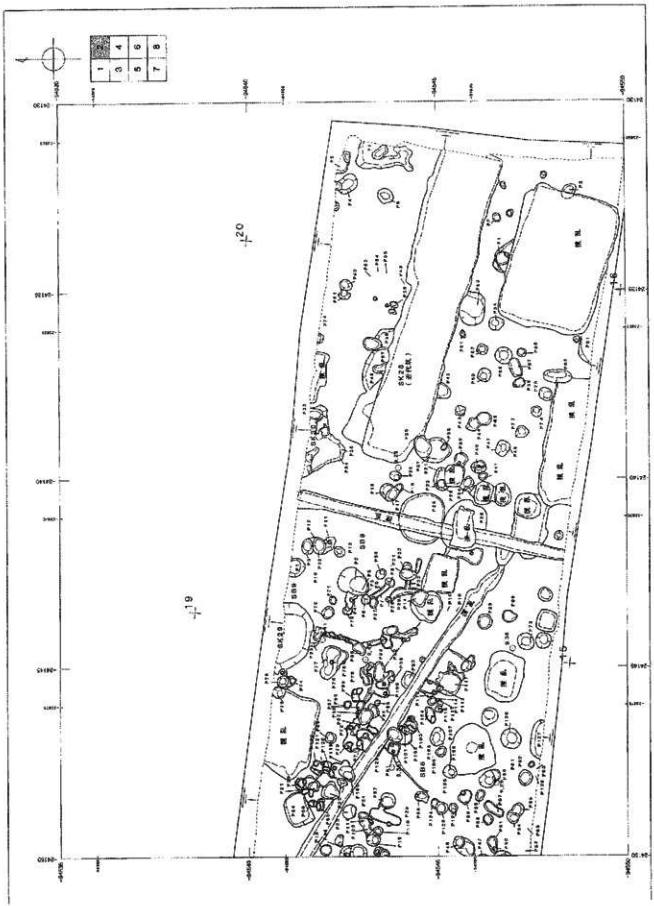


第４図　遺構平面図北半部（S＝１／200）

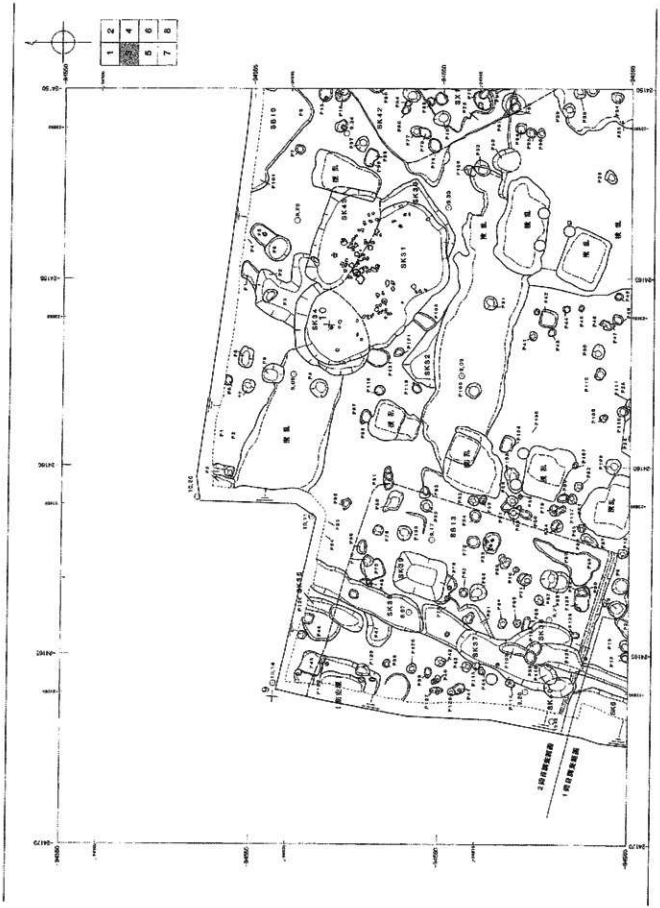
第５図　遺構平面図南半部（Ｓ＝１／200）

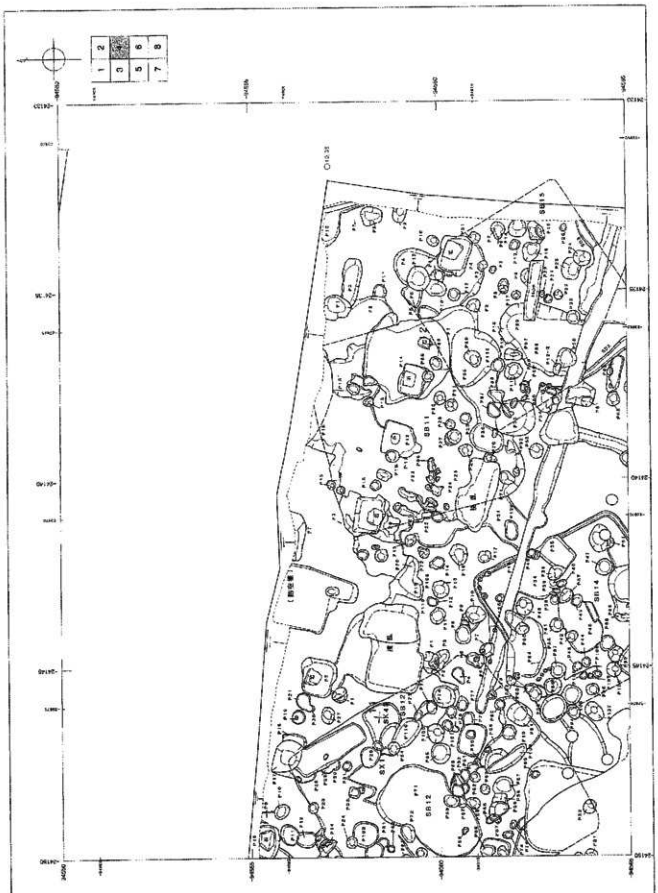


第６図　遺構平面図（1）（S＝1／100）

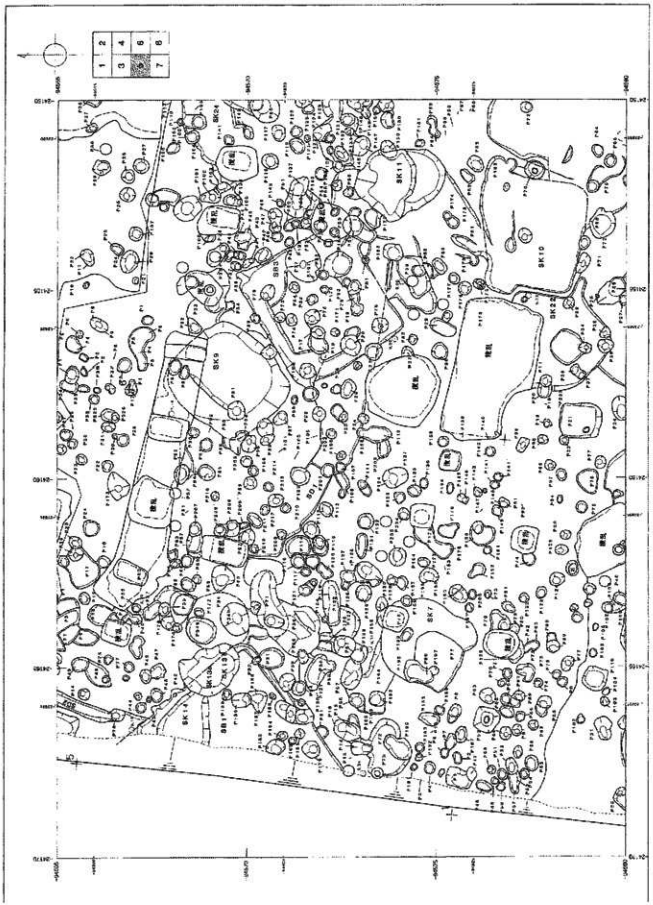


第７図　遺構平面図（2）（S＝１／100）

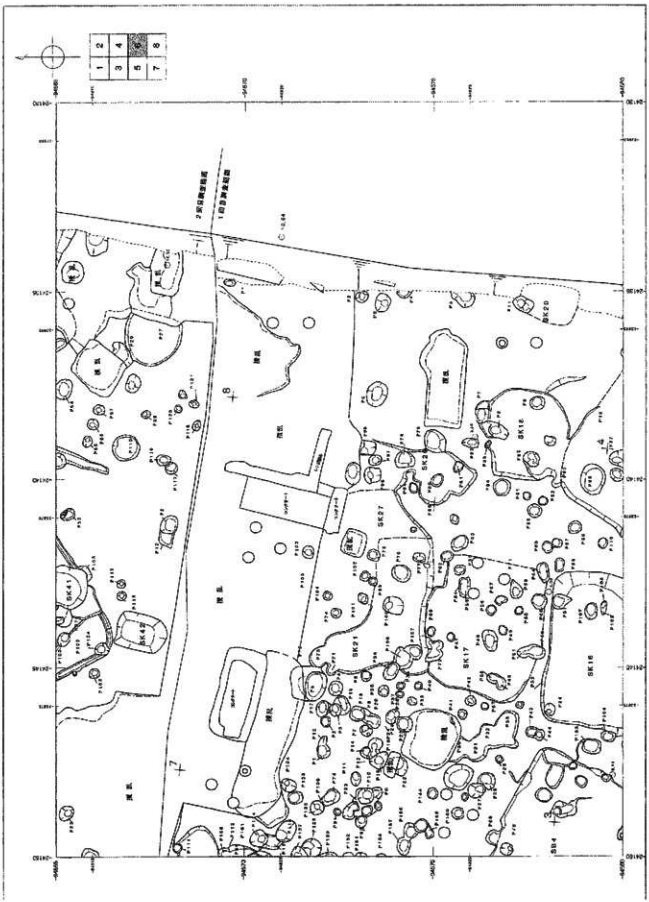

1
2
4
5
6
7
8
SK51
SK52
SK53
SK54
SK55
SK56
SK57
SK58
SK59
SK60
SK61
SK62
SK63
SK64
SK65
SK66
SK67
SK68
SK69
SK70
SK71
SK72
SK73
SK74
SK75
SK76
SK77
SK78
SK79
SK80
SK81
SK82
SK83
SK84
SK85
SK86
SK87
SK88
SK89
SK90

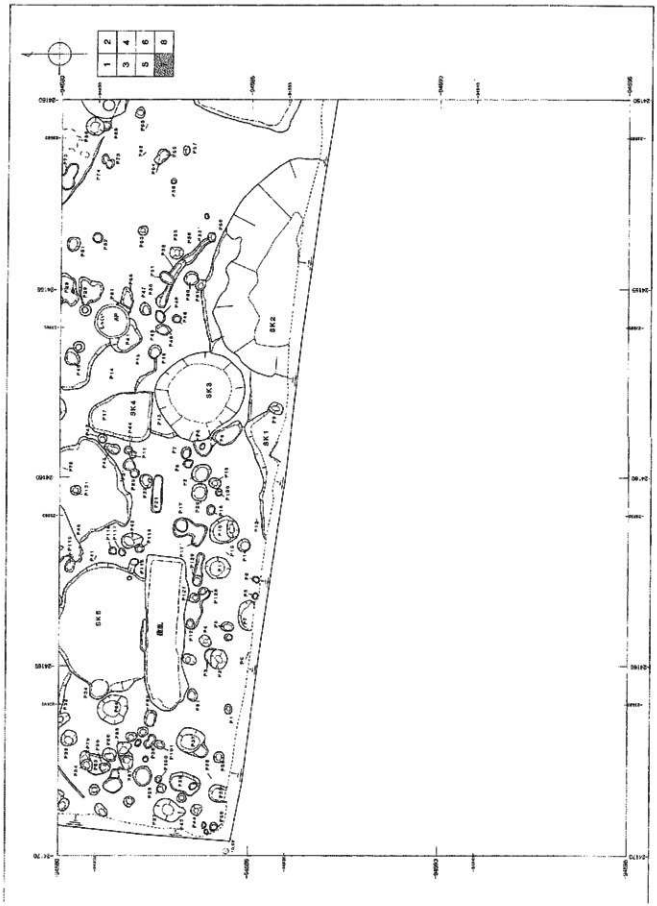


第９図　遺構平面図（4）（S＝1／100）

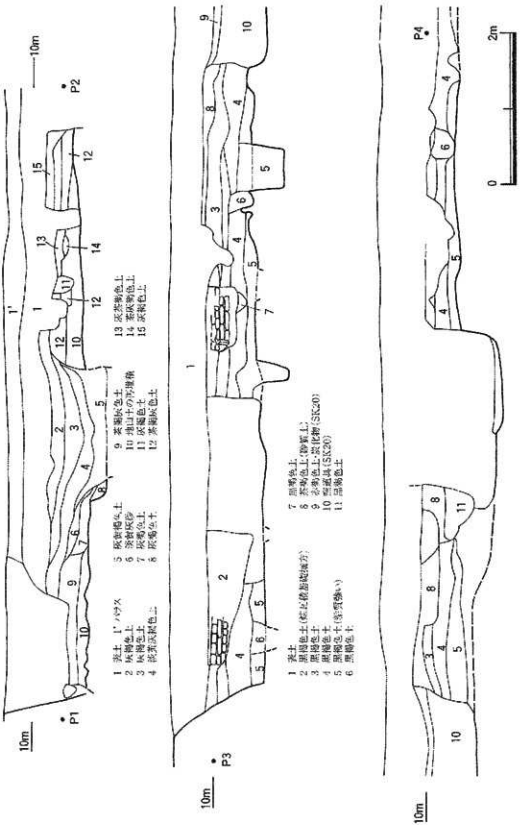


第10図　遺構平面図（5）（S＝1／100）

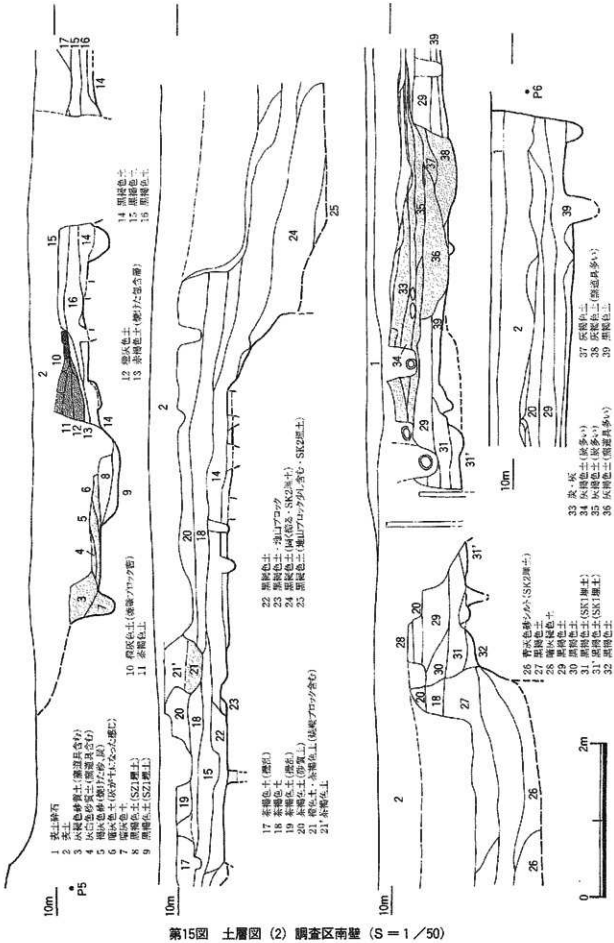

1
2
3
4
5
6
7
8
SK20
SK16
SK27
SK17
SK15
SK4
SK42
SK41
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK37
SK38
SK39
SK40
SK43
SK44
SK45
SK46
SK47
SK48
SK49
SK50
SK51
SK52
SK53
SK54
SK55
SK56
SK57
SK58
SK59
SK60
SK61
SK62
SK63
SK64
SK65
SK66
SK67
SK68
SK69
SK70
SK71
SK72
SK73
SK74
SK75
SK76
SK77
SK78
SK79
SK80
SK81
SK82


1
2
3
4
5
6
7
8
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK37
SK38
SK39
SK40

第13図　遺構平面図（8）（S＝1／100）



第14図　土層図（1）調査区東壁（S＝1／50）



第15図　土層図（2）調査区南壁（S＝1／50）

SB3（第20図、写真17・18）　前半調査区６区で検出。古墳時代の土坑SK9に接し、古代溝SD1が南半を横切る。埋土は黒褐色土であり、出土遺物は破片が散見する程度である。ほぼ方形で、3.3×3.5mと規模は小さい。壁溝は浅く不整形であり、主柱穴特定も難しい。

SB4（第22図）・SB6（第23図、写真19）　前半調査区２～４・６～７区でほぼ全体を検出。SB4はほぼ方形で4.6×4.3m、SB6は５×4.6mとやや大きい。どちらの住居も埋土は浅く、出土遺物も少ない。

床面近くは、黄灰色の硬く締まった砂層の地山であり、橙色シルトや暗褐色土などで貼り床されている。地山面は凹凸が激しく、主柱穴なども特定が難しい。

SB7（第24・25図、写真20）　前半調査区３～４・７～８区で検出。南西コーナー付近はSB6の北東コーナーと重なり、南西コーナーはSZ1北西コーナーを壊す。北西コーナーはSK18と接する。方形または隅丸方形で、6.3×5.8mとやや規模が大きい。東半が攪乱等で失われているため、北西辺の北半以外は輪郭が残っておらず、当初は土坑（SK17）として掘削をはじめた。床面の状況ははっきりわからず、地山面に至ると激しく凹凸がのこる。主柱穴は比較的明瞭であり、北東主柱穴（８区P1）からは６世紀前半の須恵器・杯蓋が出土している。

SB8（写真21）・SB9（写真22）　後半調査区18区と19区で検出。後半のうち北調査区にあたる17～20区では、古墳時代の包含層や遺構の残存状況はかなり悪くなる。SB8・SB9ともに埋土・形がはっきりせず、壁溝の状況からのみ住居跡と想定した。とくにSB9は壁溝も不整形であり、住居跡と確定するのは難しいかもしれない。

SB10・SB11（第26図、写真23）　後半調査区北辺近くで検出。SB10は、南東コーナーの一画が検出され、大半は調査区外に残存していると思われる。SB11は、５×5.2mの隅丸方形の竪穴住居跡と復元・推定した。後世の遺構や攪乱により外形の輪郭の大半が失われ、かろうじて北西・南東コーナーや主柱穴の特定をすることによって、竪穴住居跡であることがわかった。住居本来の埋土の特定ができず、したがって出土遺物の同定が難しいが、周辺の遺構埋土からは、５世紀代の須恵器（第48図51・52）がめぼだつ。

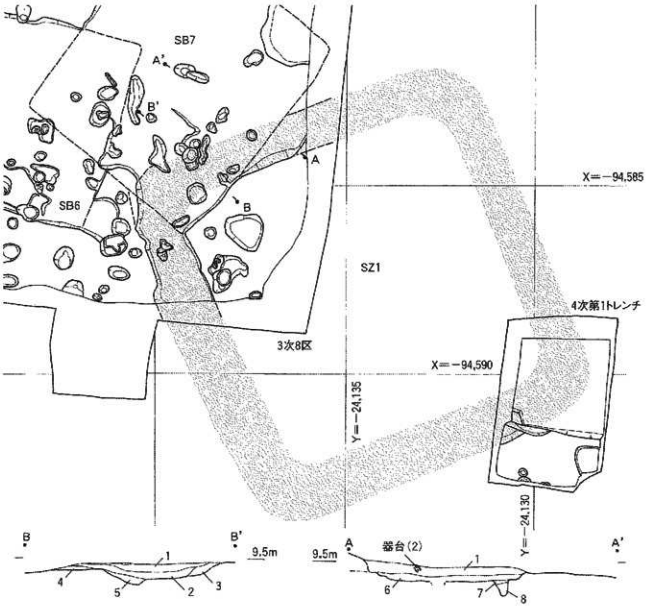
SB12（第27図、写真25）　後半調査区10・11・14区で検出。内面周囲に壁溝がめぐらず、当初は大型の土坑が接しながら並んでいると考えていた。最終的な外郭線の復元や主柱穴の特定などから、6.2×5.8mとSB7と同規模の竪穴住居跡として推定した。

SB13（第28図、写真25・26）　後半調査区９区で検出。西半約1／4が西壁にかかる。直線的な南側壁溝が明瞭に検出され、北・東側では壁を検出することができなかった。住居SB13の推定範囲内には、SK37・38などの溝状遺構や、土坑SK39など中世の遺構が集中しており、住居跡にともなう埋土は確認できなかった。主柱穴の特定から復元を試みると、6.7m四方の大型の竪穴住居跡となる。

SB14（第29図、写真27）　後半調査区11区でSB12の南東、ほとんど接する位置で検出された。4.3×4.3mの方形で、北西部以外は壁溝がよく残る。南東辺中央付近は、中世土坑SK41が掘られている。

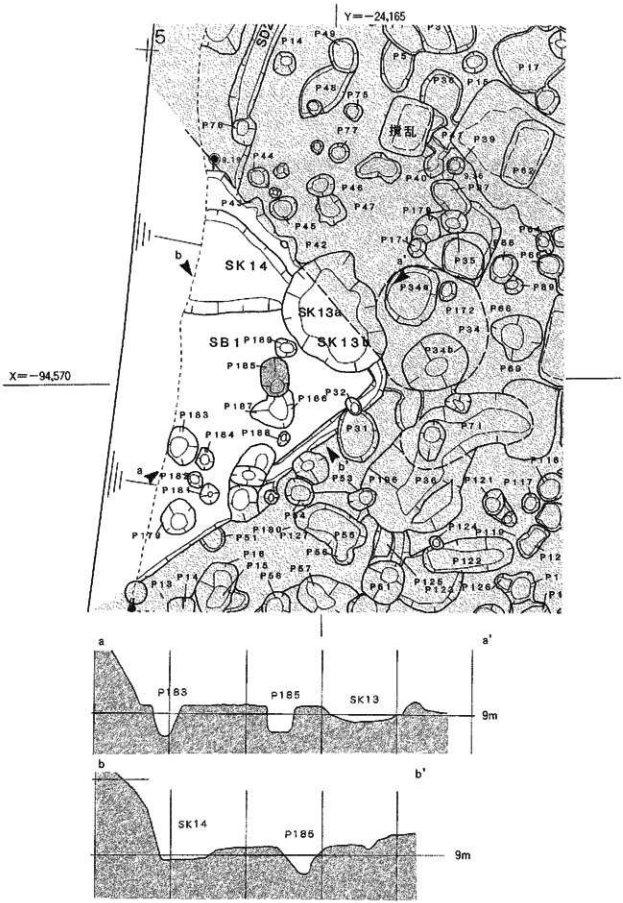
SB15（第30図、写真24）　後半調査区北東端、11・12区で検出。SB11の南辺東寄りを壊す。後世の遺構や攪乱により外形の輪郭の大半が失われ、西辺や南辺に一部残存していた壁溝の存在から、竪穴住居跡として復元した。住居本来の埋土の特定ができず、したがって出土遺物の同定が難しいが、推定範囲内のP30から城山２号窯期頃までにおさまる高杯や杯蓋（第48図58・59）が出土している。

第16図　古墳時代～古代遺構配置図（S＝1／300）

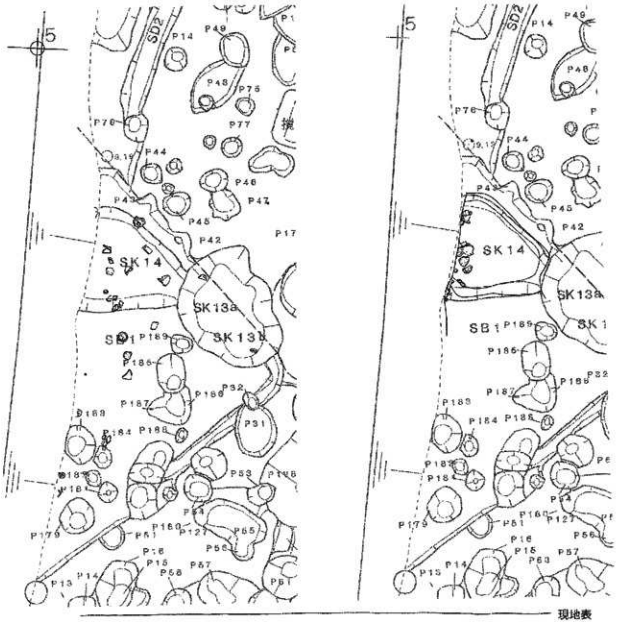


1　黒褐色土　地山シルトブロック0.5～1cm大少し含む。
2　黒褐色土　地山シルトブロック1～3cm大少し含む。
3　黄灰色土　均質の黄色土(地山)の崩落土に、黒褐色土わずかに混じる。
4　黄灰色土　均質の黄色砂質土(地山)
5　暗褐色土　地山シルトブロック0.5cm大点状に含む。
6　黒褐色土　やや黄褐色っぽい。地山砂ブロック0.5～1cm大点状に含む。
7　黒褐色土
8　黄灰色土　地山シルトブロックおよび黒褐色土わずかに混じる。

第17図　SZ1（平面図；S＝1／100・土層図；S＝1／50）



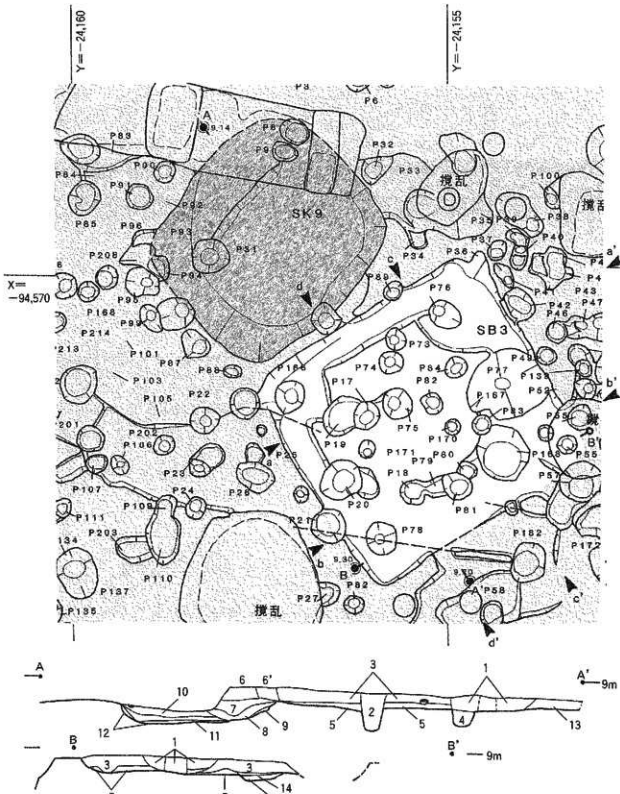
第18図　SB1（S＝1／50）



1

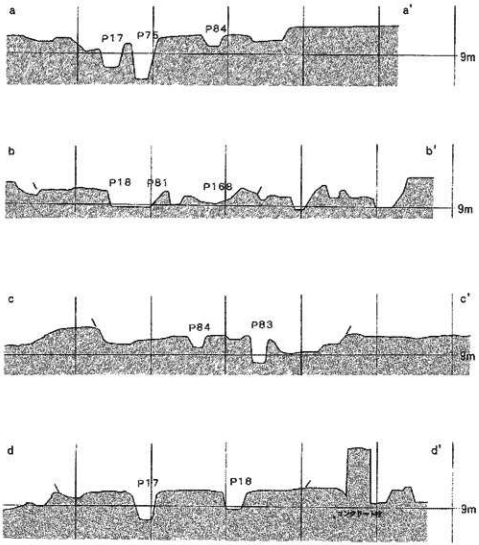
1　表土(撹乱土)　殺災ガラ片混　　2　赤褐色土　　3　黒褐色土
4　暗褐色土　　6-7層に比べ赤褐色強く、鍵状の弱い[4~5層=SK14埋土]
5　暗褐色土　　地山シルトブロック0.5cm大まだら。
6　黒褐色土　　遺物多く含む。[6~9層=SB1埋土]
7　黒褐色土　　シルト強く地まる。地山シルトブロック0.5cm大含む。
8　黒褐色土　　地山シルトブロック0.5cm大まだら。
9　暗褐色土　　陸床の一部か

第19図　SB1遺物出土状況図および土層図（S＝1／50）

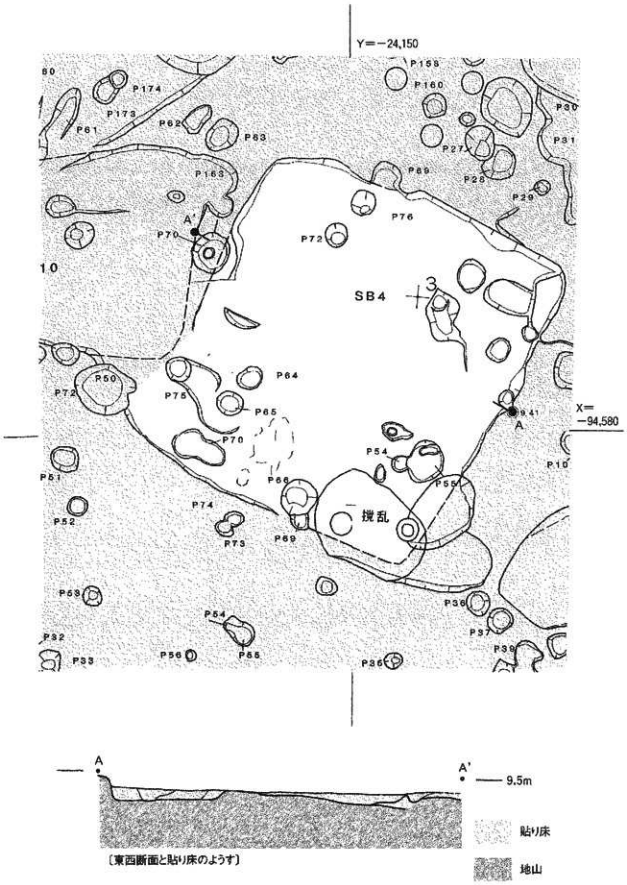


1 茶褐色土　灰色砂ややめだち、地山ブロックまばらゃ、やや軟。[SB1堆土]
2 灰茶褐色土　灰色砂めだち、軟。[6区P17埋土]
3 暗褐色土　焼土0.5cm大まばら。黒色シルトブロックめだち、ややしまる。
4 暗褐色土　3層よりシルト強くしまる。[6区P18堆土]
5 暗褐色土と地山シルトブロックの混土[SB3貼床]
6 黒褐色土　シルトやや強くしまる。[6～12層＝SK9埋土]
6' 黒褐色土　6層に比べ、灰色砂まばら、やや軟。
7 黒褐色土　6層より加炭まり弱く、崩れやすい。
8 黒褐色土　粘質強くしまる。地山黄砂0.5～1cm大めだつ。
9 地山黄砂ブロック密
10 黒褐色土　黒色シルト強くしまる。焼土1cm大めだつ。
11 黒褐色土と地山黄砂ブロック混土
12 地山黄砂ブロック粗
13 黒褐色土　赤褐色に近い、ややしまる。
14 暗褐色土　地山シルトブロック密。
15 暗褐色土　地山シルトブロック多い。灰色シルトめだつ。

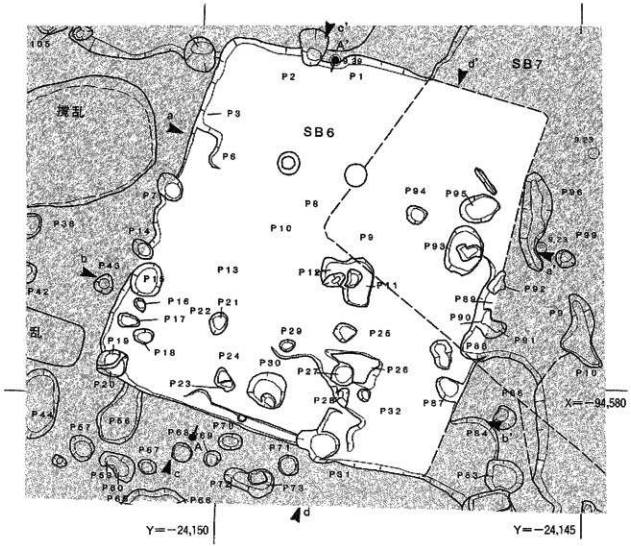
第20図　SB3・SK9（S＝1／50）

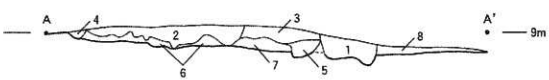


第21図　SB3断面図（S＝1／50）



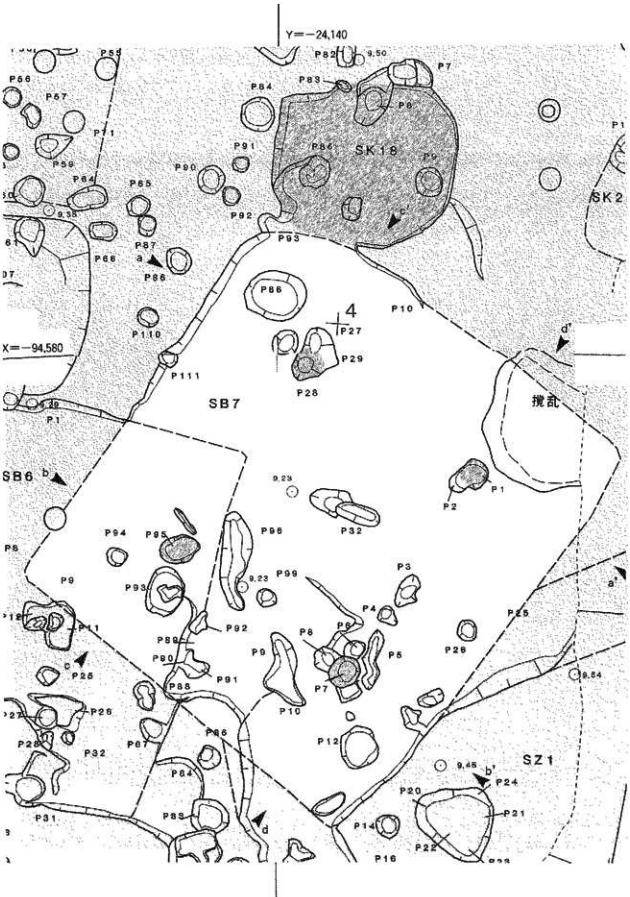
第22図　SB4（S＝1／50）



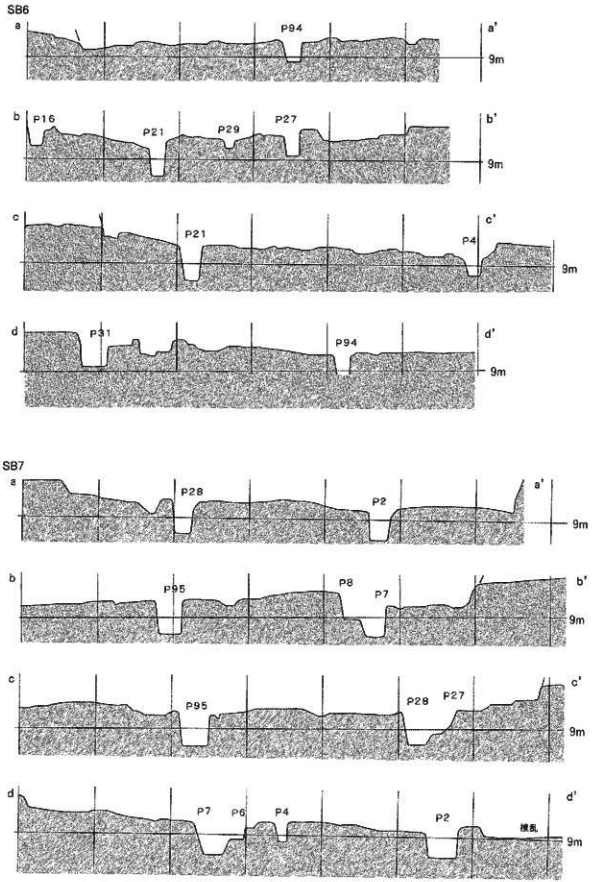


1　灰褐色土　　黒褐色土・黄灰色土ブロック混
2　黒褐色土　　地山ブロック多く含む
3　黒褐色土　　細かい地山ブロック含む
4　灰褐色土　　黒褐色土・黄灰色土ブロック混
5　灰褐色土　　黒褐色土・黄灰色土ブロック混灰褐色土
6　黄灰色土　　地山シルトブロック多く含む
　　褐褐色土ブロックまばら。
7　黄灰色土 地山シルトブロック多く含む。6型に似る。
8　茶褐色砂質土 黄褐色地山ブロックと黒褐色土ブロック混

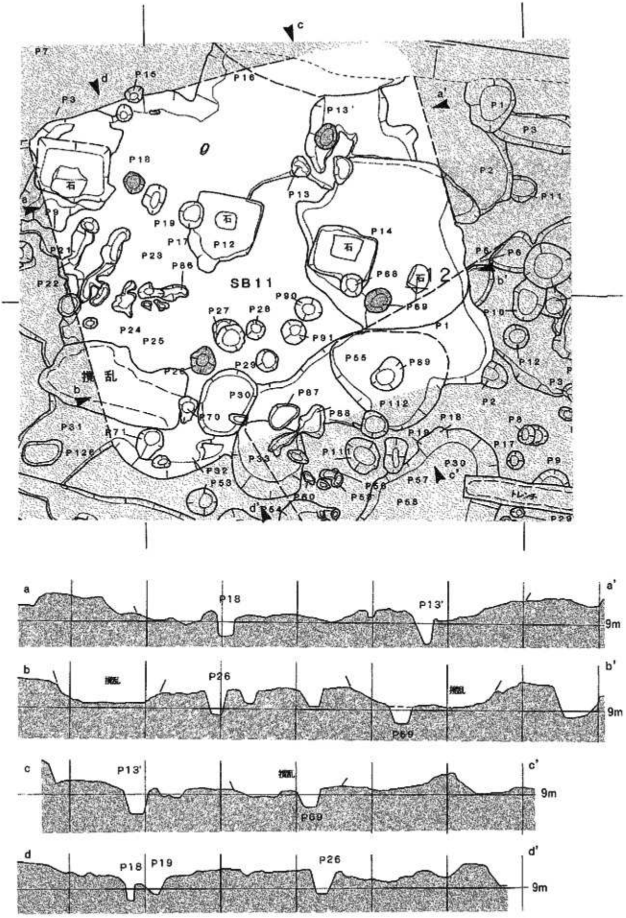
第23図　SB6（S＝1／50）



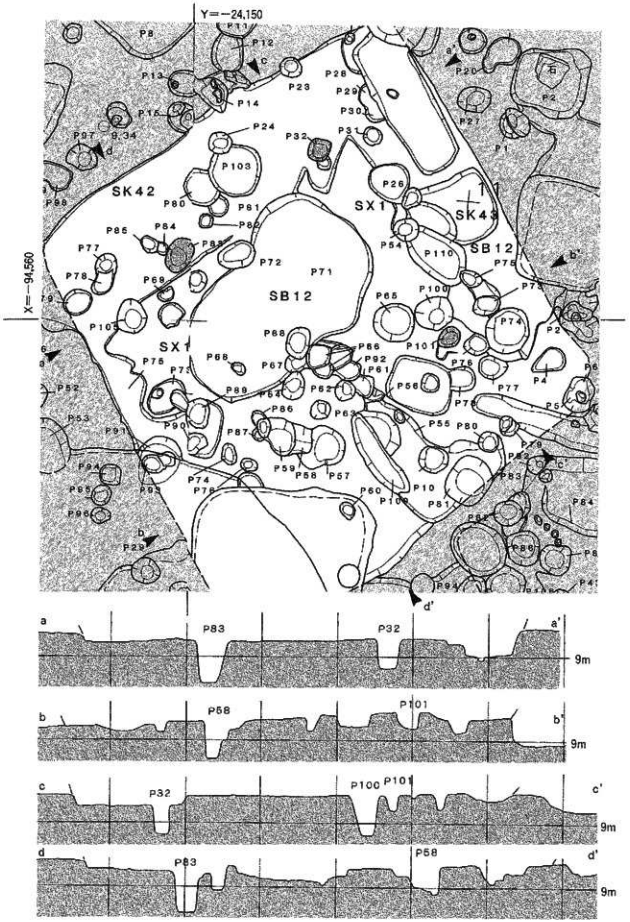
第24図　SB7・SK18（S＝1／50）



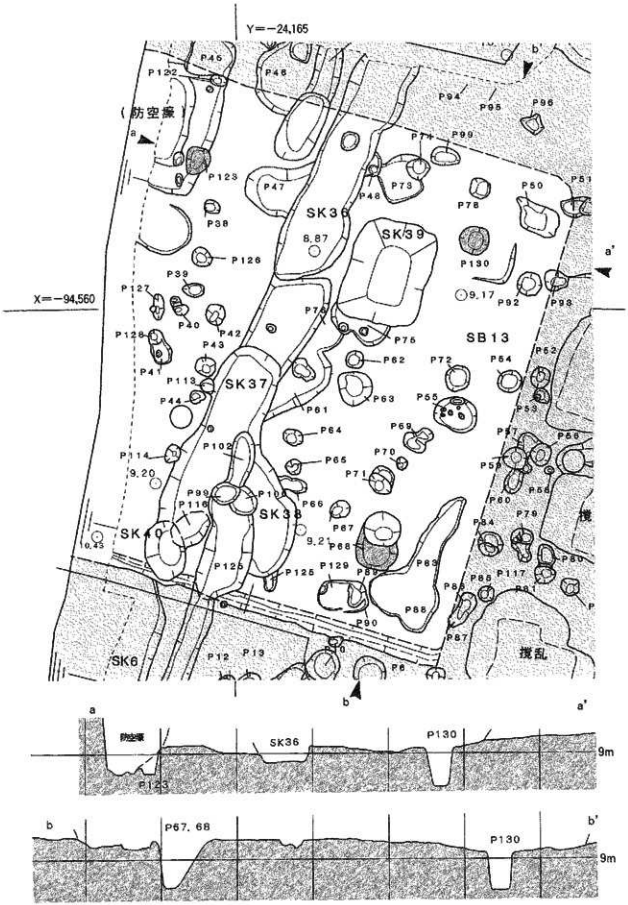
第25図　SB6・SB7断面図（S＝1／50）



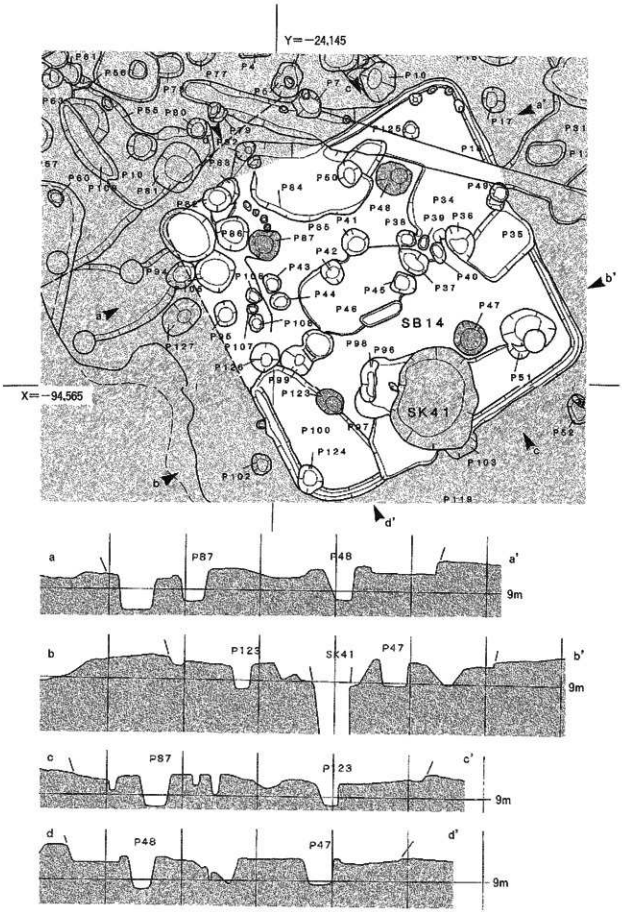
第26図　SB11（S＝1／50）



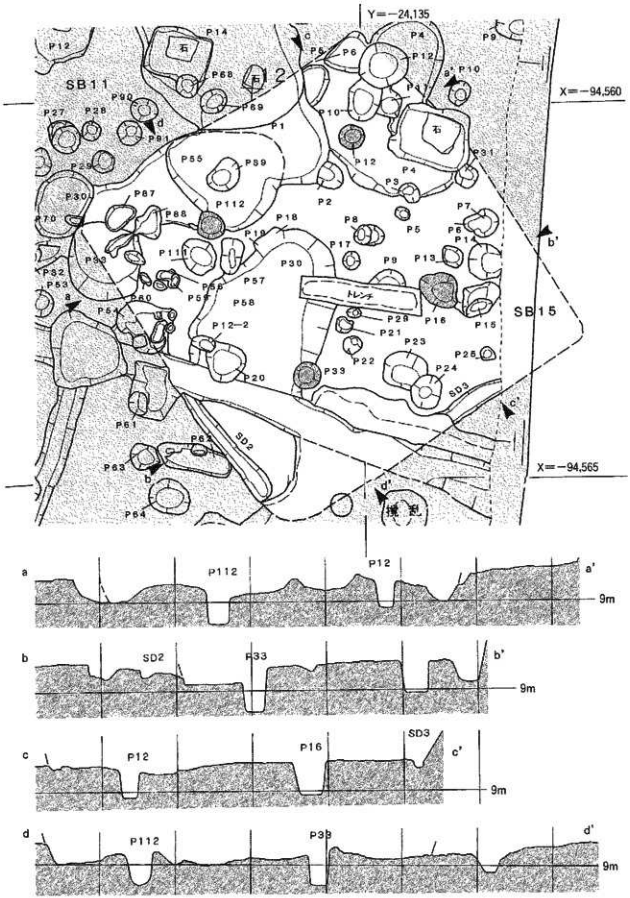
第27図　SB12（S＝1／50）



第28図　SB13（S＝1／50）



第29図　SB14（S＝1／50）



第30図　SB15（S＝1／50）

土坑

黒褐色土を埋土とする土坑が7基みつかっている。円形・楕円形・長方形などの平面形を呈し、主軸方向もさまざまである。うち、SK9およびSK31周辺土坑群からは、須恵器・土師器など古墳時代後半（5世紀代）の遺物がまとまって出土している。古墳時代集落の中に掘られた土坑と考えられ、住居跡と直接重なり合うような土坑はない。

SK9（第20図、写真28）　前半調査区5～6区、SB3の北西に接するように位置する。北半上部は、旧社屋の基礎によって攪乱を受け、埋土が失われていた。完掘状態での平面形は、南北2.8～3m×東西2.6mのほぼ隅丸方形を呈し、主軸はN40°Eである。平坦な底面をもち、断面形は逆台形に近い。地山シルトである検出面の高さは9.32m T.P、底面は8.88m T.P.であり、深さ44cm程度となる。

埋土は、黒褐色土で、基本的に硬く締まる。完形を含む須恵器・土師器片がまとまって出土している。

SK18（第24図）　前半調査区7区、SB7の北西コーナーに接するように検出された。付近は、攪乱を大きく受けており、底部付近がのこっているものと思われる。平面形は、後世の変形もともない不整形であるが、円形または隅丸方形と思われる。南北2.0m・東西2.3mを測り。検出面の高さは9.5～9.6m T.P.底面の高さは9.40m T.P.前後であり、底面は凹凸多く不整形である。

SK21・SK24・SK27　前半調査区北半で検出された、いずれも深さ10cm前後の程度の浅い土坑である。検出面の高さは、9.3～9.5m T.P.である。暗褐色～黒褐色上の埋土であり、古墳時代～古代の遺物を含む。平面形は不整形であり、前述のSK18とともに時期・性格ともに決めがたい遺構である。

SK31・SK32・SK33・SK34・SK43（第31・32図、写真29～32）　後半調査区9・10・13・14区にまたがり検出された。検出高である周囲の地山面は9.3m前後である。検出当初は東西約5m・南北3.5mの範囲で、黒褐色土がいびつな楕円形を呈しており、ひとつの遺構（SK31）として掘り下げを開始した。

検出時から遺物の出土量の多さが目立ち、遺物を残しながら掘り下げを行った。掘りあがった形状や断面土層の観察により、遺構はひとつの土坑ではなく、複数の土坑が重なり合っていることがわかった。やや南西に離れて位置するSK32を除き、SK33→SK31→SK34・SK43の順に掘られたと考えられる。

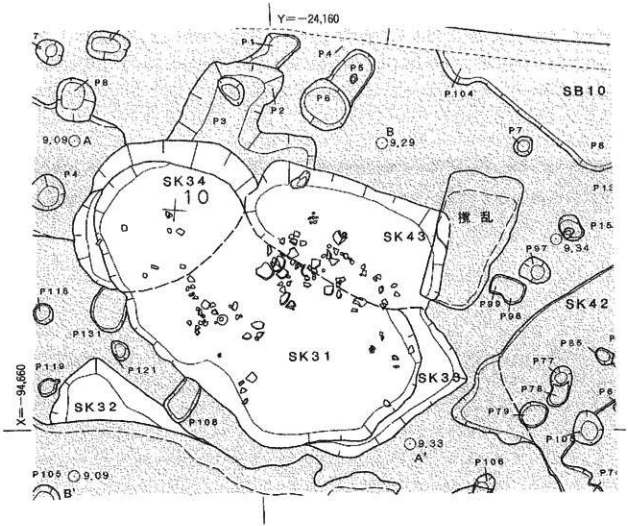
SK32は、南半が旧社屋の基礎による攪乱で失われ、北西端の一画がのこされていた。平面形は方形か楕円形と思われ、SK31と主軸がほぼ平行するN53°Wを測る。底部付近の高さは9m T.P.で、検出面からの深さは約30cmであった。完存に近い須恵器・有蓋高杯の杯部が出土している（写真32）。

SK33は、SK31とSK43に壊され、南東辺2.3mと北東辺1.3mがのこされていた。方形または長方形の平面形が考えられ、主軸はN55°Eを測る。出土遺物は少ない。

SK31は、推定で4×2.5mと最も大きく、位置的にも中央にある。楕円形または隅丸方形の平面形を呈し、主軸方向はN51°Wである。底面付近の高さは8.9m T.P.前後であり、断面形は箱形に近い逆台形を呈する。埋土は黒褐色土であり、混入物などで3層に分層できる。SK33を壊す南東部は原形をとどめていると思われ、西および北端はSK34とSK43と重なるが、とくにSK43との境界については、土層からみても区別が困難であった。

SK34は直径約2mの、ややゆがんだ円形を呈する。底面付近の高さは8.9m前後であり、断面形はレンズ状に近い。

SK43は、2.7×2mの隅丸長方形を呈し、SK31との切り合いによっては隅丸方形に近い形に復元でき



1 黒褐色土　シルト強く解まる。おざりもの少ない[1～3層＝SK34埋土]。
2 黒褐色土　地山シルトブロック沢山。[4層に比べ砂質強い。
3 黒褐色土　地山シルトブロック1cm大以下多い。
4 黒褐色土　灰色シルトのだち、やや軟質。下部に地山シルトが雷状に堆積。
5 黒褐色土　シルト強く、結質。焼土2cm大まばら。[4～6層＝SK31堀上]
6 黒褐色土　地山シルト・黒色ブロック3cm大以下めだつ。シルト強くしまる。
7 黒褐色土　黒色シルトブロック多い、混ざり極少ない。[7層＝SK33埋土]
8 黒褐色土　4層に似る。[8～10層＝SK43埋土]
9 黒褐色土　5層に似る。
10 黒褐色土　6層に似る。
11 黒褐色土　シルト強く締まる。[11～12層＝SK32埋土]
12 黒褐色土　地山シルトブロック2cm大以下めだつ。
13 暗褐色土

第31図　SK31・34・33・32（S＝1／50）

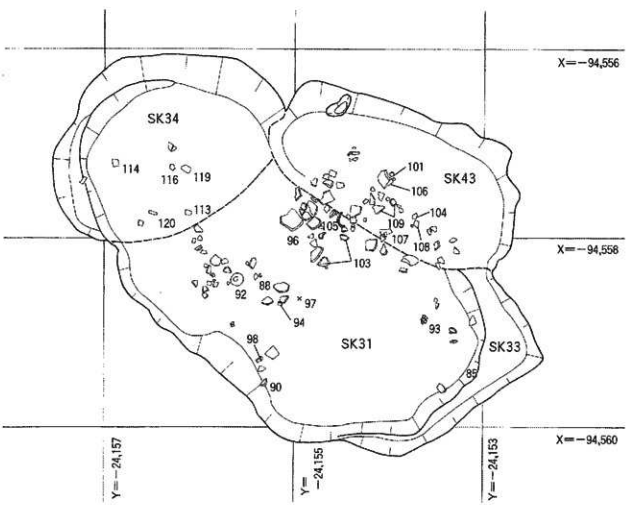
る。底面レベルは8.95m T.P.前後であり、やや凹凸がめだつ。SK31とは埋土がよく似ており、多量の遺物を含めて、SK31に由来するものと考えたい。出土遺物に破片が多いことも、傍証となろう。

SK31・33・34・43については、当初ひとつの遺構と考えて掘り下げたため、結果的に多量の遺物のほとんどは「SK31出土遺物」としてとりあげを行っている。出土遺物の章で後述するように、出土遺物のうち須恵器について5世紀後半～6世紀前半と時期的な幅がみられたため、記録した遺物の出土位置や層位から判断して、各土坑が掘られた年代を考えることとした。SK33・SK31は5世紀後半（東山111号窯期～東山11号窯期）の須恵器片が出土し、SK43からは6世紀前半（東山61号窯期）まで下がる須恵器片が混在して出土する。

なお、中世遺構として後記したSK11は古墳時代後期の土坑を再掘削したものと考えられる。

古　　代　溝状遺構のSD1のほか、SH2などの掘立柱建物も古代まで遡る可能性がのこる。本稿では、掘立柱建物（SH1・SH2）は図示（第34図、写真33）にとどめ、詳述は中世の稿で述べる。

SD1（第33図、写真34）　前半調査区5～6区で、幅0.8～1mの溝状遺構約9m分を検出した。埋土は、茶褐色土に灰色砂がめだち、やや軟質である。西半は10cm程度と浅く、少し西北西に傾きN55°Wを測る。東半6m分は、N77°Wで、やや深くなり9.20m T.P.付近が底面となる。

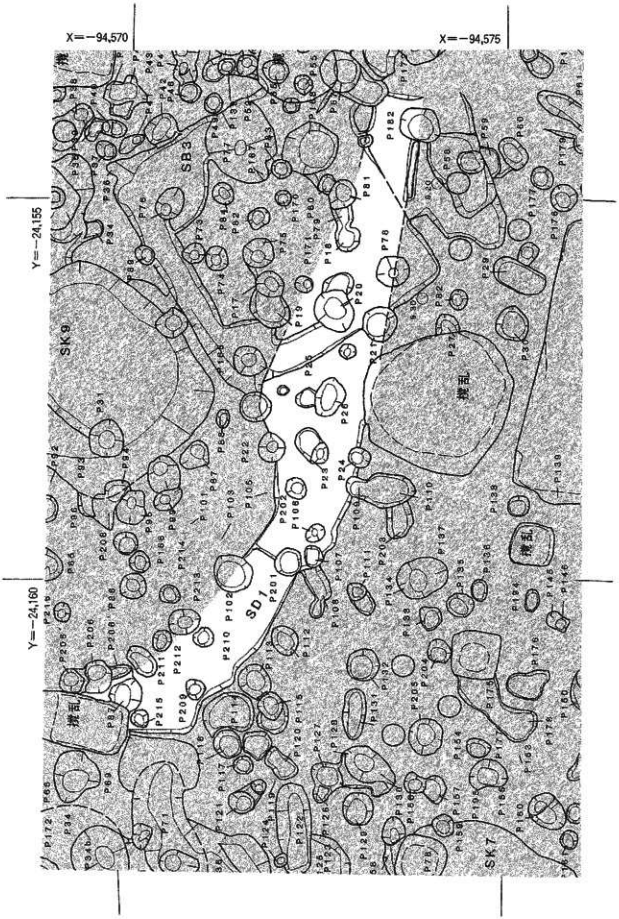


第32図　SK31・34・33・32　遺物出土状況（S＝1／40）

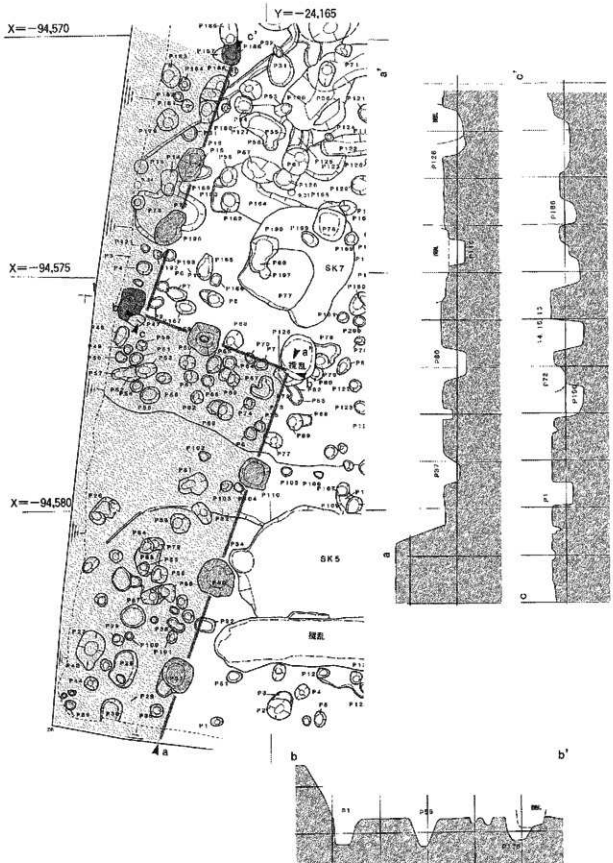
3次調査竪穴住居跡　一覧表

調査次	検出した区	遺構名　平面形	検出高(m)	床面高(m)	規模 主軸方向	規模 直交方向	長・短辺比率	面積(m²)	主軸方位
3次	5区	SB1 (方形)	9.3	9.1	[3.7]	[4.5]			N-38° -W
3次	9区	SB2							
3次	6区	SB3 隅丸方形	9.34	9.2	3.3	3.5	1.06	11.55	N-30° -W
3次	2・3・6・7区	SB4 方形	9.4	9.18	4.6	4.3	1.07	19.78	N-26° -E
3次	3・4区	SB5							
3次	3区	SB6 方形	9.5	9.25	5	4.6	1.09	23	N-20° -E
3次	3・4・7・8区	SB7 方形	9.54	9.19	6.3	5.8	1.09	36.54	N-33° -E
3次	18区	SB8 (隅丸方形)	9.35	9.25	[3.7]	[3.7]			N-44° -W
3次	19区	SB9 (隅丸方形)	9.42	9.38 ?	?				N-20° -E
3次	14区	SB10 (方形)	9.31	9.15	[2.0]	[2.7]			N-40° -E
3次	11・12・15・16区	SB11 隅丸方形	9.35	9.2～9.3	5	5.2	1.04	26	N-25° -W
3次	10・11・14区	SB12 隅丸方形	9.33	9.1～9.2	6.2	5.8	1.07	35.96	N-30° -W
3次	9区	SB13 (方形)	9.26	9.15	6.7	[6.7]	[1]	44.89	N-18° -E
3次	11区	SB14 方形	9.3	9.26	4.3	4.3	1	18.49	N-25° -W
3次	11・12区	SB15 (隅丸)方形	9.39	9.33	5	5	1	25	N-35° -W

	壁溝	柱穴 北西	柱穴 北東	柱穴 南東	柱穴 南西	合計	備考
SB1	[東辺、南辺]			5区P185		[1]	
SB2							中世の溝状または土坑状遺構
SB3	[東辺、南辺]						
SB4	[東辺、南辺]						
SB5							古墳時代墳丘墓→SZ1
SB6	南辺						
SB7		4区P28	4区P1	4区P7	3区P95	4	
SB8	北辺						
SB9	西辺						南西隅のみ壁溝状痕跡
SB10	北辺						
SB11	不明	15区P18	15区P13'	11区P69	11区P26	4	
SB12	北西辺	10区P83	14区P32	14区P101	(特定できず)	4	
SB13	南辺	9区P123	9区P130	9区P68	(調査区外)	4	
SB14	北辺、南辺、東辺	11区P87	11区P48	11区P47	11区P123	4	
SB15	西辺、南辺	11区P112	12区P12	12区P16	12区P33	4	



第33図　SD1（S＝1／50）



第34図　SH1・SH2（S＝1／80）

(2) 中世

この時期の遺構は、調査区全域にわたって点在していたが、特に南寄りに多く検出された。埋土中に中世遺物を含んでいた遺構を中心に述べる。

SK2　2区、調査区南壁にかかり検出された。最大幅6.2m、深さは完掘していないので不明である（地山面からの掘削深1.2m）。遺物は規模が大きいわりに少なく、また小片である。須恵器、山茶碗、土師器、中国陶磁、加工円盤などがある。灰釉平碗（617）、灰釉陶器（碗）などから15世紀中頃に埋没したものと考えられる。

SK3　2区、SK2の北西側で検出した。平面形は円形を呈する。直径約2×2.3mを測る。深さは完掘していないので不明である（地山面からの掘削深約1.2m）。貝殻が北東側から南西側に向かって廃棄された状況がみられた。貝層中に山茶碗を含む。山茶碗（碗・小皿）は、6型式（藤沢編年）に属することから、13世紀前半に埋没したと考えられる。

SK4　不整形な方形を呈する。1.6×1.2mを測る。深さ約0.18m。出土した山茶碗（小皿）は、東濃型白土原期に属することから14世紀前半に埋没したと考えられる。

SK5　1区で検出した。直径約3.4m、深さ約0.16～0.3mを測る。埋土は、灰茶色砂質土で非常に堅く締る。遺物は少なかったが、合子が古瀬戸中期1、山茶碗が東濃型大畑大洞新期、東海系7型式などであった。このことから14世紀中頃に埋没したと考えられる。

SK10　6区で検出した。東西（約2.8m）、南北約2.7m、深さ0.15～0.20mを測る。埋土は茶褐色土で上位がやや黒味が強い。中央部のピットはこの土坑を切る。出土遺物は、山茶碗（碗・小皿）がある。碗は6～7型式、小皿は6型式に属することから13世紀前半～中頃に埋没したと考えられる。

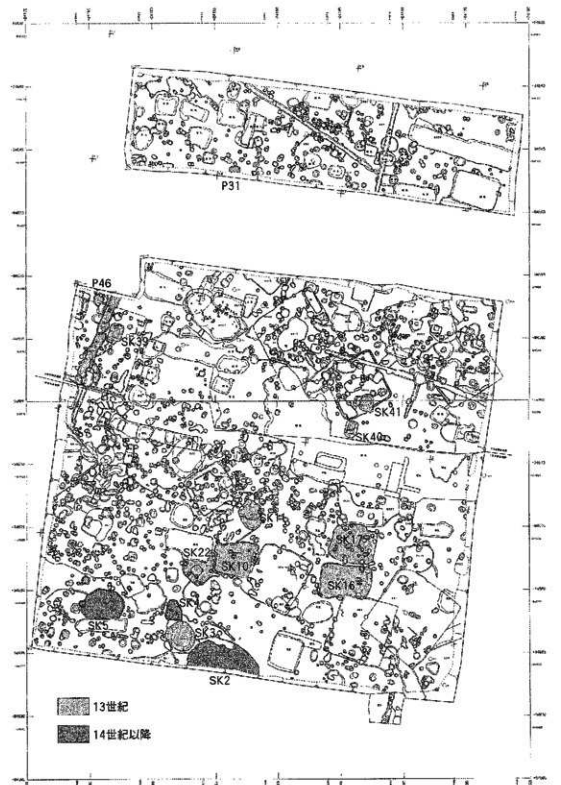
SK11　6区で検出した。不整な円形を呈する。1.9×1.6m、深さ0.65mを測る。埋土上面に貝殻の堆積がみられる。1、2層からは山茶碗、土師器、須恵器が出土するのに対し、3、5、6層からは土師器、須恵器が出土する。土層断面や底面の状況から2基の土坑が重複している。山茶碗（碗）、片口鉢は、6型式のものであることから13世紀前半に埋没したと考えられる。

SK16　3区で検出した。方形を呈し、東西約4.1m、南北約2.8m、深さ0.05～0.08mを測る。出土遺物は山茶碗（碗・小皿）がある。碗は6～7型式、小皿は7型式であることから13世紀前半～中頃に埋没したと考えられる。

底面の四周壁寄りにピットが検出された。7区P61は約0.4×0.35m、深さ約0.43mを測る。埋土は茶褐色土。土師器（皿）が出土した。7区P34も埋土は茶褐色土で、約0.3×0.3m、深さ約0.24mを測る。3区P4は約0.2×0.5m、深さ約0.42m、土師器出土。P5は約0.4×0.45m、深さ0.31mを測る。

SK17　7区で検出した。SK16の北に並列する。方形を呈するが、東側及び南側のプランは明確でない。東西（約3.5m）、南北約3.1m、深さ約0.07mを測る。SK16同様に浅い。山茶碗（碗・小皿）は東海型6型式、東濃型は丸石期であることから13世紀前半に埋没したと考えられる。また、床面で検出されたP48、P49から出土した山茶碗も6型式であった。

SK22　6区で検出した。北側を戦後の攪乱坑で、東側をSK10で壊される。不整形な方形を呈する。東西約2.4m、南北約2.7m、深さ約0.1mを測る。埋土は黒褐色土である。出土遺物は、須恵器、山茶碗である。



第35図　遺構配置図（S＝1／300）

SK39　9区で検出した。方形を呈する。東西約1.05m、南北約1.35m、深さ約1.85mを測る。埋土のうち、検出面から0.85mまでは粘性の強い茶褐色土が堆積していたが、その直下層には貝殻が多数含まれた混貝土層が堆積していた。最下層は水平堆積であるためていねいに埋めた可能性が高いが、上位層は上から土、貝殻を投げ捨てたようである。床面にはやや南寄りに山茶碗・碗4個、小皿1個が重なるようにして出土した。山茶碗（碗・小皿）は6～7型式である。

SK35・SK36・SK37・SK38・SK40　9区で検出した。南北方向に掘られた溝状遺構と土坑である。SK35は北端で検出した。幅0.3～0.45m、検出長約1.6m、深さ約0.25mを測る。茶褐色土を埋土とする。北壁土層で観察するとその上位層も遺構（P120）埋土である。須恵器、土師器、山茶碗、伊勢型鍋（口縁部片）が出土した。SK36は検出長約3.2m、幅約0.8m、深さ約0.2m（掘り込み面からは約0.75m）を測る。上位層は淡褐灰色土で包含層と区別がつきにくい。下位層は地山土を多く含む埋土である。SK37は検出長約3.5m、幅約0.8m、深さ約0.3mを測る。SK37の南端付近は多くの遺構が重複し判りづらい。埋土は茶褐色土である。須恵器、土師器、山茶碗が出土した。SK38はSK37と重複するが前後関係は判断しにくい。土層観察では後に掘られている。埋土は暗褐色土。検出長約1.6m、幅（1.1）m、深さ約0.25mを測る。西寄りは約0.33mと深い。須恵器、土師器、山茶碗が出土した。SK40は、SK37の南端部分で検出した。約0.8×0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は茶褐色土である。出土遺物は須恵器、山茶碗がある。

SK41　11区で検出した。隅丸方形を呈し、南北約1.4m、東西約1.1m、深さ約1.19mを測る。埋土は茶色土である。出土遺物は、須恵器、土師器（皿）、山茶碗、おろし皿がある。山茶碗は8型式、おろし皿は古瀬戸前期4から13世紀後半頃に埋没したと考えられる。

SK42　11区で検出した。約1.38×0.96m、深さ0.92mを測る。埋土は暗褐色土。出土遺物は、土師器、須恵器である。

1区P27　調査区南西隅で検出した。約0.55×0.70m、深さ約0.33mを測る。出土した山茶碗（碗・小皿）は7型式であることから、13世紀中頃に埋没したと考えられる。

1区P30　調査区南西隅で検出した。約0.4×（0.4）m、深さ0.28mを測る。出土した山茶碗（碗・小皿）は7型式であることから、13世紀中頃に埋没したと考えられる。

1区P39　P87、P86の周囲をP39とした。埋土は暗茶褐色土。出土した山茶碗（碗・小皿）は6型式である。

1区P53　約0.45×0.30m、深さ約0.22mを測る。埋土は黒褐色土。出土した山茶碗（碗）は6型式である。

5区P55　約0.5×1m、深さ約0.25mを測る。埋土は茶褐色土。山茶碗が多数出土した。

5区P57　P55の南側で検出した。約0.8×0.5m、深さ約0.25mを測る。埋土は茶灰色土。山茶碗の完形品1点が出土した。

5区P70　埋土は茶褐色土。須恵器、土師器、山茶碗、土錘、焼けた石が出土。

5区P72・73　約1.5×1.2m、深さ約0.16mを測る。埋土は茶灰色土。砂質土である。出土遺物は、須恵器、山茶碗（碗）、施釉陶器（皿）、砥石片、鉄片がある。山茶碗は大洞東期、皿は古瀬戸中期1か2で、13世紀後半から14世紀後半で差がある。

5区P77　約1.4×1.2m、深さ約0.15mを測る。埋土は黒褐色土。須恵器、甕形土器、山茶碗、中国陶

磁が出土した。山茶碗（碗）は、大畑大洞新期で14世紀後半。

5区P128　約0.45×0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土は茶灰色土。土師器、山茶碗、土錘が出土した。

5区P156　約0.25×0.25m、深さ0.13mを測る。埋土は茶褐色土。土師器、山茶碗（碗）が出土した。山茶碗は7型式。

5区P169　約0.2×0.2m、深さ約0.2mを測る。埋土は黒褐色土。遺物は片口鉢、四耳壺、焼けた割石がある。13世紀前半。

5区P206　約0.2×0.15m、深さ0.19mを測る。埋土は暗褐色土で黒味が強い。土師器、山茶碗（小皿）完形品、中国陶磁片が出土した。

6区P55　SB3の東側で検出した。約0.25×0.25m、深さ約0.2mを測る。埋土は黒褐色土。土師器（皿）が出土した。

6区P117　約0.48×0.35m、深さ約0.38mを測る。埋土は茶褐色土。山茶碗、土師器、陶丸が出土した。

6区P123　約0.3×0.28m、深さ約0.33mを測る。埋土は茶灰色土。6、7型式の山茶碗（碗・小皿）が出土した。

6区P147　約0.55×0.42m、深さ約0.5mを測る。埋土は茶灰色土。山茶碗（小皿）、陶丸2個、中国陶磁が出土した。

7区P14　約0.3×0.2m、深さ約0.27mを測る。埋土は茶褐色土。6型式の山茶碗（碗）が出土した。

7区P22　約0.5×（0.3）m、深さ約0.26mを測る。6型式の山茶碗（小皿）が出土した。

7区P95　SK26と重複し、東側が切られる。約0.95×（0.5）m、深さ約0.09mを測る。埋土は茶褐色土。7型式か8型式の山茶碗（小皿）が出土した。

16区P3　約0.5×（1.0）m、深さ約0.25mを測る。中世陶器瓶類底部片が出土した。

18区P31　約0.9×（0.5）mを測る。南壁に接して検出されたため完掘していない（掘削深は約0.73m）。埋土は茶褐色土。出土した山茶碗は7型式。

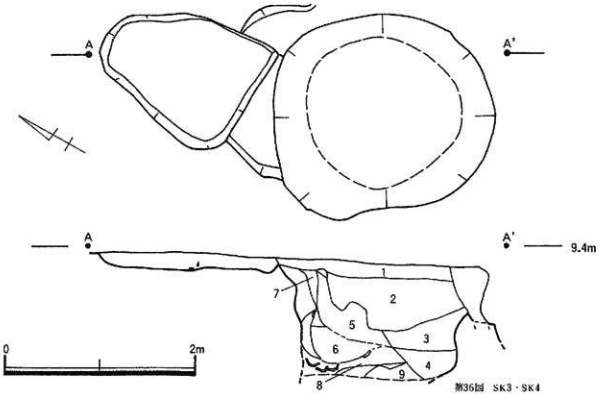
18区P62　約0.4×0.36m、深さ約0.28mを測る。埋土は灰茶色土。中世陶器が出土した。

1区、5区で検出したピット群の中で形状や規模が近似しており、直線状に並ぶピットを3列確認した。時期については古代にさかのぼる可能性がある。

SH1（5区P1－1区P59－P126－P110－P80－P37）　唯一し字形に検出されたことから、建物跡の一部である。約0.6m四方、深さは0.3～0.6mを測る。柱自体は直径0.1～0.2m程度と推定される。P126から須恵器、土師器、P110から須恵器、土師器、石斧、P80から土師器（皿）、山茶碗、P37から須恵器、土師器、山茶碗が出土した。

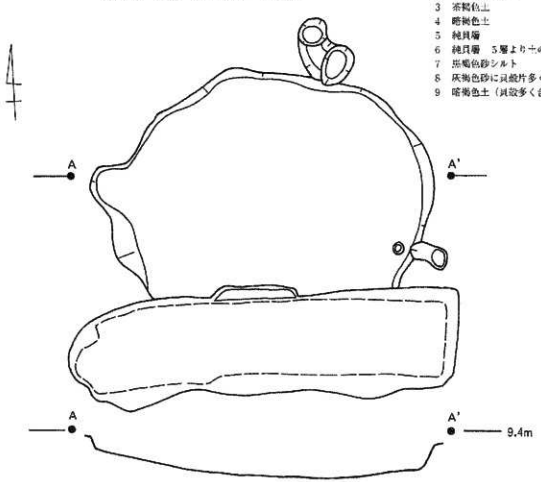
SH2（5区P180－P15・16－P190）　プランが隅丸長方形を呈するもので、長さ0.7～0.8m、幅0.4～0.5m、深さ0.5～0.6mを測る。芯々で1.5mほどの間隔で並ぶ。P180、P15・16、P190からは須恵器、土師器が出土した。長方形なのは柱を抜き取った可能性が高い。

5区P54－P162－P8（第34図）　直径約0.3mの小ピットである。深さは0.18（標高8.84）、0.44（標高8.79）、0.34（標高8.93）とまちまちであるが標高自体は同程度である。P54から須恵器、山茶碗、P162、P8から土師器、山茶碗が出土した。

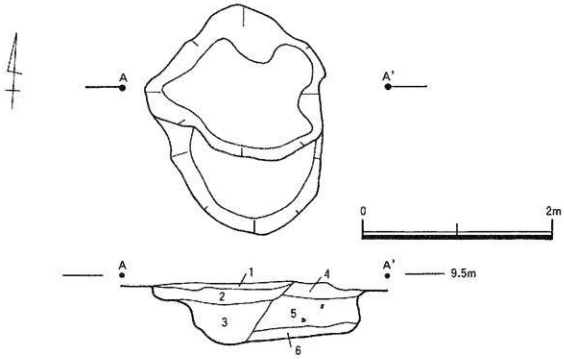


第36図　SK3・SK4（S＝1／40）

第36図　SK3・SK4
1　黒褐色砂シルト
2　黒褐色砂シルト
3　茶褐色土
4　暗褐色土
5　純貝層
6　純貝層　5層より土の量が多い
7　黒褐色砂シルト
8　灰褐色砂に貝殻片多く含む
9　暗褐色土（貝殻多く含む）



第37図　SK5（S＝1／40）



第38図　SK11（S＝1／40）

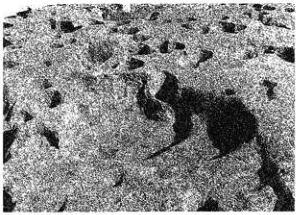
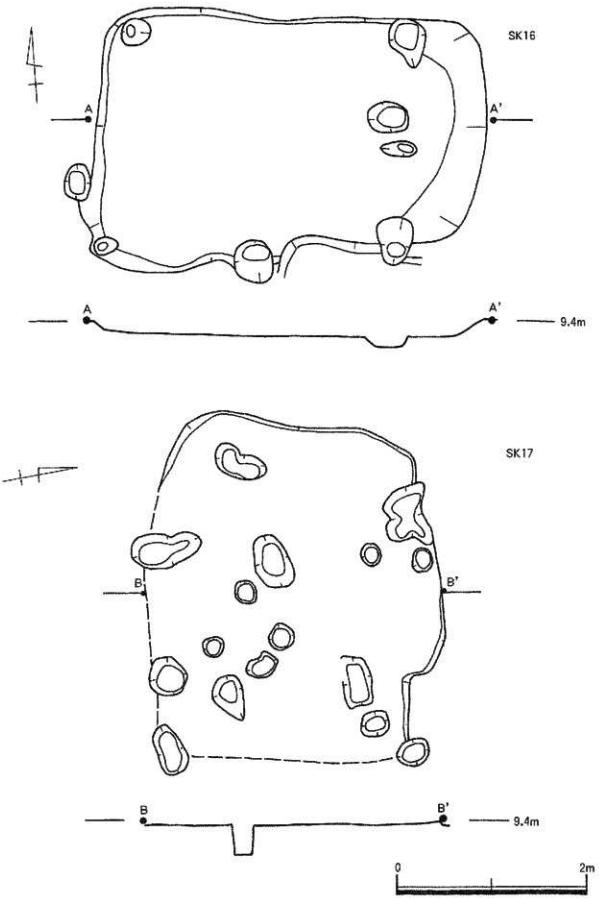
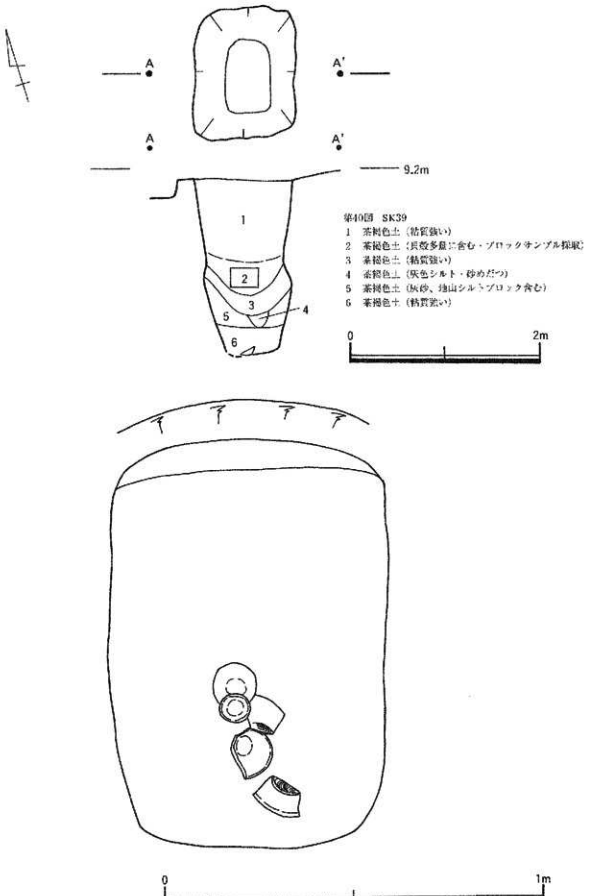


写真3　SK11

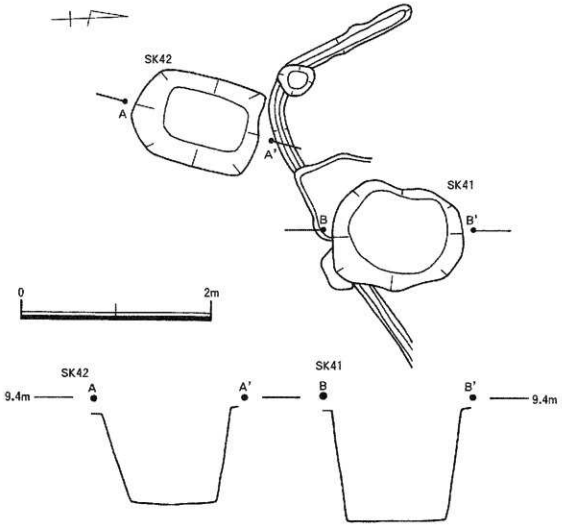
第38図　SK11
1　茶褐色土（瓦礫）
2　茶褐色土
3　茶褐色土
4　茶褐色土
5　茶褐色土（鉄滓骨含む）
6　茶褐色土（茶褐色土と地山の混土）



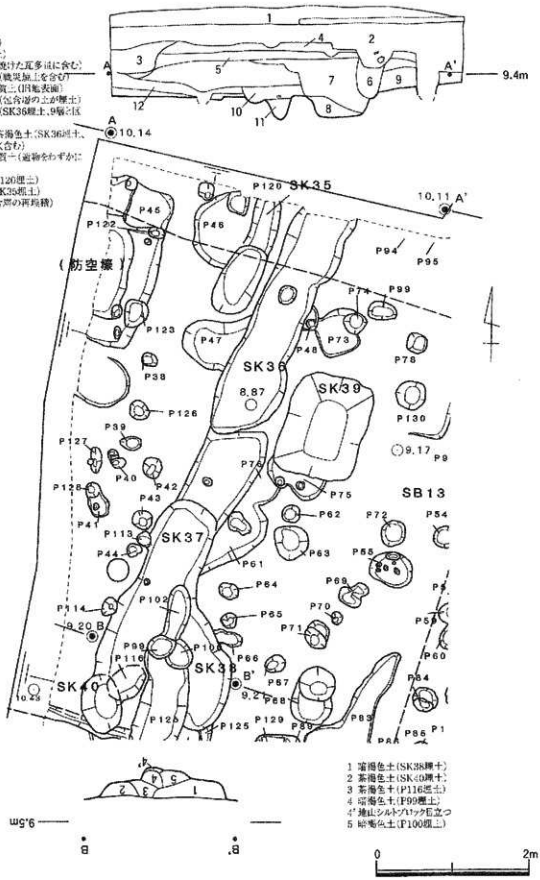
第39図　SK16・SK17（S＝1／40）



第40図　SK39（S＝1／40・S＝1／10）



第41図　SK41・SK42（S＝1／40）



第42図　SK38・SK40・p116（S＝1／50）

(3) 近世・近代

中世期の遺構は、遺物から15世紀中頃のものが下限である。その後近世の遺物もほとんど目にふれることがなく、近代にはいって再び出土する。

SK28　19区、20区にかけて検出した。幅約1.5m、検出長約8.4mを測る。掘削は約2.3mまで行ったが、危険なため埋め戻した。黒色砂質土で水分を含み泥状であった。遺物は陶磁器が多数含まれていた。出土品から明治後期頃と考えられる。上位層が溝内に落ちるように堆積している。またこの周辺は地山（シルト層）が削平され、下位の砂質土が露呈していた。地山の砂で埋められた後、SK28は掘られている。

東雲窯に関連する遺構　いずれも調査区壁で検出した。東壁（8区）断面で検出したSK20、南壁（3区）断面で検出した窯体の一部と灰層（3～7層・10～12層）、同じく南壁断面で検出した土坑（1区P7、南壁33～38層）、ピット（3区、南壁21層）である。

SK20　南北1.4m×東西0.6m×深さ0.6mを測る。土坑内は遺物が充填された状態であった。遺物はコンテナケース18箱あり、その大半はエンゴロ（匣鉢）、タナイタを主とする窯道具で、製品、未製品はわずかである。製品等の一部には「東雲」銘の刻印が押されているものがあり、東雲窯の窯屋に関係する廃棄土坑であることが判明した。

窯体　南壁断面に見えたハコグレは、窯体の一部と考えられ、その下層は被熱により包含層が焼けて赤褐色を呈していた。そのため、調査後南側を一部拡張した。タナイタ、ハコグレが5個並列して約2.5m分検出された。窯体の焚口付近と推定され、地山が被熱により赤褐色を呈していた。本来は西側に窯が築かれていたと推定されるが、完全に削平されていた。

1区P7　地山面ではわずかにくぼむ程度であるが、南壁土層断面で観察すると、深さ約50cmを測る。土坑は重複が認められる（原図46・47層→45層／報告書37・38層→36層）。

南壁（3区）21層　調査区南壁で検出した。橙色土及び茶褐色土で焼けた窯の壁ブロックを含む。検出長約0.7m、現地表から底面まで約0.6mを測る（原図9層）。

防空壕1　18区で検出した。東西約1.5m、南北約2.9m、深さ約0.81mを測る。長方形を呈する本体に直交する形で出入口が南側に取り付く。東側から出入りする。出入口部は、幅約0.8mで地山を削り階段が造られる。本体底面には、南辺に沿い溝が掘られ、南西隅に水が溜まるようになっている。また本体の北東部は東側に張り出しが造られている。地山面から深さ約0.52m（床面から約0.26mの高さ）をもつ。腰掛けであろうか。周囲の壁は炭化材が付着していたことから、焼失したものと考えられる。

防空壕2　15区で検出した。東西約1.7m、南北約2m、深さ約0.2mを測る。調査区北壁にかかるため、土層断面では深さは約1.85mを測る。戦災で焼けた瓦、壁土塊で充填されていた。南東部に突出部があり出入口の一部と考えられる。

防空壕3　9区で検出した。調査区東壁にかかり一部が検出された。南北約2.1mを測る。土層断面では、深さは0.6m以上を測る。中央部に向かって深い。戦災で焼けた瓦で充填されていた。調査区壁の崩落のおそれがあり、完掘しなかった。

16区P4　約1.4×1m、深さ0.14mを測る。埋土は、灰褐色土で炭化物、焼土、瓦で充填されていた。

柱穴列　14区、15区、12区にかけて方形のピットが7基一直線に並んで検出された。一辺0.8～1m、深さ0.4～0.5m（標高8.8～8.9m）を測る。底面には平坦な面を上に一辺0.3～0.4mの角石が据えられてい

た。芯々2mないし4.5mと一定していない。

その他　11区、12区、18区、19区では下水管が布設されていた。また、14区調査区北壁では常滑甕が2基並置されていた。甕の口径約0.5m、器高約0.55m。便所の便槽として用いられていたものと思われる。

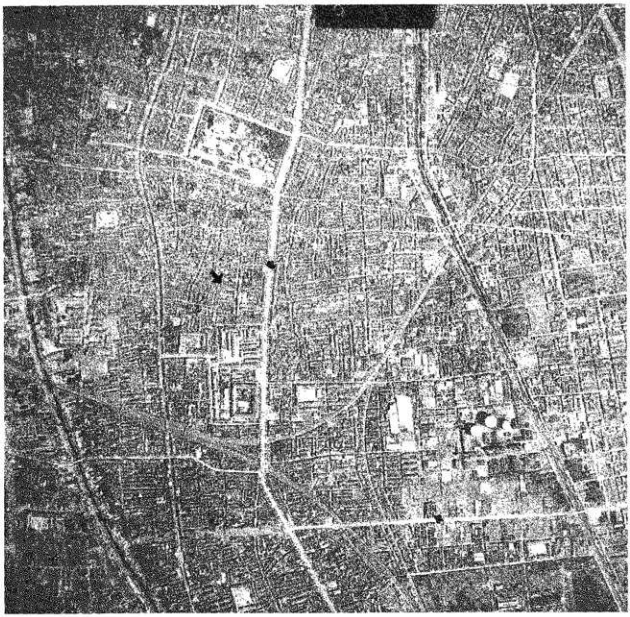
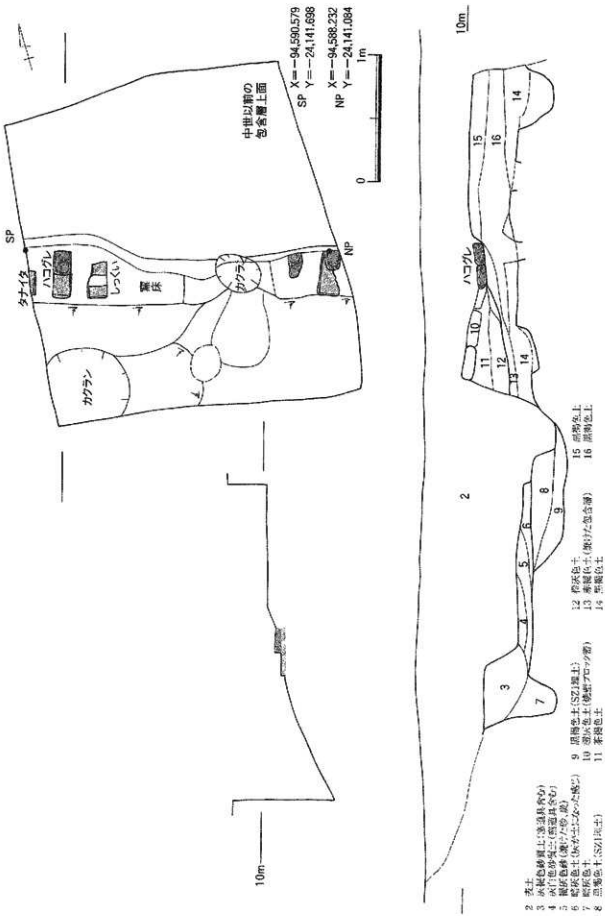
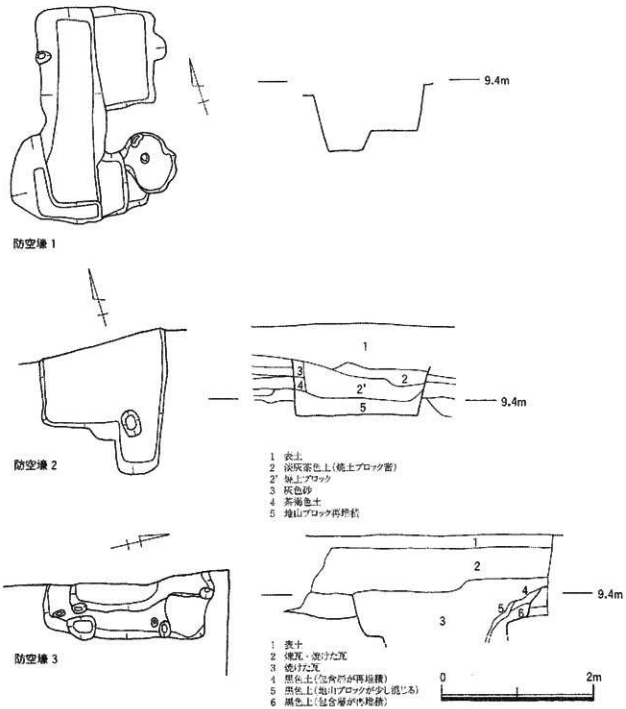


写真4　戦前の空中写真　国土地理院所蔵（→付近が調査地点）

【東雲窯の位置】　昭和4年、昭和8年の住宅地図と対照すると→の4mm右（東側）の南北の道路が東雲町内を通じている道路にあたる。その東側の大通りが大津通である。大津通に面し、調査地点と現金山駅の間にある広い敷地の施設は、名古屋地方専売局（明治30年に名古屋葉煙草専売局として設置される、東北の一角は名古屋税務署）である。東雲窯は、当時はすでに横井米窯の本窯窯となっていたが、こうした位置関係から、→の2mm下（南側）にみえる白い建物2棟が窯と成形、絵付け等を行う作業場と推定される。調査で検出された窯跡の位置から、東側が窯の入る建物、西側が作業場であろう。横井家自宅は窯の北側に位置する。


SP
NP
ハコフレ
カクラン
中世以降の
包含層上面
SP X＝−94,590.579
Y＝−24,141.696
NP X＝−94,588.232
Y＝−24,141.084
0
1m
10m
2 表土
3 灰色砂質土(淡茶褐色砂)
4 灰白色砂質土(茶褐色砂)
5 黒灰色砂(黒ボク砂・泥)
6 暗灰色土(灰ケヤキ・ケヤキ炭)
7 暗灰色土
8 黒褐色土(SX1埋土)
9 黒褐色土(SX2埋土)
10 暗灰色土(砂岩ブロック密)
11 茶褐色土
12 暗茶色土
13 茶褐色土(砂岩ブロック含む)
14 黒褐色土
15 黒褐色土
16 黒褐色土

第43図　窯跡（S＝1／30）



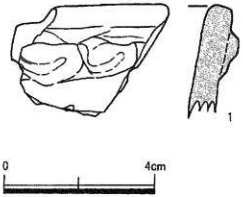
第44図　防空壕（S＝1／50）

第3節　遺物

出土した時点でコンテナケース76箱分収納した。主要な遺物は、土師器、須恵器、中世陶器、東雲窯に関係する窯道具である。なお土師器の小片は、時期の判断が難しいので特にことわりのない限り古墳時代（縄文・弥生土器も含む）から中世までの時期のものである。

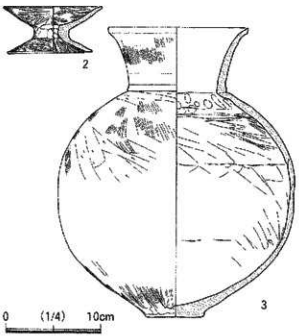
(1) 縄文時代～弥生時代　弥生時代以前の遺物の出土は、きわめて少ない。周溝SZ1の埋土から、突帯文のめぐる土器片が1点出土している。丸い口縁端部の直下に突帯をめぐらし貝殻で施文している。小片かつ磨耗が激しいため、条痕等は確認できない。縄文時代末から弥生時代初めの土器片と思われる。

写真5　突帯文土器



第45図　突帯文土器

(2) 古墳時代　古墳時代前半の遺物は多くない。SZ1周溝から、廻間Ⅲ式期（4世紀初頭）の土師器が出土する。小型の器台（2）は、鼓形を呈し、内外面はていねいにミガキが施される。壺（3）は、頸部からまっすぐに立ち上がりやや開き気味に終わる口縁部を持つ。



第46図　SZ1（周溝）出土土師器

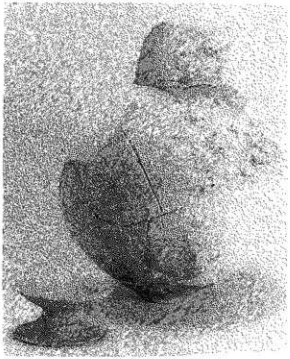
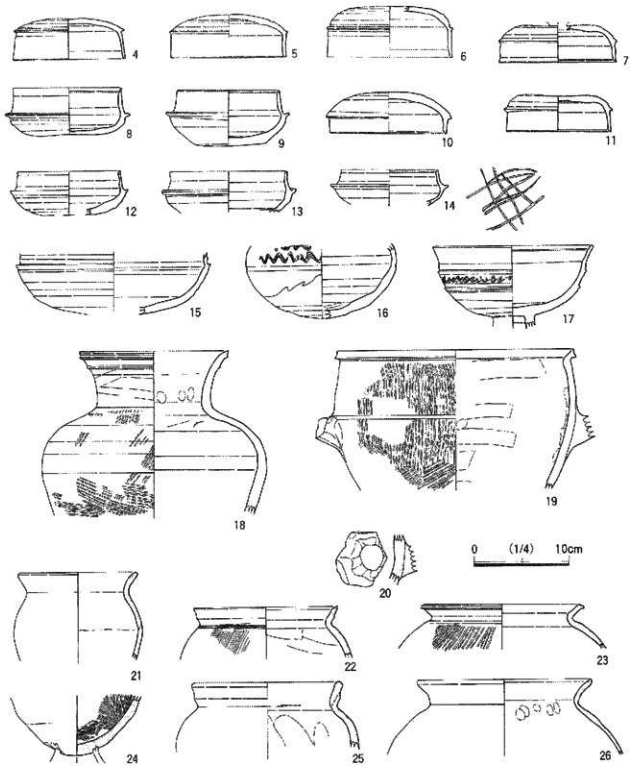
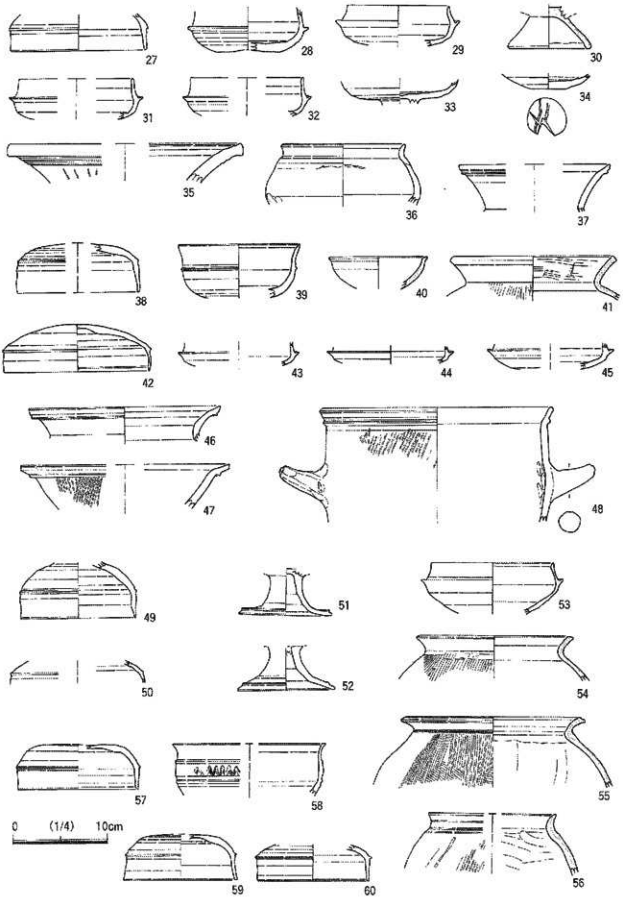


写真6　SZ1周溝内出土遺物

古墳時代後半の遺物は多く、竪穴住居跡や土坑からまとまって出土している。SB1から須恵器・土師器が床面付近およびSK14内埋土から集中して出土している。床面付近から出土する須恵器・蓋杯類は受け部が長いなど古い様相をのこし、東山11号窯期直後から城山2号窯期までの5世紀後半代の時期が考えられる。SK14埋土中から出土する壺（18）、高杯（15）や杯蓋（10）は、5世紀末～6世紀初頭の東山10号窯期まで時期が下がる可能性が高い。

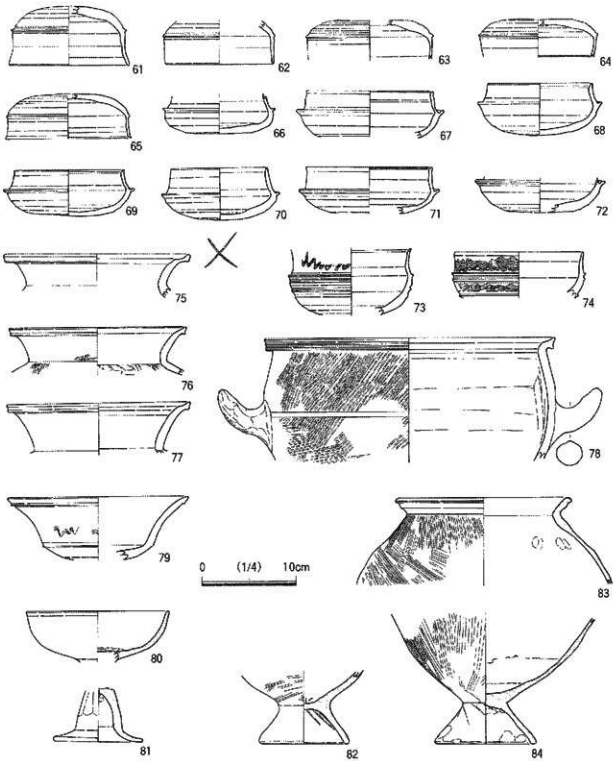


第47図　SB1出土遺物（10～11・15・18～19・24・26はSK14内）

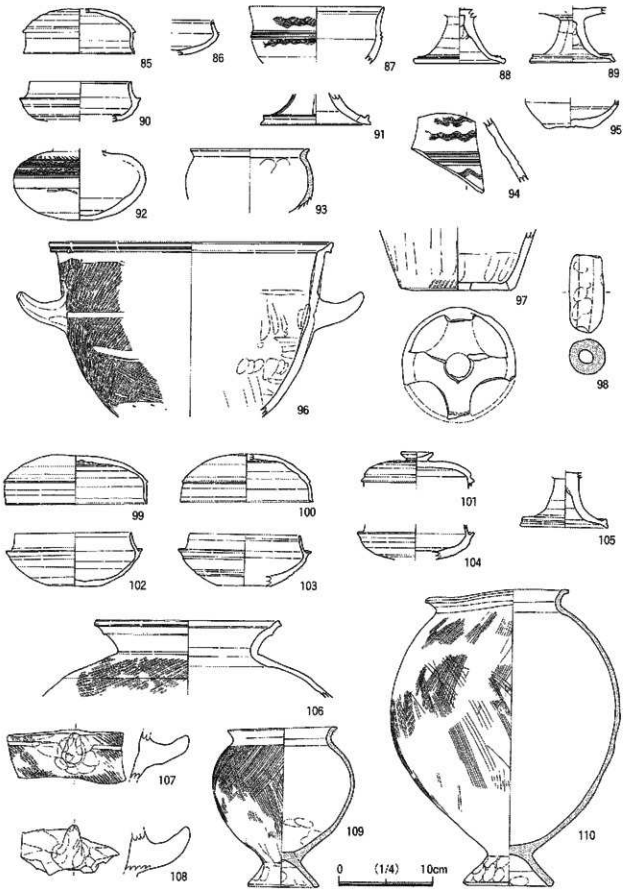


第48図　住居跡（SB）出土遺物（60のみピット出土）

SK9やSK31などの土坑から、須恵器・土師器がまとまって出土している。とくに、SK9出土須恵器は、古い様相を示すものは東山窯開窯期の東山111号窯期の製品に近似する。ただし、時期的にはやや時間幅がみられるようであり、城山2号窯期までのものを含むと思われる。今回の調査では、遺物群としては最も古い年代観が与えられ、続いてSB1・SK31の順に5世紀代の遺構出土遺物として位置づけられよう。また、SK9では（79）のように本来須恵器の器形にない高杯の出土も注目される。



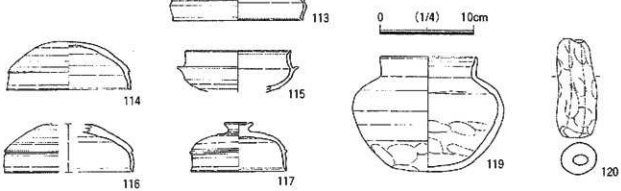
第49図　SK9出土遺物



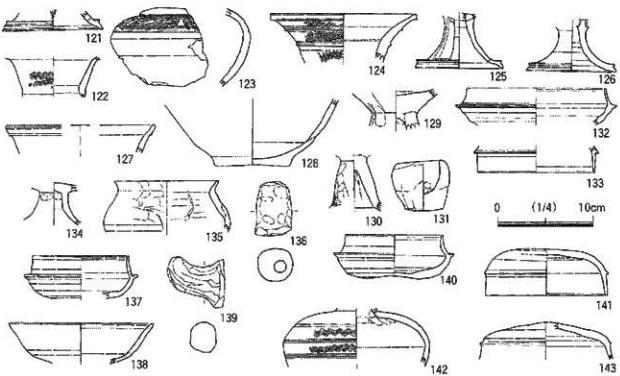
第50図　SK31・43出土遺物（85～95・97～98；SK31、96・99～110；SK43）

SK31は高杯・脚部（91）や壺（92）のように城山２号窯期までの須恵器を含むものの、東山11号窯期のものが主になってくる。SK34ではさらに東山10号窯期まで下がるものと考えられる。SB1やSK9・SK31などから出土する5世紀代の須恵器には、蓋杯・有蓋高杯・無蓋高杯・壺・甕・甑などがみられ、瓶の出土はめだたない。

SK43出土とした須恵器の蓋杯類は口径が大きめであり、６世紀前半の東山61号窯期まで下がる可能性が高い。また、竪穴住居出土須恵器の中にもSB7の主柱穴から出土した（42）のように、６世紀前半まで時期が下がるものがみられ、今のところ古墳時代集落の下限を示すものと考えられる。



第51図　SK32・34出土遺物（111～112；SK32、113～120；SK34）



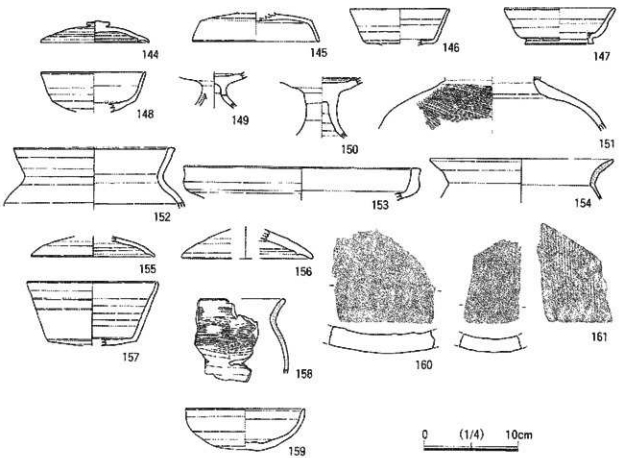
第52図　土坑・ピット（SK・P）出土遺物

(3) 古　代　　古代の遺物は、SD1からまとまって出土するほか、SB1住居跡の上面や、各区のピットなどに散見する。

SD1出土の須恵器は、返り蓋を含む蓋類・有台杯などの杯類・高杯・甕・壺・盤または皿などがみられ、7世紀後半の年代観があたえられる。土師器片は、小片がめだつ。

（155・156）は、SB1の北端の上層から出土した須恵器・返り蓋である。またSB12内のP65からは、須恵器・杯（157）と土師器・甕片（158）が出土する。

須恵器・土師器以外の古代の遺物としては、平瓦片がある。凸面は、（160）がタタキ擦り消し、（161）が縄目タタキであり、凹面はともに植巻き作りの布目痕が残る。今回の調査地点の南西約600mに7世紀後半代に建立されたという尾張地方最古の寺院「願興寺」（遺跡名は尾張元興寺跡）では大量の瓦が使用されたと考えられる。今回出土した瓦片も、「願興寺」に由来するものと思われ、当調査地点へ運ばれたものと考えたい。

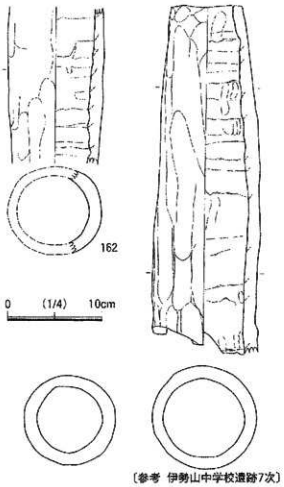


第53図　SD1

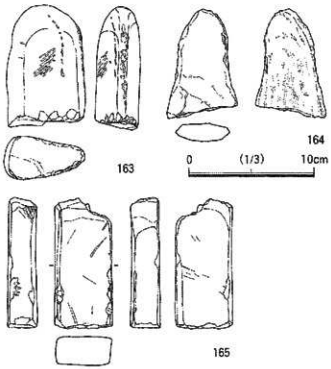
その他の古代に属する遺物として、須恵器・土管が出土している。前半調査区の表土除去作業中に、南半中央付近の2・6区付近で表採された。みつかった土管（162）は、復元径が10cmであり、内面に粘土の継ぎ目痕が残り、外面はケズリ痕が明瞭であり、一部に自然釉がかかる。

古代の土管の出土例は、近隣では調査地点から西へ約400mの伊勢山中学校遺跡6次と7次調査で出土している。うち、参考資料として図示した伊勢山中学校遺跡7次黒褐色土包含層出土の1例は、残存長36cm・径8～11cmを測り、径が小さいほうの端部がのこっている。成形痕などは、今回の出土例とよく似る。もう1例の6次調査SK46出土の土管は、胎土・焼成ともに陶器に近く、褐色の釉が外面に施される。今後細かな年代観等の検討が必要と思われるが、付近の遺跡においてこうした土管が使用されたことについて、またひとつの手がかりを得たと思われる。

古代以前の出土遺物について、最後に石製品にふれておく。石製品は3点のみ確認されている。(163)は砂岩製の叩き石、(164)はホルンフェルス製の打製石斧の断片と考えられ、後者は縄文時代まで遡る可能性がある。(165)は砥石であり、砂岩製と思われる。



第54図　土製品（土管）



第55図　石製品

遺物観察表

図版番号	器種名	出土遺構名	法量 口径	法量 器高	法量 底径	特徴	備考	実測図番号
1	縄文土器 深鉢	4区 SZ1				突帯文	口縁部はわずか	121
2	土師器 高杯	4区 SZ1	10.35	4.9	8.9	内・外面ミガキ	完形	67
3	土師器 皿	4区 SZ1	(14.9)	30.7	6.1	外面ハケメ	底部完存	66
4	須恵器 甕	SB1 No.3・4	(11.9)	4.4			底部30%	50
5	須恵器 甕	SB1 No.109	(12.2)	4.5		破線12.55	破部50%	118
6	須恵器 甕	SB1 南上址 No.110	(13.3)				底部15%	119
7	須恵器 甕	SB1 No.11	(12.4)				底部30%	55
8	須恵器 甕	SB1 SB1No.15+SB1・SK14No.1	(11.5)	5.1			口縁部40%	57
9	須恵器 甕	SB1 No.16	10.8	5.9	7.5		口縁部40%	56
10	須恵器 甕	SB1 No.3+SK14	(12.4)	4.45		破線13.3	底部20%	49
11	須恵器 甕	SB1 No.2+SB1 底面+SK14	(11.1)	2.9		破線11.4		48
12	須恵器 甕	SB1 東上址南 No.15	(10.9)				口縁部15%	58
13	須恵器 甕	SB1 No.9	(12.4)				口縁部10%	54
14	須恵器 甕	SB1 東上址内 No.20	(10.2)				口縁部20%	59
15	須恵器 壺	SB1 西壁、SK14下上+SB1P185	(20.45)				底部30%	62
16	須恵器 壺or甕	SB1 No.5・8・東壁				(体部呼15.95)	体部25%	51
17	須恵器 高杯	SB1 No.1	16.9			杯部底部文、底部ヘラ削り	口縁部65%	47
18	須恵器 皿	SB1 No.4+SK14	(15.1)			杯部タタキ	口縁部20%	115
19	須恵器 鉢	SB1 底面、SK14の南上	(25.05)			高台付 外面タタキ	口縁部はわずか	63
20	土師器 把手	SB1 東上址 No.101						120
21	土師器 甕	SB1 No.112 東面	(12.7)				口縁部20%	116
22	土師器 甕	SB1 南東+SB1 西壁内	(15.2)			外面ハケメ	口縁部15%	65
23	土師器 甕	SB1 No.113 東面	(16.2)			外面タタキ	口縁部10%	117
24	土師器 台付甕	SB1 No.3+SK14				内面ハケメ		53
25	土師器 甕	SB1 No.5	(19.0)				口縁部15%	52
26	土師器 甕	SB1 西壁、SK14南上	(18.4)				口縁部30%	64
27	須恵器 杯蓋	SB3 北端・東壁ベルト3層	(14.2)				表部10%	80
28	須恵器 杯身	SB3 P58 東半 第二含む				受部径(12.8)	受部30%	69
29	須恵器 杯身	SB3 東壁ベルト1・3層	(10.8)				受部20%	76
30	土師器 台付甕	SB3 北部 東壁ベルト2層			8.9	底部呼4.8を内側に折り返し	底部85%	77
31	須恵器 杯身	SB3 西				受部表面	口縁部はわずか	78
32	須恵器 甕	SB3 P58 東半 第土含む					口縁部はわずか	70
33	須恵器 高杯	SB3 西南一北東ベルト3層						81
34	須恵器 杯身	SB3 北西上位			8.9	底部に赤い物質	底部20%	84
35	須恵器 鉢	SB3 北西下位				底部に朱色文	口縁部はわずか	85
36	須恵器 甕	7区 SB4 北端付近	(13.25)				口縁部25%	4
37	須恵器 甕	SB6 (3区SK15西半 第土Br.混土)					口縁部はわずか	6
38	須恵器 杯蓋	5区 SK13b					残存わずか	7
39	須恵器 高杯	SB4 北東 黒褐Br.土	(12.9)				基部10%	68
40	土師器 甕?	SB6 (3区SK15西半 暗褐Br.混土)	(10.35)				口縁部10%	5
41	土師器 甕	SB6 (3区SK15 セクベルト南部)	(16.7)			内・外面にハケメ	口縁部20%	13
42	須恵器 杯蓋	SB7 (8区P1 SB7北西部穴)	(11.9)	5.0		上部全体に磨痕	表部はわずか	1
43	須恵器 杯身	SB7 (SK19 東半)					残存わずか	72
44	須恵器 甕	SB7 (7区SK19西半)				受部径(13.4)	受部10%	9
45	須恵器 甕	SB7 (7区SK19西端)					残存わずか	71
46	須恵器 甕	SB7 (7区SK19西半)	(20.2)				口縁部20%	70
47	須恵器 甕	SB7 (7区SK19西半)				外面タタキ	口縁部はわずか	73
48	須恵器 甕	SB7 (7区SK19根半+SK19南)	(24.8)			把手付 外面タタキ	口縁部20%	17
49	須恵器 杯蓋	8区 SB8 南側	(12.2)				基部10%	3
50	須恵器 杯蓋	9区 SB9 北西部 黒褐土					残存わずか	12
51	須恵器 高杯	11区 SB11P1 P24		(4.8)	(9.6)			882
52	須恵器 高杯	11区 SB11P1 P35		(4.8)	(10.2)			883
53	須恵器 杯蓋	10区 SB12 P35	(12.0)	(3.4)			口縁部30%	856
54	土師器 皿	10区 SB12 P35 南半	(16.6)	(4.3)		外面ハケメ	口縁部25%	857
55	土師器 甕	10区 SB12 P68	(19.4)	(7.3)		外面ハケメ	口縁部20%	858
56	土師器 甕	10区 SB12 P62		(6.4)		外面ハケメ	口縁部はわずか	850
57	須恵器 甕	11区 SB14 P65	(12.4)	(4.7)			表部30%	845
58	須恵器 高杯	12区 SB15 P30		(5.6)		破線呼6.8 外面縦状文	口縁部はわずか	848
59	須恵器 杯蓋	12区 SB15 P39	(12.0)	(4.8)			表部30%	847
60	須恵器 杯蓋	2区 P32		(1.2)	(10.6)			841
61	須恵器 杯蓋	5区 SK9 セク西No.9	(12.8)			表部径(12.8)	表部15%	30
62	須恵器 杯蓋	6区 SK9 アゼ西 No.12	(11.5)				表部はわずか	33
63	須恵器 杯蓋	SK9a NW-SBベルト39層 No.23				破線(13.6)	底部20%	42
64	須恵器 杯蓋	SK9b 主にSB2ベルト北側No.30				破線(12.6)	表部20%	39
65	須恵器 杯蓋	6区 SK9b 南部	(13.35)				表部25%	46
65	須恵器 杯身	5区 SK9 セク西No.8				受部径11.65	残存わずか	29

図版番号	器種名	出土遺構等	法量			特徴	備考	実測番号
			口径	器高	底径			
67	須恵器 甕	5区 SK9ナ西層ナゼ的 No.7	(23.1)				口縁部30%	28
68	須恵器 甕	5区 SK9セ西ネ下ゼ的 No.25	(11.1)	5.35	(4.4)		口縁部25%	45
69	須恵器 甕	5区 SK9セ西ネ下ゼ的SK9南下No.24	11.7	4.9	(5.2)		口縁部35%	43
70	須恵器 甕	5区 SK9ヘ下ゼ的十下層No.35	10.25	5.8	(4.0)	底部完存 穴	口縁部40%	41
71	須恵器 甕	5区 SK9北西上下ゼ的No.15	(12.6)				口縁部30%	36
72	須恵器 甕	6区 SK9aNo.18				受部平 (3.3)	受部15%	38
73	須恵器 高杯	6区 SK9ナ下層No.17				外面波状文、受部径(13.3)	受部20%	34
74	須恵器 高杯	5区 SK9セ下層No.6	(15.6)			脚端部、外開波状文	口縁部20%	27
75	須恵器 壺	6区 SK9ナ下層No.11	(19.8)				口縁部25%	31
76	須恵器 壺	6区 SK9ナ西No.11	(18.9)			外面タタキ	口縁部30%	37
77	須恵器 壺	6区 SK9ナ西層ヘ下SK9aNW-SEベルト	15.4				口縁部40%	41
78	須恵器 壺	5区 SK9西北上下ゼ層No.17	(30.9)			肩下に 外面タタキ	口縁部30%	37
79	須恵器 高杯	5区 SK9セ下西 6区 SK9東半	(19.2)			外面波状文	口縁部	26
80	土師器 高杯	5区 SK9セ下西No.7	(15.2)				口縁部25%	25
81	土師器 高杯	5区 SK9aJ西層No.21			9.5			40
82	土師器 手捏壺	5区 SK9ナ下西No.3			6.5	外面ハケメ	胴部完存	22
83	土師器 壺	SK9a No.15	(18.7)			外面ハケメ	口縁部20%	35
84	土師器 台付甕	5区 SK9セ下西No.2			10.8	外面ハケメ	脚部完存	23
85	須恵器 甲蓋	SK31 No.1	(11.6)	4.7			口縁部10%	824
86	須恵器 甲身	SK31 北西ベルト下No.105		(3.5)				829
87	須恵器 蓋杯	SK31 北西ベルト中層蓋	(12.5)			無整形平、外面波状文	口縁部15%	105
88	須恵器 蓋杯	SK31 No.72			(9.45)	外面波状文	底部15%	107
89	須恵器 蓋杯	SK31 No.81			(9.1)	平外面	高部10%	108
90	須恵器 甲身	SK31 No.6	(10.7)				口縁部30%	103
91	須恵器 高杯	SK31 南北ベルト4層底		(3.3)	(11.8)	透かしあり		831
92	須恵器 壺	SK31 No.71		(7.6)		外面波状文・刺突文		830
93	土師器 鉢?	SK31 No.5	(11.5)				口縁部ほぼ全	99
94	須恵器 甕	SK31 No.69		(9.5)		突帯・波状文		833
95	須恵器 甕	SK31 No.89			4.9	底部編痕	底部完存	104
96	須恵器 鉢	SK43 (SK31 No.27)	(30.0)	(18.5)		肩平に 外面タタキ	口縁部20%	837
97	須恵器 甕	SK31 No.70			(12.4)	外面タタキ・板ナデ	底部50%	114
98	土師	SK31 No.8				長5(8.2) 幅3.7 孔径1.5	10g	112
99	須恵器 杯蓋	SK43 (SK31 南西部—北西ベルト)	14.8	3.2			完存50%	873
100	須恵器 杯蓋	SK43 (SK31No.116—北ベルト西4層)	(11.9)	3.1			口縁部10%	825
101	須恵器 杯蓋	SK43 (SK31 No.26)				稜線(12.6)	稜部30%	110
102	須恵器 杯身	SK43 (SK31 ベルト北西層 No.106)	(12.3)	5.6	3.55		口縁部30%	102
103	須恵器 杯身	SK43 (SK31 No.44・48)	(11.65)		(5.8)		受部15%	107
104	須恵器 杯身	SK43 (SK31 No.24)				受部径(12.4)	受部15%以下	109
105	須恵器 蓋杯	SK43 (SK31 No.59)			(9.3)	内外面に編痕	底部20%	106
106	須恵器 蓋	SK43 (SK31 No.25)	(19.8)	3.0?		外面タタキ	口縁部20%	834
107	須恵器 椀or鉢	SK43 (SK31 No.31)		5.3?		記事		835
108	須恵器 椀or鉢	SK43 (SK31 No.23)		5.2?		記事 外面タタキ		836
109	土師器 台付甕	SK43 (SK3、No.38・40)	11.8	17.0	7.5	外面ハケメ	口縁部70%	98
110	土師器 台付甕	SK43 (SK31 No.54・65・56・52他)	15.2	21.25	9.5	外面ハケメ	口縁部50%	97
111	須恵器 高杯	9区 SK32 No.1	(11.2)	10.1	9.9		口縁部30%	2
112	須恵器 甲蓋	SK32 [illegible]				受部平(12.7) 端石・無整あり	受部20%	8
113	須恵器 甲蓋	SK34 (SK31 No.85)	(13.8)	(4.9)			蓋部20%	100
114	須恵器 甲蓋	SK34 (SK31 No.12、サブトレ南西)	(13.2)	5.1			蓋部10%	826
115	須恵器 甲身	SK34 (SK31 北西サブトレ)	(11.0)	(6.4)			口縁部15%	828
116	須恵器 甲蓋	SK34 (SK31 No.89+10.北 北北東3)		(5.1)			蓋部はわずか	827
117	須恵器 甲蓋	SK34 (SK31 No.93)	10.15	5.15		つまみ径3.0	完形	111
118	須恵器 甲?	SK32 [illegible]	(26.5)			外面タタキ	口縁部10%	14
119	須恵器 蓋	SK34 (SK31 No.88・90・サブトレ西3)	(10.4)	12.2	3.8		口縁部10%	832
120	二彩	SK34 (SK32 No.91)				長8(19.6) 幅4.2 孔径1.65	蓋部38g	116
121	須恵器 高杯	2区 SK10 F等		(2.1)	(13.6)	透かし		538
122	須恵器 壺	6区 SK11 不明		(4.4)		波状文		613
123	須恵器 甕	6区 SK11 不明		(8.6)		波状文		614
124	須恵器 甕	8区 SK12	(15.5)				口縁部3/4がすぐ	19
125	須恵器 蓋杯	8区 SK12			(9.3)	透かしあり、波状文	脚部30%	18
126	須恵器 蓋杯	7区 SK26 P60		(5.5)	(9.4)	稜線に自然釉		851
127	須恵器 鉢	3区 SK15 P106					口縁部にわずか	15
128	土師器 壺	SK18 東平			7.6	外面ごく一部ハケ痕		129
129	土師器 台付甕	SK21 黒褐色土層LIBr.赤土				脚端部厚4.7		76
130	土師器 高杯	7区 SK21 黒褐色土層LIBr.赤土				脚端部厚2.7		75
131	ミニチュア土師器	18区 SK29	4.5	5.30	4.5	手づくね	完形	128
132	須恵器 甲蓋	SK34 [illegible]	(14.5)			受部径(17.0)	受部20%	11

図版番号	器種名	出土遺構等	法量			特徴	備考	写真図版番号
			口径	器高	底径			
133	須恵器 杯蓋	18区 SK29	(12.35)			高分岐に戻熱	口縁部10%	127
134	須恵器 高杯	6区 SD1（SB3西）				脚部(8.1)		89
135	須恵器 壺	2区 P41		(3.3)			口縁部にわずか	855
136	土錘	6区 P33				長さ(5.7) 最大径(1.2)	重量9g	859
137	須恵器 高杯	19区 P50	(20.2)	(4.5)		体部下半に降灰	二段部30%	844
138	須恵器 高杯	19区 P50	(15.2)	(4.5)			口縁部15%	843
139	須恵器 底？	3区 包含層				完存		21
140	須恵器 杯蓋	8区 表土 5・6層	(19.4)	4.6	(5.5)		口縁部30%	74
141	須恵器 杯蓋	19・20区 上層包含層	12.8	4.9		宅分岐に自然釉	器部30%	125
142	須恵器 蓋	3区 包含層				宅部平(4.5)		22
143	須恵器 杯蓋	包含層				宅部(12.8)	宅部30%	20
144	須恵器 杯蓋	6区 SD1（SB3西）	(11.45)			つまみ等 上部降灰	高部5%	94
145	須恵器 蓋	6区 SD1（SB3西）	(12.4)			自然釉	蓋部はわずか	95
146	須恵器 杯身	6区 SD1（SB3西）	(10.55)				口縁部30%	91
147	須恵器 杯身	SD1 西	(11.7)				口縁部10%	92
148	須恵器 高杯	6区 SD1 西	(13.7)				口縁部10%	92
149	須恵器 高杯	SD1 西				脚柱部に透かし3ヶ所確認		88
150	須恵器 高杯	5区 SD1 北				脚部(6.1)		90
151	須恵器 壺	8区 SD1（SB3西）				脚部(10.0)	脚部30%	99
152	須恵器 鉢	6区 SD1ベルト1層（SB3西）	(17.3)				口縁部25%	87
153	須恵器 甕	6区 SD1ベルト1層（SB3西）	(25.0)				口縁部10%	88
154	土師器 皿	6区 SD1 表層色土（一括SB3）	(9.35)				口縁部10%	86
155	須恵器 鉢	SB1 北上段（SB2遺土含む）	(13.05)			自然釉	三部10%	90
156	須恵器 蓋	SB1 北下段（SB2遺土含む）					完存わずか	91
157	須恵器 杯身	20区 SB12 P55	(13.8)	(5.8)	(5.2)	外面に自然釉	口縁部5%	850
158	土師器 鉢	19区 SB12 P56		(8.7)		内面横ハケメ		851
159	須恵器 杯身	2区 P33						554
160	平瓦	SK31 北				凹凸一部、凸面一部タタキ痕残し		537
161	平瓦	2区 P51	厚1.4			凹面一部、凸面一部、磨しなし		842
162	瑪瑙製 小鏡	竪穴 中央				外面ケズり、自然釉？		134
163	石	5区 P34北北ベルト	長9.7	幅6.5	厚2.5	8角、長分表面に付着	重量235g	861
164	打製石斧	1区 P1(4)北側3	長8.5	幅5.8	厚0.9	ホルンフェルス	重量90g	862
165	鉄片	SB3 北西	長10.5	幅1.8	厚2.5	角状	重量220g	82

(4) 中世

SK3、SK10はそれぞれコンテナケース2箱分の山茶碗等が出土した。これら以外の遺構からの出土は少ない。なお遺物実測時に付与した番号も遺物観察表に掲載した。

SK2（第56図1、2） 1は、灰釉平碗である。口縁部はわずかに残っているにすぎないが、器高7.9cmを測る。古瀬戸後期4古（15世紀中頃）のものである（藤澤編年）。2は、山茶碗（碗）で、東濃型脇之島期のものである。このほか土師器、須恵器、中国陶磁、加工円盤がある。

SK3（第56図3～36・第57図1～24） 土師器、須恵器、山茶碗、土錘がある。山茶碗（碗・小皿）は、完形品も多い。体部と見込みの接合部に段がみられるものは6型式（藤沢編年）に属するものである。そのなかでは第48図32は新しい要素がある。第48図35、第57図6には高台内に×印の墨書が残る。なお、6は土層セクションで検出したピットからの出土である。土師器（皿）は、手づくねのものである。24は伊勢型鍋で13世紀代のものと考えられる。23は中国陶磁（青磁）の破片で遍弁文が刻まれている。

SK4（第57図25） 土師器、須恵器、中世陶器がある。25は山茶碗（小皿）で東濃型白土原期のものである。

SK5（第57図26～30） 土師器、中世陶器がある。29は合子で、古瀬戸中期1。27、28は山茶碗（碗）で東濃型大畑大洞新期のものである。26は7型式のものである。

SK10（第57図31～38・第58図1～20） 土師器、須恵器、瓶形土器、中世陶器、中国陶磁、土錘、砥石がある。山茶碗（碗・小皿）は、碗は6～7型式、小皿は6型式である。第58図11は6型式または7型式、第57図31は7型式である。第58図19は青磁碗の小片である。

SK11（第58図21、22） 土師器、須恵器、中世陶器がある。21の山茶碗（碗）、22の片口鉢は、6型式である。

SK16（第58図23～28） 土師器、中世陶器がある。25、27の山茶碗（碗）は7型式、26は6型式、23の山茶碗（小皿）は7型式である。

SK17（第58図29～39・第60図11） 須恵器、土師器（皿）、中世陶器がある。山茶碗（碗・小皿）（30、31、34、35、37、38）は6型式。29、32、36は東濃型丸石期。第58図38のSK17内P49山茶碗、第60図11のSK17内P48山茶碗も6型式である。

SK22（第59図1） 須恵器、中世陶器がある。1は常滑産の甕口縁部小片である。

SK39（第59図2～8） 土師器、須恵器、中世陶器がある。山茶碗（碗・小皿）は6～7型式。5は尾張型（長久手～瀬戸）で7型式。

SK40（第59図9） 須恵器、中世陶器がある。9は山茶碗（碗）の口縁部小片である。

SK41（第59図10～12） 土師器、須恵器、中世陶器がある。山茶碗（10）は東濃型5型式、11は8型式、12は鉢皿で古瀬戸前期4である。

1区P27（第59図13） 山茶碗（小皿）は完形品で、7型式である。

1区P30（第59図14、15） 山茶碗（碗）は7型式。15は甕の口縁部の小片である。

1区P39（第59図16～19） 須恵器、中世陶器、中国陶磁がある。16、17の山茶碗（小皿）は6型式である。

1区P53（第59図20～24） 22～24の山茶碗（碗）は6型式である。

5区P55（第59図25）　土師器、須恵器、中世陶器がある。

5区P57（第59図26）　26は山茶碗の完形品である。

5区P59　土師器、中世陶器がある。山茶碗（碗）（662）は7型式である。

5区P70（第59図27、28）　土師器、須恵器、中世陶器、土錘、焼けた石がある。27の山茶碗は2次被熱を受けている。

5区P72・73（第59図33・44）　須恵器、中世陶器、砥石、鉄片がある。33の山茶碗（碗）は東濃型大洞東期、44は施釉陶器（皿）は古瀬戸中期1か2である。

5区P77（第59図30、31）　須恵器、中世陶器、中国陶磁、竈形土器がある。

5区P106（第59図32）　須恵器、中世陶器がある。山茶碗（碗）は、東濃型大畑大洞新である。

5区P128（第59図29）　土師器、中世陶器、土錘がある。

5区P156（第59図35）　土師器、中世陶器がある。山茶碗（碗）は7型式である。

5区P169（第59図36、37）　土師器、中世陶器、焼けた割石がある。36の片口鉢は6型式、37の四耳壺は外面に褐釉がかけられる。内面に赤色顔料が付着する。古瀬戸前期3である。

5区P206　土師器、山茶碗、中国陶磁がある。山茶碗（小皿）は完形品である。

6区P55　土師器（皿）がある。

6区P117（第59図39、40）　土師器、中世陶器、陶丸がある。39の山茶碗（碗）は2次被熱を受ける。

6区P123（第59図41～43）　土師器、中世陶器、中国陶磁がある。41の山茶碗（碗）は7型式、42の小皿は6型式、43の小皿は、7型式である。

6区P147（第60図2、3、8、9）　中世陶器、陶丸2個、中国陶磁がある。

7区P14（第60図10）　山茶碗（碗）は完形品で、6型式である。

7区P22（第60図1）　山茶碗（小皿）は6型式である。

7区P61　土師器（皿）がある。

7区P95（第60図4）　土師器、須恵器、山茶碗がある。山茶碗（小皿）は、7型式か8型式である。

9区P39（第60図12）　山茶碗（碗）は7型式である。

11区P101（第60図5、7）　土師器（皿）、須恵器、中世陶器がある。

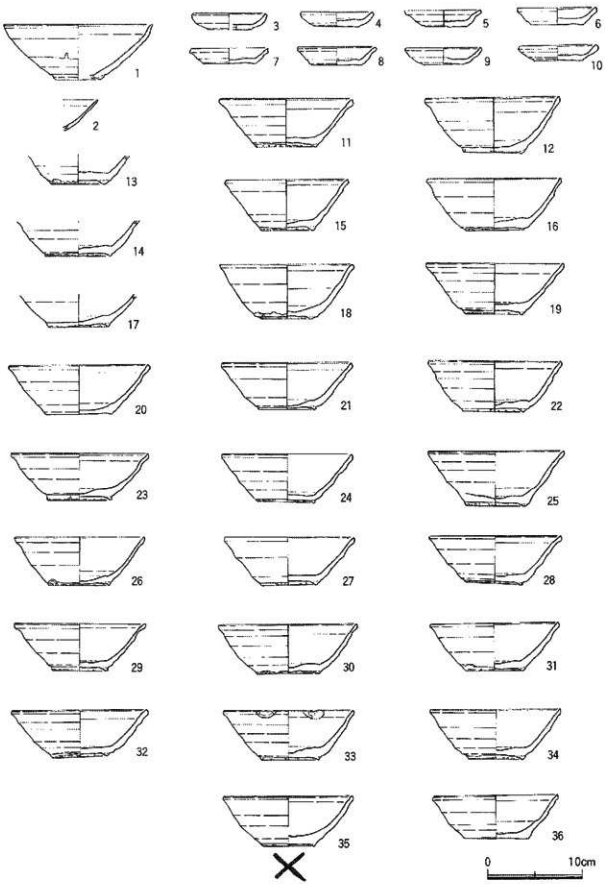
16区P3（第60図14）　中世陶器（瓶類）の体部片である。

18区P31（第60図13）　須恵器、土師器、山茶碗がある。山茶碗は7型式である。

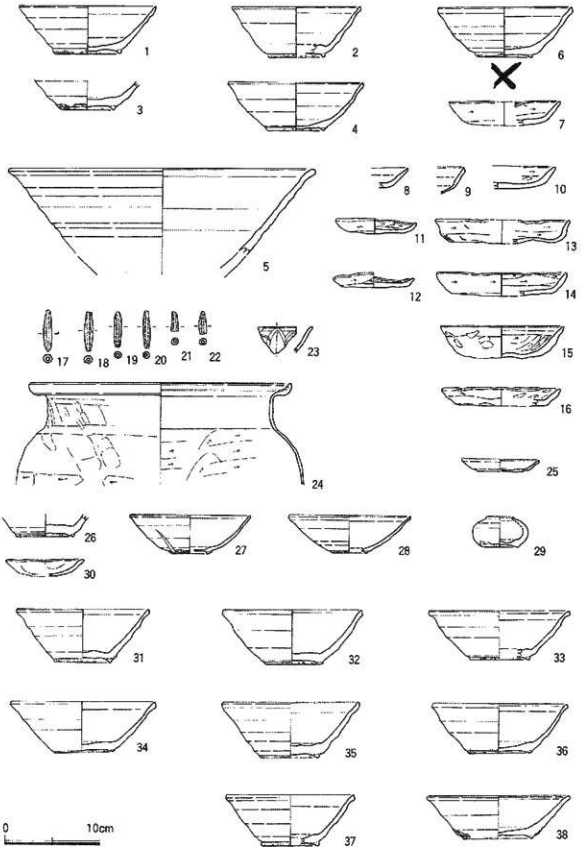
18区P62（第60図15）　中世陶器、加工円盤がある。

表土・その他（第60図16～35）　折縁中皿（19）は、古瀬戸中期4（14世紀中頃）である。四耳壺（32）は古瀬戸中期3のものである。片口鉢（34）は、6型式、片口鉢（35）は、7型式である。

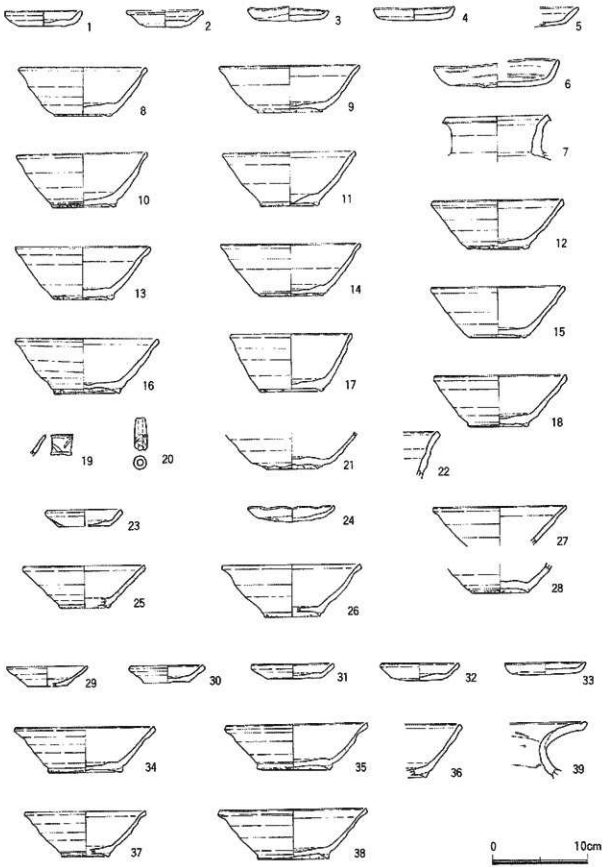
中国陶磁　いずれも小片である。これまでに記載したものも含めて出土地点をあげておく。1区P5（褐色の釉がかかる劃花文碗）、1区P39（第59図19）、1区P61、1区P64、1区P83、2区P20、2区SK2、2区SK3（第57図23）、2区検出（第60図17）、2区SB4（16）、5区P33、5区P77（白磁？高台部分）、5区P112（蓮弁文）、5区P152、5区P206、5区包含層（29）、5区検出（30）、6区P107、6区P123、6区P147、6区SK10（第58図19）、7区SK17の西（18）、9区SK6がある。



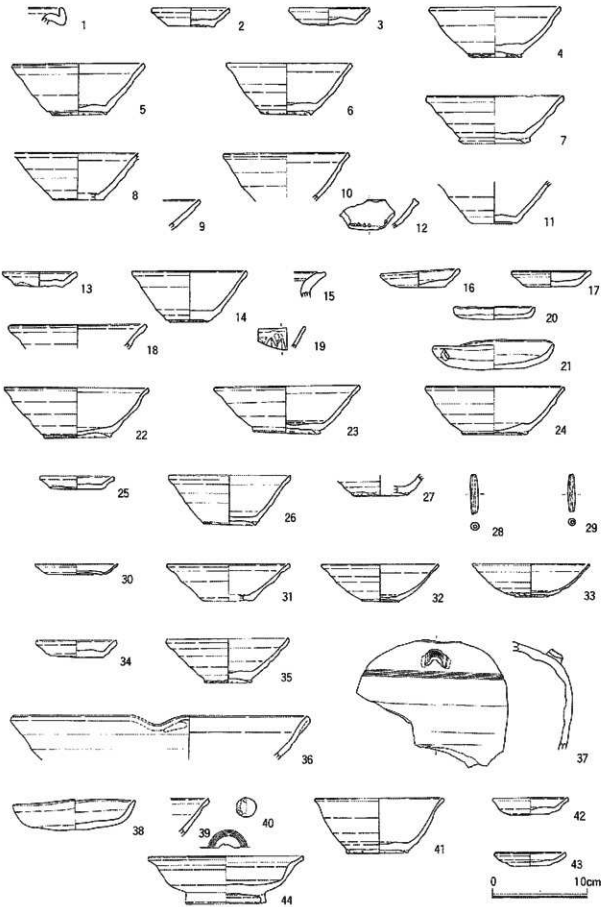
第56図　出土遺物（1）（S＝1／4）



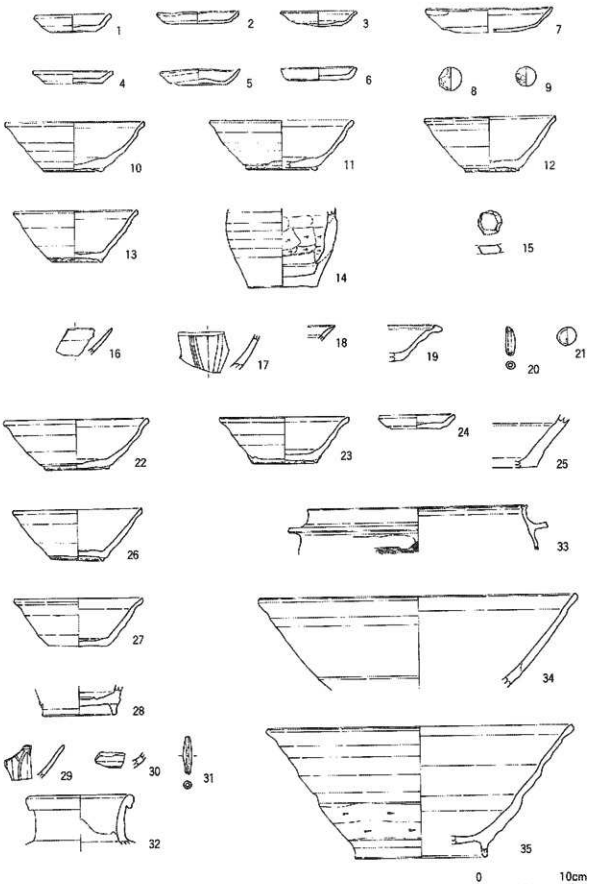
第57図　出土遺物（2）（S＝1／4）



第58図　出土遺物（3）（S＝1／4）



第59図　出土遺物（4）（S＝1／4）



第60図　出土遺物（5）（S＝1／4）

遺物観察表

図版番号	器種名	出土遺構	法量 (cm)			特徴	備考	図版番号
			口径	器高	底径			
第66図1	須恵甕	SK2	(15.8)	7.9	(5.4)	胴部多方向に延ばす	口縁部はわずか	617
第66図2	土師坏	SK2				赤褐色	小片	616
第66図3	土師坏 小型	SK3 第2貯蔵	(8.0)	1.7	(4.6)		口縁部1/3	595
第66図4	土師坏 小型	SK3 西半	(7.8)	1.6	(5.0)	底部は回転糸切り調整、端部圧痕	口縁部1/3	577
第66図5	土師坏 小型	SK3 西	8.1	1.4	5.9		口縁部1/2	539
第66図6	土師坏 小型	SK3 下層	8.4	1.8	5.6	底部は回転糸切り調整、端部圧痕	口縁部1/2	558
第66図7	土師坏 小型	SK3 第2貯蔵	(8.4)	1.6	5.4	底部は回転糸切り未調整、端部圧痕	口縁部1/4	595
第66図8	土師坏 小型	SK3 西半	8.4	1.6	5.3	底部は回転糸切り未調整	口縁部5/6	578
第66図9	土師坏 小型	SK3 北部3・5層	(8.2)	1.8	(4.2)	底部は回転糸切り未調整	口縁部5/12	586
第66図10	土師坏 小型	SK3 下層	7.4	1.7	5.3	底部は回転糸切り未調整	口縁部5/6	565
第66図11	土師坏 椀	SK3 第2貯蔵	(14.2)	5.1	6.2	底部は回転糸切り未調整	口縁部1/6	600
第66図12	土師坏 椀	SK3 第2貯蔵	14.4	6.0	6.7	底部は回転糸切り未調整	口縁部7/12	655
第66図13	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵			6.4	底部は回転ケズリ調整、板状圧痕	高都内	638
第66図14	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵			7.0	底部は回転糸切り調整	高都内	636
第66図15	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵	(13.2)	5.4	5.7	内面2次焼成か	口縁部1/3	601
第66図16	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵	(14.4)	5.3	(6.0)	底部は回転糸切り未調整	口縁部1/6	604
第66図17	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵			7.3	内面2次焼成か	高都内	607
第66図18	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵	(14.2)	5.8	5.4	底部は回転糸切り未調整、板状圧痕	口縁部1/6	602
第66図19	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵	14.6	6.4	6.2	底部は回転糸切り未調整	口縁部7/12	605
第66図20	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵	(13.6)	5.3	(6.8)	全体に2次焼成か	口縁部5/12	586
第66図21	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵	(14.0)	5.0	(6.0)	底部は回転糸切り未調整、板状圧痕	口縁部1/3	599
第66図22	山茶碗 椀	SK3 下層	(14.2)	5.5	(6.5)	底部は回転糸切り未調整、回転ケズリ調整	口縁部5/6	561
第66図23	山茶碗 椀	SK3 西半	(14.6)	6.0	6.8	底部は回転糸切り未調整、回転ケズリ調整	口縁部1/6	585
第66図24	山茶碗 椀	SK3 西半	14.0	5.2	6.2	底部は回転糸切り未調整、板状圧痕	口縁部5/12	583
第66図25	山茶碗 椀	SK3 西半	14.8	5.9	6.4	底部は回転糸切り未調整	口縁部3/4	584
第66図26	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵・5層	13.8	5.2	6.4	底部は回転ケズリ調整	口縁部3/4	588
第66図27	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵・5層	12.9	5.2	6.0	底部は回転糸切り未調整	口縁部2/3	589
第66図28	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵・5層	14.1	5.2	6.0	底部は回転ケズリ調整、板状圧痕	完形	591
第66図29	土師坏 椀	SK3 第2貯蔵・5層	(14.0)	(5.0)	(5.0)	底部は回転糸切り未調整、板状圧痕	口縁部1/6	587
第66図30	土師坏 椀	SK3 11層	(14.8)	5.2	6.8	底部は回転糸切り未調整	口縁部1/3	569
第66図31	山茶碗 椀	SK3 第2貯蔵・5層	13.7	5.1	5.2	底部は回転ケズリ調整	口縁部2/3	590
第66図32	山茶碗 椀	SK3 11層	14.0	5.1	5.9	底部は回転糸切り調整	口縁部1/2	553
第66図33	山茶碗 椀	SK3 11層	13.0	5.3	5.1	底部は二次的に糸切り調整、2次焼成	口縁部3/4	554
第66図34	土師器 椀	SK3 11層	13.6	5.3	5.9	底部は回転糸切り調整	口縁部5/6	564
第66図35	山茶碗 椀	SK3 11層	13.9	5.3	5.5	底部は回転糸切り調整、板状圧痕、焼成	口縁部5/6	585
第66図36	山茶碗 椀	SK3 下層	12.3	4.7	6.9	底部は回転糸切り調整	口縁部3/4	566
第67図1	土師器 椀	SK3 下層	(14.4)	5.1	(7.2)	底部は回転糸切り調整、回転ケズリ調整	口縁部はわずか	596
第67図2	土師器 椀	SK3 下層	(13.6)	5.5	(6.0)	底部は回転ケズリ調整、2次焼成	口縁部1/4	598
第67図3	土師器 椀	SK3 下層		5.7		底部は回転糸切り調整、端部圧痕	高都内	570
第67図4	土師器 椀	SK3 下層	(14.4)	5.2	6.8	底部は回転ケズリ調整、2次焼成	口縁部1/6	597
第67図5	中世陶器 鉢	SK3 第2貯蔵、第層5・6層	(22.4)			胴部ケズリ調整	口縁部1/6	557
第67図6	山茶碗 椀	SK3に接合されたPit	14.3	5.4	5.7	底部は糸切り	完形	555
第67図7	土師器 皿	SK3に接合されたPit	(11.8)	2.6	(9.6)	手づくり	口縁部1/6	557
第67図8	土師器 皿	SK3 西半				手づくり		576
第67図9	土師器 皿	SK3 西半				手づくり		575
第67図10	土師器 皿	SK3 第2貯蔵				手づくり		592
第67図11	土師器 皿	SK3 第2貯蔵・第層5・6層	8.7	2.7	5.6	手づくり	完形	515
第67図12	土師器 皿	SK3 第2貯蔵・5層	8.6	1.6	6.2	手づくり	完形	512
第67図13	土師器 皿	SK3 第2貯蔵	(14.2)	2.5	(10.5)	手づくり	口縁部1/4	580
第67図14	土師器 皿	SK3 第2貯蔵	(13.8)	2.5	(12.2)	手づくり	口縁部1/3	581
第67図15	土師器 皿	SK3 下層	(13.0)	3.4	(5.0)	手づくり	口縁部1/4	572
第67図16	土師器 皿	SK3 下層	(12.6)	2.0	(8.6)	手づくり	口縁部1/4	571
第67図17	土師	SK3 西半				長さ4.3 重0.9 電測3.2g	2次焼成	562
第67図18	土師	SK3 第2貯蔵・5・6層				長さ4.7 重0.9 電測2.9g	一部2次焼成	515
第67図19	土師	SK3 第2貯蔵・5・6層				長さ3.8 重0.8 電測1.9g		515
第67図20	土師	SK3 第2貯蔵・5・6層				長さ3.9 重0.8 電測2.0g		515
第67図21	土師	SK3 第2貯蔵・5・6層				長さ(2.1) 重0.8 電測(1.1)g	一部欠損	517
第67図22	土師	SK3 第2貯蔵・5・6層				長さ(2.4) 重0.8 電測(1.3)g	一部欠損	518
第67図23	古銭 宋	SK3 西半				熙寧元	小片	574
第67図24	土師器 鍋	SK3 第2貯蔵・5・6層	(27.8)			胴部は横に細ケズリ	口縁部1/2	519
第67図25	土師器 皿	SK4 西半	(8.2)	1.3	(4.5)	底部は回転ケズリ調整、底端は回転糸切り調整	口縁部5/6	618
第67図26	山茶碗 椀	SK5 北端			(5.9)	底部は回転糸切り調整、板状圧痕		620
第67図27	山茶碗 椀	SK5 南部	(12.8)	4.1	(4.0)	底端内	口縁部1/4	622
第67図28	山茶碗 椀	SK5 西半	(13.0)	4.0	(3.8)	底端内	口縁部1/4	621
第67図29	中世陶器 香炉	SK5 西半	2.8	3.2	3.8	内面ケズリ	完形	634
第67図30	土師器 皿	SK5 北半	(8.4)	1.8	(2.4)	胴部水平	口縁部1/4	619

遺構番号	器種名	法量・胎土・焼成等	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴	備考	遺物番号
第37図31	山茶碗 完	SK10 土不一括中	14.0	5.7	5.5	底部は回転糸切痕跡、板状圧痕	口縁部5/6	525
第37図32	山茶碗 完	SK10	14.0	5.8	6.3	底部は回転ヘラ調整	完形	526
第37図33	山茶碗 完	SK10	(13.0)	5.2	(6.4)	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/4	529
第37図34	山茶碗 完	SK10	15.4	5.5	6.5	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/2	530
第37図35	山茶碗 完	SK10	14.6	5.8	6.0	底部は回転糸切痕跡	口縁部3/4	531
第37図36	山茶碗 完	SK10	14.4	5.5	6.0	底部は回転糸切痕跡	完形	532
第37図37	山茶碗 完	SK10 ※クランクベルト内側	(13.6)	5.5	(6.2)	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/3	534
第37図38	山茶碗 完	SK10	(15.0)	4.8	(7.3)	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/12	535
第38図1	山茶碗 小皿	SK10 底中	8.2	1.6	4.4	底部は回転糸切痕跡	完形	540
第38図2	山茶碗 小皿	SK10 底中	8.2	1.9	3.7	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/2	541
第38図3	土師器 皿	SK10	8.6	1.5	6.8	調整不明	完形	527
第38図4	土師器 皿	SK10	8.6	1.3	(7.0)	調整不明	口縁部1/4	526
第38図5	土師器 皿	SK10 西中					小片	537
第38図6	山茶碗 皿	SK10 西中	13.3	2.8	(3.2)	底部は回転糸切痕	口縁部5/6	528
第38図7	中世陶器 壺	SK10 北中	(11.4)				口縁部1/6	538
第38図8	土師器 鍋	SK10 南中	13.6	5.3	6.2	底部は回転糸切痕跡、調整	口縁部1/5	542
第38図9	土師器 鍋	SK10 南中	(15.0)	5.6	(6.8)	底部は回転糸切痕跡、調整	口縁部5/12	545
第38図10	土師器 鍋	SK10 東中	(14.0)	5.6	(6.8)	底部は回転糸切痕跡、調整	口縁部5/12	543
第38図11	山茶碗 鍋	SK10 北中	(24.2)	5.7	(9.3)	底部は回転糸切痕跡、調整	口縁部1/12	546
第38図12	山茶碗 鍋	SK10 東中	14.0	5.3	6.6	底部は回転糸切痕跡、調整	口縁部1/2	530
第38図13	山茶碗 鍋	SK10 西中	14.3	5.7	6.8	底部は回転糸切痕跡、調整	完形	548
第38図14	山茶碗 鍋	SK10 西中	(18.0)	5.5	(6.8)	底部は回転糸切痕跡、調整	口縁部1/3	544
第38図15	山茶碗 鍋	SK10 西中	14.2	5.5	6.0	底部は回転糸切痕跡、調整	口縁部3/4	547
第38図16	山茶碗 鍋	SK10 南中	13.2	6.0	6.8	底部は回転糸切痕跡、調整		552
第38図17	山茶碗 鍋	SK10 南中	(13.0)	6.1	(7.0)	底部は回転糸切痕跡、調整	口縁部4分の1	549
第38図18	山茶碗 鍋	SK10 南中	14.1	5.6	6.3	底部は回転糸切痕跡、調整	口縁部5/12	551
第38図19	常滑 鍋	SK10 南中				底外文	小片	536
第38図20	土師	SK10 南中				陶器3.5 981.5 孔径0.5	紡錘車	539
第38図21	山茶碗 鍋	SK11 1層（貝殻）		5.4		底部は回転糸切痕、板状圧痕		612
第38図22	山茶碗 鍋	SK11					小片	613
第38図23	山茶碗 小皿	SK16	(8.2)	1.8	(5.2)	底部は高糸糸切痕跡		627
第38図24	土師器 皿	SK16	(9.2)	1.6	(3.5)	2次焼成	口縁部3/12	628
第38図25	山茶碗 鍋	SK16	(13.0)	1.0	(2.5)		口縁部1/12	625
第38図26	山茶碗 鍋	SK16	(14.8)	5.6	(5.8)	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/12	626
第38図27	山茶碗 鍋	SK16	(14.2)				口縁部1/5	623
第38図28	山茶碗 鍋	SK16		(6.0)		底部に回転糸切痕跡		624
第38図29	山茶碗 小皿	SK17 東南	8.6	2.1	(4.2)	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/4	610
第38図30	土師器 小皿	SK17 北	8.1	1.8	(4.6)	底部は回転糸切痕跡	完形	637
第38図31	山茶碗 小皿	SK17 北	8.4	1.6	5.9	底部は回転糸切痕跡	完形	638
第38図32	山茶碗 小皿	SK17 東中	8.5	1.8	5.0	底部は回転糸切痕跡	口縁部5/6	608
第38図33	土師器 皿	SK17	(8.6)	1.3	(6.2)	調整不明	口縁部5/12	643
第38図34	山茶碗 鍋	SK17	(18.0)	4.8	8.1	底部は回転糸切痕跡、板状圧痕	口縁部1/4	639
第38図35	山茶碗 鍋	SK17	15.2	4.9	8.0	底部は回転糸切痕跡、板状圧痕	完形	641
第38図36	山茶碗 鍋	SK17					口縁部1/12	611
第38図37	山茶碗 鍋	SK17 西中	(13.0)	4.8	(5.2)	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/4	636
第38図38	山茶碗 鍋	SK17 床中10	(16.8)	5.3	7.6	底部は回転糸切痕跡、板状圧痕	口縁部1/4	640
第38図39	中世陶器 壺	SK17 埋				底部は底オ一ブ色一に近い赤褐色	小片	642
第39図1	中世陶器 壺	SK22				色調は灰褐色一に近い褐色	小片	629
第39図2	土師器 小皿	SK39 東	8.8	2.0	4.9	底部は回転糸切痕跡、板状圧痕	完形	501
第39図3	土師器 小皿	SK39 北東下	8.6	1.9	3.7	底部は回転糸切痕跡、板状圧痕	完形	506
第39図4	山茶碗 鍋	SK39 東	(16.0)	5.3	(5.8)	底部は回転ヘラ調整	口縁部3/5	504
第39図5	山茶碗 鍋	SK39 東	14.1	5.5	5.2	底部に高糸切痕	口縁部1/2	503
第39図6	山茶碗 鍋	SK39 東	13.3	5.5	5.3	底部は回転ヘラ調整	完形	502
第39図7	山茶碗 鍋	SK39 南	(14.6)	5.1	(7.6)	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/5	505
第39図8	山茶碗 鍋	SK39 南中	(12.6)	5.0	(5.2)		口縁部4分の1	507
第39図9	山茶碗 鍋	SK40					小片	508
第39図10	山茶碗 鍋	SK41	(13.4)				口縁部1/12	510
第39図11	土師器 鍋	SK41			(5.0)	底部は底糸切痕跡		511
第39図12	中世陶器 壺	SK41						509
第39図13	山茶碗 小皿	1区 P27	8.0	1.6	5.5	底部は回転糸切痕跡、板状圧痕	完形	665
第39図14	山茶碗 鍋	1区 P30	(12.2)	5.4	4.2	底部は回転糸切痕跡	口縁部1/3	683
第39図15	中世陶器 壺	1区 P30				色調は灰色一に近い赤褐色	小片	684
第39図16	山茶碗 小皿	1区 P29	8.6	1.8	3.7	底部は回転糸切痕跡	口縁部5/12	693
第39図17	山茶碗 小皿	1区 P29	(8.4)	1.7	(3.0)	底部は回転糸切痕跡	口縁部3/12	692
第39図18	山茶碗 鍋	1区 P29	(14.8)				口縁部1/6	691
第39図19	常滑 鍋	1区 P29				縄文文	小片	690

测取参考	器皿名	出土遗物	深度（cm）			特	征	备	考	采图编号
			口径	器高	底径					
第59图26	平底碗 底	1区 P53	6.2	1.4	7.3	圆度不明		完形		652
第59图21	三足碗 底	1区 P53	13.0	3.1	9.3	圆度不明		完形		653
第59图22	白瓷碗 完	1区 P53	15.3	5.4	7.0	底部以上部分切未调整		口缺部1/12		649
第59图23	白瓷碗 底	1区 P53	16.5	5.3	7.2	底部以上部分切未调整，轮痕压痕		口缺部1/8		650
第59图24	白瓷碗 底	1区 P53	14.7	5.1	7.0	底部以上部分切未调整		完形		651
第60图25	青白瓷碗 底	5区 P55	18.0	1.0	10.4	高部以上部分切未调整		口缺部1/4		659
第60图26	平底碗 底	6区 P57	12.9	5.4	5.6	底部以上部分切未调整		完形		662
第59图27	白瓷碗 底	5区 P70				2次烧成		小片		672
第59图28	平底	5区 P70				底径4.3 器0.9 孔径0.25 重量2.6g		完形		673
第59图29	三足	5区 P120				底径4.0 器0.8 孔径0.2 重量2.5g		完形		668
第60图30	白瓷碗 小底	5区 P77	(8.8)	1.1	(6.2)			口缺部5/12		838
第60图31	白瓷碗 底	5区 P77	(13.0)	3.9	(3.0)			口缺部小于1/8		839
第60图32	白瓷碗 底	5区 P165	12.4	4.5	3.8	底部以上部分切未调整		口缺部1/2		685
第60图33	白瓷碗 底	5区 P72・73	(12.4)	3.5	3.4	底部以上部分切未调整		口缺部1/2		686
第60图34	白瓷碗 小底	6区 P209	8.6	1.9	3.7	底部以上部分切未调整，轮痕压痕		完形		664
第60图35	白瓷碗 底	5区 P156	(13.0)	5.7	(5.0)	底部以上部分切未调整		口缺部1/3		663
第59图36	中平底碗 沖口部	5区 P166	(11.0)					口缺部1/12		677
第59图37	中平底碗 口部缺	5区 P166						碗部片		676
第60图38	白瓷碗 底	6区 P55	15.0	3.2	10.0	圆度不明		完形		690
第60图39	白瓷碗 底	6区 P117				2次烧成		小片		670
第60图40	碗底	6区 P117				底径2		完形		671
第59图41	白瓷碗 底	6区 P123	(13.7)	5.5	3.6	底部以上部分切未调整，轮痕压痕		口缺部1/12		680
第59图42	白瓷碗 小底	6区 P123	8.0	1.8	4.1	底部以上部分切未调整，轮痕压痕		口缺部1/6		681
第60图43	白瓷碗 小底	6区 P123	(7.6)	1.5	(4.2)	底部以上部分切未调整，轮痕压痕		口缺部1/5		682
第59图44	白瓷碗 底	5区 P72・73	(16.4)	(5.0)	(8.4)	底部以上部分切未调整		口缺部1/6		687
第60图45	白瓷碗 小底	7区 P22	(8.2)	1.9	(4.6)	底部以上部分切未调整		口缺部1/3		658
第60图46	三足碗 底	6区 P147	8.7	1.3	5.5			口缺部3/4		696
第60图47	白瓷碗 小底	6区 P147	8.3	1.6	5.9	底部以上部分切未调整		完形		697
第60图48	白瓷碗 小底	7区 P85	8.5	1.4	5.9	底部以上部分切未调整，轮痕压痕		完形		696
第60图49	土师器 底	11区 P101	8.5	1.7	4.9	圆度不明		口缺部1/12		664
第60图50	土师器 底	7区 P61	(8.0)	1.4	(6.0)	圆度不明		口缺部1/6		697
第60图51	土师器 底	11区 P101	(13.2)	2.8	(7.2)	圆度不明		口缺部1/3		665
第60图52	陶瓦	5区 P157				径2.5		完形		668
第60图53	陶瓦	5区 P157				径3.1		完形		669
第60图54	白瓷碗 底	7区 P14	14.5	5.3	6.3	底部以上部分切未调整		完形		661
第60图55	白瓷碗 底	SK17 P148	(15.2)	3.3	(7.6)	底部以上部分切未调整		口缺部1/8		633
第60图56	白瓷碗 底	9区 P59	(14.0)	5.8	(5.6)	底部以上部分切未调整		口缺部1/4		679
第60图57	白瓷碗 底	18区 P21	15.2	5.5	7.4	底部以上部分切未调整，轮痕压痕		完形		636
第60图58	土师器 底	5区 P3			(7.4)	完形				840
第60图59	加工木板	18区 P62				六角形板				674
第60图60	青瓷碗	2区 遗构区						小片		631
第60图61	青瓷 底	2区 遗构区				底平坦				635
第60图62	青瓷 底	7区 SK17の西侧						小片		649
第60图63	白瓷陶器 沖台用	5区 南部区 遗构区				块状		小片		657
第60图64	三脚	5区 P160 P174の间				底径(7.1) 器10 孔径0.3		一部残缺		656
第60图65	瓦	17区 西部				径2.0		完形		783
第60图66	白瓷碗 底	6区 表面土	(15.4)	5.4	6.6	底部以上部分切未调整		口缺部1/4		520
第60图67	白瓷碗 底	6区 表面土	(13.8)	5.0	6.8	底部以上部分切未调整		口缺部1/6		521
第60图68	白瓷碗 小底	7区 SK17の西北部	8.9	1.6	5.2	底部以上部分切未调整		口缺部1/2		646
第60图69	土师器 瓶	6区 北西角 遗构北土						小片		632
第60图70	白瓷碗 碗	7区 SK17の西部				底径4.0 器0.9 孔径0.2 重量2.4g		一部残缺		667
第60图71	白瓷碗 碗	7区 SK17の西部	(3.8)	5.6	5.7	底部以上部分切未调整，轮痕压痕		口缺部1/2		648
第60图72	白瓷碗 碗	7区 SK17の西部	(13.8)	5.1	5.8	底部以上部分切未调整，轮痕压痕		口缺部5/12		647
第60图73	中国陶器	7区 SK17の西北区			(8.0)					644
第60图74	白瓷 碗	5区 遗构区								665
第60图75	白瓷 碗	5区 遗构南部								666
第60图76	土师	3区 遗构南部				底径(4.0) 器0.9 孔径0.2 重量2.4g		一部残缺		667
第60图77	中世瓦器 盘	表土	(11.5)					口缺部1/5		123
第60图78	土师器 瓶底	6区 遗构南部	(23.2)							675
第60图79	白瓷碗 底	6区 表面土	(13.8)					口缺部1/5		525
第60图80	中世陶器 沖口部	6区 表面土	(22.6)					口缺部小于1/8		523

(5) 近世・近代

表土・攪乱層から陶磁器、ガラス瓶等が出土しているが、量的には少ない。20区SK28出土遺物と、8区SK20が主要な遺物である。SK20は、東雲窯に関係する遺構で、調査区の壁断面で検出したにもかかわらず、コンテナケース18箱分出土した。その大半は窯道具であり、製品はわずかである。

SK28　コンテナケース2箱分を採集した。陶器は、落し蓋、徳利、土瓶、鉢、通徳利等がある。徳利は、本業焼蒲毛目文で近世以降生産されたものや、「東雲」銘刻印のあるものがある。染付磁器は、碗、皿、壺、徳利、小坏、鉢等があり、模様は手描き、摺絵、銅版で描かれている。クロム青磁は碗、小坏、皿等、土器は、鍋蓋、土人形外型等がある。窯道具は、エンゴロがある。

銅版転写製品は明治20年代以降、東雲焼は明治26年頃～大正13年であることから、明治後半代（19世紀末～20世紀初頭）の時期の資料群であると思われる。

SK20（第61図・第62図1～24・第63図・第64図1～13）

陶磁器　陶器は、碗、徳利、急須、蓋、鉢類等がある。器面に透明釉が掛けられ、灰白色を呈するもの（第61図3、4）、緑灰色を呈するもの（第61図7）、灰オリーブ色を呈し三島手白土象嵌のもの（第61図8）、鉄釉の掛かったもの（第61図1）などがある。全形を明らかにできるものは少ない。第61図3、4、18、25等には「東雲」銘刻印がある。これらの大半は東雲窯の製品と思われるが、甕（第61図27）は、内面に赤色顔料が付着し、素地片表面に塗られた赤色顔料と同一のものと推定されることから、工房内で用いられたものと思われる。

素焼素地　素地が灰白色を呈するもの（第61図16、20～22、26）と赤橙色を呈するもの（第62図1～12）がある。図化した前者にはいずれにも「東雲」銘刻印がある。このほか2点に刻印がみられる。五徳（第62図14～17）も灰白色を呈し、素焼素地であろう。赤橙色を呈するものは、ほとんどが小片であるが、第62図1、3、12は全形をうかがうことができるものである。12は筒形、平底で建水と思われる。体部上位に鋸歯文、下位に縦線文を施し、中央に印花文を刻印する。11は刻印内に白土が込められており、焼成すると三島手白土象嵌のものになると思われる。第62図13は、灰白色を呈し、外面は平滑に仕上げられている。

窯道具　色見（第62図20～24）、トチン（第63図1～23）、エブタ（第63図24～26）、ツク（第64図1～4）、エンゴロ（第64図5～11）、タナイタ（第64図12、13）がある。色見は陶器で6点ある。5点は器面に「井」字状の試し書きがある。トチンは、円盤型のロクロ成形のもの（第63図1～8、15、16）、脚付板ドチ（第63図9～14）、砂ドチ（第63図17、18）、センベ（第63図19）、にぎりドチ（第63図20～24）、ひも状のトチン等コンテナケース1箱分ある。ツクは中実のもの4点のみである。エンゴロ（匣鉢）は、丸匣鉢で底部が凸型丸底のもの（第64図5～8）と、平底のもの（第64図9～11）がある。平底のものの一部は体部下半に穿孔したものがある。エンゴロ（匣鉢）は、コンテナケース8箱分、タナイタは7箱分ある。

その他　五徳、土人形外型（第62図18）、用途不明品（第62図19）のほか、窯壁破片ブロック、鉄製品等コンテナケース1箱分ある。土人形型は、松毬外型と思われる（注1）。

窯跡・物原（4区南壁3～7層・10～12層）（第62図25、26・第65図1～17、19～22）　陶器は、皿（第62図25）、徳利、素焼素地は、碗（第62図26）、窯道具は、エンゴロ（第65図12、14）、輪ドチ、にぎり

ドチ（第65図11）、センベ（第65図１、２）、エブタ（第65図８、９）、ツク（第65図５、６）がある。以上第１層出土品。南壁東端出土として採集したものは第１層と基本的に同じである。陶器は、向付、素焼素地、窯道具はエンゴロ（第65図13）、エブタ（第65図10、15、16）、輪ドチ（第65図７）、ひも状のトチン（第65図19）、センベ（第65図３、４）がある。５は中空である。

４区東壁南端部表土層　窯道具、東雲焼製品が出土した。物原の一部と推定される。窯道具はそのほとんどが手づくねのトチン（棒状、輪ドチ）である。トチン（第65図17）はロクロ成形である。

窯跡攪乱層　陶器（碗、皿）、窯道具（ツク、エンゴロ、棒状トチン）、窯壁片が出土した。棒状トチンは、褐色を呈し、よく焼け締っている。

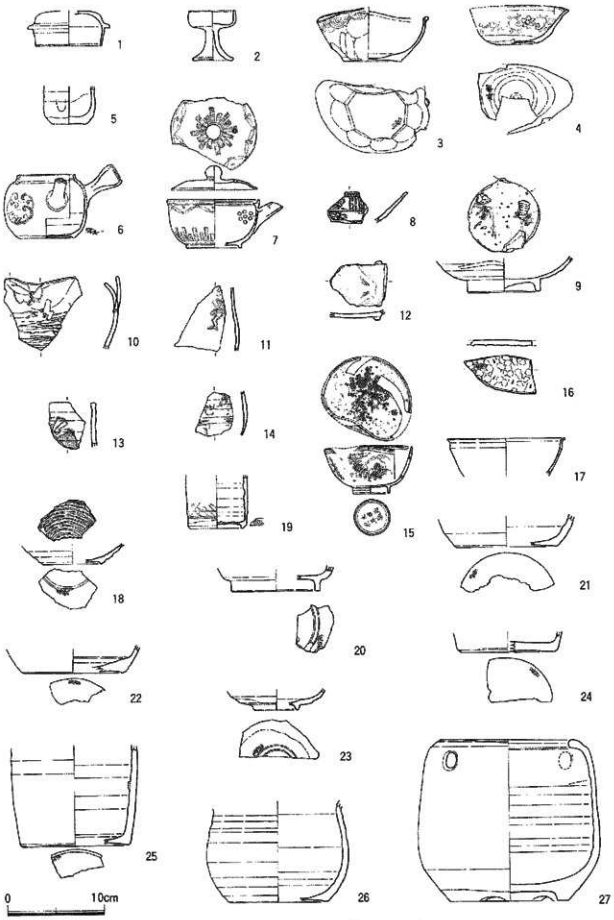
１区P7（南壁33～38層）（第62図27、28、第65図18）　陶磁器、素焼素地、窯道具がある。陶器は、碗、徳利（第62図28）、向付等があり、透明釉、鉄釉の掛かるもので東雲焼であろう。素焼素地碗（第62図27）は、赤字で「光」と書かれる。窯道具は、エンゴロ、タナイタ、エブタ、にぎりドチ、輪ドチ、トチン（第65図18）がある。

36層出土として陶器（土瓶、徳利等）、素焼素地、窯道具（エンゴロ、タナイタ、棒状トチン、輪ドチ、脚付き板ドチ、ひも状のトチン）、色見等がある。色見は内外面に「井」字状の試し書きがある。38層出土として陶器（徳利等）、素焼素地、窯道具（エンゴロ、棒状トチン、輪ドチ）がある。素焼素地は、赤字の文字が書かれているものと、線刻で文字（「・　有鉄□　・」）が書かれているものがある。

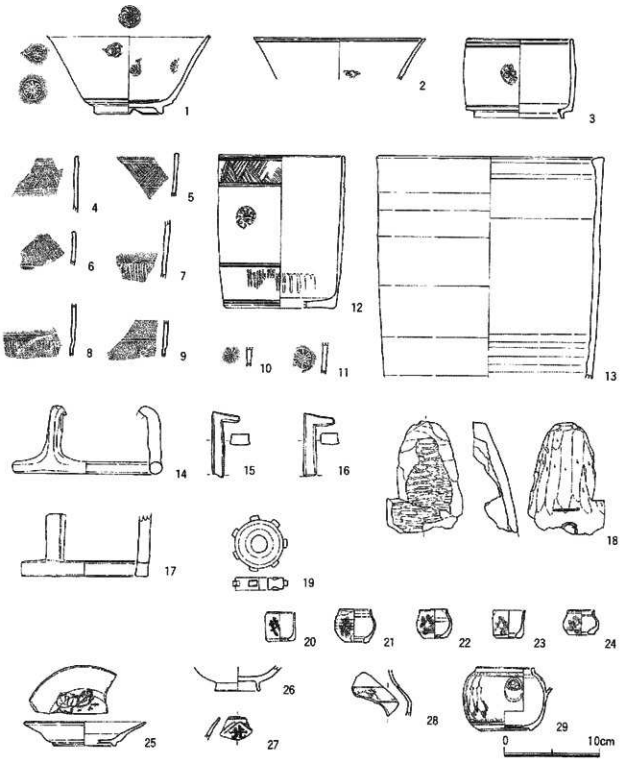
防空壕　戦災で被熱を受けた瓦のほか、９区防空壕３からはガラス瓶が出土した。クリーム入れで、底面に「岐543」とエンボス文字がある。18区防空壕１では炭化材が遺存していた。

注１　名古屋土人形御野田末吉氏製作品に松毬鈴がある（『愛知の土人形』名古屋市博物館　1994）。

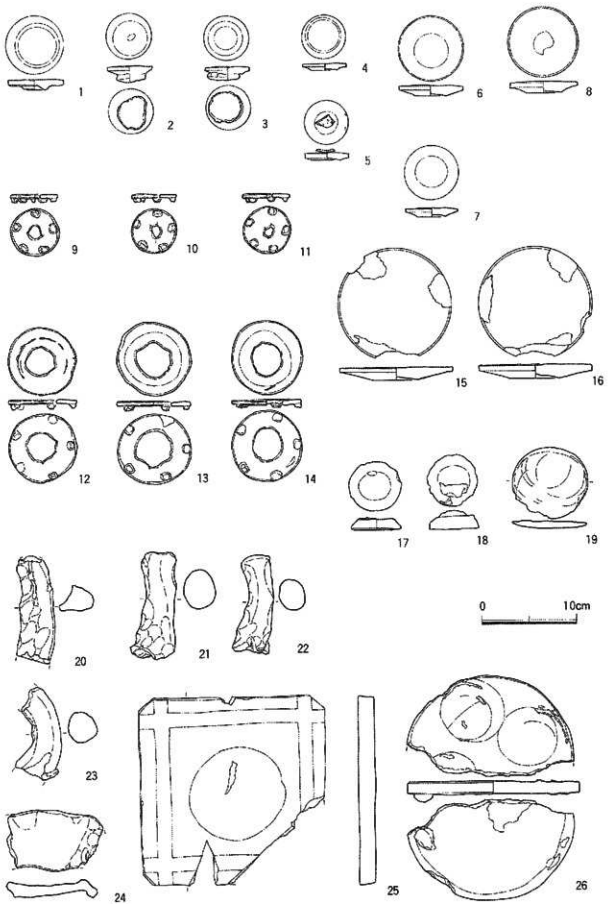
表土・その他　磁器碗（東陽軒平八製）、ガラス製牛乳瓶（全乳　愛養舎）などがある。



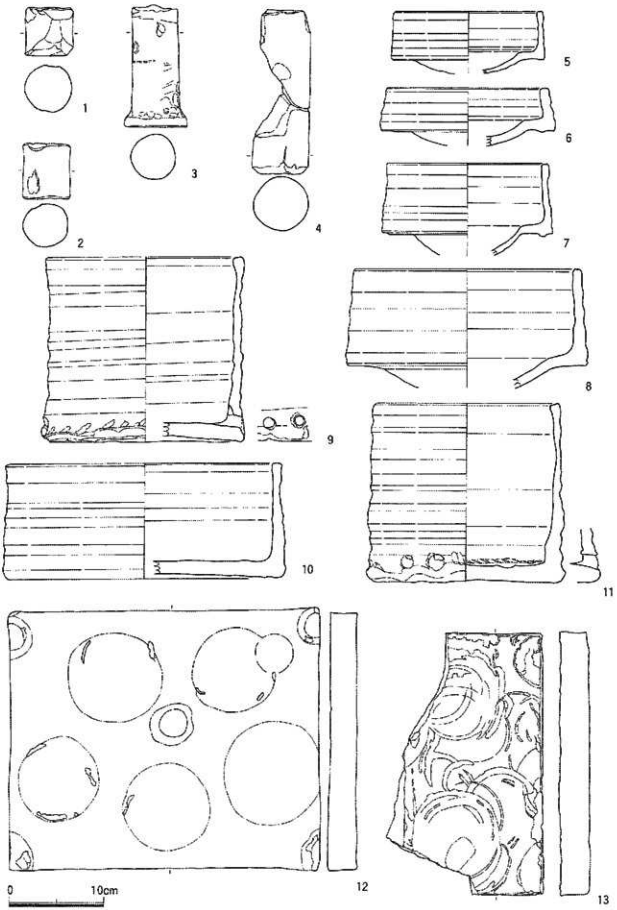
第61図　出土遺物（1）（S＝1／4）



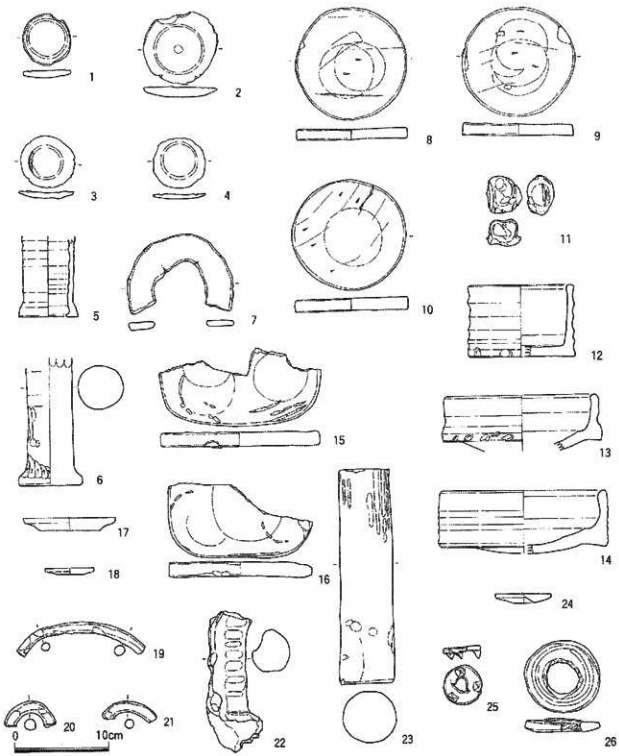
第62図　出土遺物（2）（S＝1／4）



第63図　出土遺物（3）（S＝1／4）



第64図　出土遺物（4）（S＝1／4）



第65図　出土遺物（5）（S＝1／4）

遺物観察表

遺物番号	器種名	出土遺構等	法量 (cm) 口径	器高	底径	特徴	備考
第61図1	鉄器 鏃	SK20	(6.8)			鉄鏃	732
第61図2	陶器 灯明具	SK20	(5.0)	5.2	(1.2)	内面煤黒色、外面コバルト地	口縁部1／6 741
第61図3	陶器 小皿	SK20		5.8		底輪	口縁部2／3 742
第61図4	陶器 瓶子	SK20		4.1	4.0	灰釉、器台わるに「雑鳥」銘印	口縁部1／2 743
第61図5	陶器 茶入	SK20		(3.4)		鉄釉	733
第61図6	陶器 茶碗	SK20	5.6	5.3	0.6	底輪、注口溝大は、高台わるに「天保」銘印	口縁部1／12 698
第61図7	陶器 鉢	SK20	9.4	5.1	5.7	底輪、糸切痕	口縁部2／3 700
第61図8	陶器	SK20				内面に白土象嵌	739
第61図9	陶器	SK20			7.6	底輪、見込みに陶印痕跡	742
第61図10	陶器	SK20				底輪、鉄釉「梅」	737
第61図11	陶器 十徳	SK20				底輪、外面鉄「徳兵衛」	746
第61図12	陶器 皿	SK20				底輪、鉄釉「魚」	736
第61図13	陶器	SK20				底輪、長柄傘「雅形鋼」	738
第61図14	陶器	SK20				底輪、文字	739
第61図15	陶器 瓶	SK20	9.1	5.6	3.8	釉付、口縁部欠損	743
第61図16	陶器	SK20				焼成良好、内面に浅見形痕、底部に「東」銘印	711
第61図17	陶器 天目茶碗	SK20	(12.2)			底輪、「陶郷」印痕	731
第61図18	陶器 皿	SK20				底輪、高台わるに「東宝」、東印	735
第61図19	陶器 徳利	SK20			(5.6)	底輪、高台わるに「鉄釉」に「東宝」銘印	734
第61図20	陶器	SK20		(2.5)	(9.4)	焼成良好、高台わるに「東宝」銘印	712
第61図21	陶器	SK20			(10.4)	焼成良好、底面に「東鳳」銘印	715
第61図22	陶器	SK20				底部を焼成、底面に「東宝」銘印	716
第61図23	陶器 瓶	SK20				底輪、高台わるに「東宝」銘印	713
第61図24	陶器 徳利	SK20				外面鉄釉、内面底釉、底面に「東宝」銘印	714
第61図25	陶器 徳利	SK20				外面鉄釉、内面底釉、底面に「東宝」銘印	710
第61図26	陶器 徳利	SK20			(10.0)	底焼き痕跡	822
第61図27	陶器 鉢	SK20	12.2	16.8	12.2	内面に線状施釉付ホ	口縁部2／3 704
第62図1	陶器 甕	SK20			7.0	底焼き痕跡、糸切痕、高台に切れ込みあり	720
第62図2	陶器 瓶	SK20				底焼き痕跡、糸切痕色	719
第62図3	陶器 瓶	SK20	(11.4)	8.3	(9.4)	底焼き痕跡、糸切痕色	718
第62図4	陶器	SK20				底焼き痕跡、赤褐色	722
第62図5	陶器	SK20				底焼き痕跡、赤褐色	723
第62図6	陶器	SK20				底焼き痕跡、赤褐色	724
第62図7	陶器	SK20				底焼き痕跡、赤褐色	725
第62図8	陶器	SK20				底焼き痕跡、赤褐色	726
第62図9	陶器	SK20				底焼き痕跡、赤褐色	727
第62図10	陶器	SK20				底焼き痕跡、赤褐色	728
第62図11	陶器	SK20				底焼き痕跡、赤褐色	729
第62図12	陶器	SK20	(13.2)	16.1	(11.2)	底焼き痕跡、赤色	口縁部わずか 721
第62図13	陶器	SK20	(24.0)			底焼き痕跡、灰白色	821
第62図14	瓦塔	SK20				底焼き痕跡、灰白色	707
第62図15	瓦塔	SK20				底焼き痕跡、灰白色	759
第62図16	瓦塔	SK20				底焼き痕跡、灰白色	795
第62図17	瓦塔	SK20				底焼き痕跡、灰白色	794
第62図18	土人形部（胴部）	SK20				底焼き、外面に「一○」墨書	717
第62図19		SK20				底焼き、縦3.0、厚3.4	793
第62図20	鉄滓系 色見	SK20	3.2	3.1	2.8	底輪、鉄塊「寸」字状	705
第62図21	鉄滓系 色見	SK20	3.2	3.4	2.5	底輪、鉄塊「林」字状	792
第62図22	鉄滓系 色見	SK20	3.0	3.1	2.2	底輪、鉄塊「林」字状	707
第62図23	鉄滓系 色見	SK20	(3.4)	2.9	(2.8)	底輪、鉄塊「林」字状	口縁部わずか 708
第62図24	鉄滓系 色見	SK20	(3.0)	2.6	(3.0)	底輪、鉄塊「林」字状	口縁部わずか 709
第62図25	陶器 碗	4区四間 1層	(13.6)	2.6	(6.6)	底輪	口縁部1／4 771
第62図26	陶器 碗	4区四間 2層				底輪	772
第62図27	陶器	1区 97				底輪	777
第62図28	陶器 鉢	1区 97				底輪	778
第62図29	陶器 徳利	表採				底輪、鉄釉「水鳥」	701
第63図1	鉄滓系 トチン	SK20				コクロ板形、縦6.0	800
第63図2	鉄滓系 トチン	SK20				コクロ板形、センベい状痕、縦4.8	801
第63図3	鉄滓系 トチン	SK20				コクロ板形、センベい状痕、縦4.7	803
第63図4	鉄滓系 トチン	SK20				コクロ板形、縦4.7	804
第63図5	鉄滓系 トチン	SK20				コクロ板形、縦部付ホ、縦4.7	802
第63図6	鉄滓系 トチン	SK20				コクロ板形、縦6.7	798
第63図7	鉄滓系 トチン	SK20				コクロ板形、縦5.6	805
第63図8	鉄滓系 トチン	SK20				コクロ板形、縦7.2	799
第63図9	鉄滓系 御台板ドチ	SK20				手づくね、縦5.1	806
第63図10	鉄滓系 御台板ドチ	SK20				手づくね、縦4.7	807

図版番号	器種名	出土遺構等	法量 (cm) 口径	胴径	底径	特徴	備考	実測図番号
第63図11	須恵器 鉢(板状ドキ	SK20				手づくね、径5.1		808
第63図12	須恵器 鉢(ヘラドキ	SK20				手づくね、径5.0		809
第63図13	須恵器 鉢(板状ドキ	SK20				手づくね、径5.8		811
第63図14	須恵器 鉢(板状ドキ	SK20				手づくね、径7.4		810
第63図15	須恵器 ミニチン	SK20				ロクロ成形、径12.0		820
第63図16	須恵器 ミニチン	SK20				ロクロ成形、径12.0		819
第63図17	須恵器 センベ	SK20				径5.5		791
第63図18	須恵器 センベ	SK20				径5.5		792
第63図19	須恵器 センベ	SK20				径9.9		793
第63図20	須恵器 トチン	SK20				すづくね		785
第63図21	須恵器 トチン	SK20				すづくね		786
第63図22	須恵器 トチン	SK20				手づくね		787
第63図23	須恵器 トチン	SK20				手づくね		788
第63図24	須恵器 エブタ	SK20				すづくね		789
第63図25	須恵器 エブタ	SK20				19.9×19.8、厚5.2.8		814
第63図26	須恵器 エブタ	SK20				径(18.2)、厚2.4、トチン痕跡		784
第64図1	須恵器 フタ	SK20				径3.0		818
第64図2	須恵器 フタ	SK20				径3.0		817
第64図3	須恵器 フタ	SK20				径4.7		815
第64図4	須恵器 フタ	SK20				径5.0		816
第64図5	須恵器 ヘンプロ	SK20	(13.8)		(18.4)	底部は凸状成形	口縁部1/3	748
第64図6	須恵器 ヘンプロ	SK20	(27.4)		(18.4)	底部は凸状成形	口縁部1/3	747
第64図7	須恵器 ヘンプロ	SK20	(17.2)		(18.2)	底部は凸状成形	口縁部1/3	750
第64図8	須恵器 ヘンプロ	SK20	(24.2)		(26.6)	底部は凸状成形	口縁部1/6	749
第64図9	須恵器 ヘンプロ	SK20	20.8	19.8	21.4	完形に平底、体部に穿孔	口縁部1/4	744
第64図10	須恵器 ヘンプロ	SK20	(29.2)	12.2	(29.8)	底部は平底	口縁部1/3	746
第64図11	須恵器 ヘンプロ	SK20	(19.2)	19.5	(21.0)	完形は平底、体部に穿孔	口縁部1/6	745
第64図12	須恵器 ケヤイタ	SK20				27.8×33.3、厚5.2.0、フタ・トチン痕跡		863
第64図13	須恵器 ケヤイタ	SK20				27.6×(34.7)、厚3.3.2、トチン痕跡		812
第65図1	須恵器 センベ	1区北壁 1層						768
第65図2	須恵器 センベ	4区東壁 1層				径7.9、厚4.1.0		766
第65図3	須恵器 センベ	4区南壁 1層						796
第65図4	須恵器 センベ	4区南壁 1層						795
第65図5	須恵器 フタ	4区西壁 1層			6.4			797
第65図6	須恵器 フタ	4区南壁 1層、西壁実測			6.8			794
第65図7	須恵器 トチン	4区南壁 遺構				径11.2、厚3.0.9		787
第65図8	須恵器 エブタ	4区南壁 1層				径11.9、厚3.0.7		785
第65図9	須恵器 エブタ	4区北壁 1層				径12.0、厚3.1.3		786
第65図10	須恵器 エブタ	4区南壁 東端				径12.1、厚3.1.3		788
第65図11	須恵器 ヘンプロ	4区南壁 1層				4.0×3.8×2.7、すづくね		770
第65図12	須恵器 ヘンプロ	4区西壁 1層	(11.4)	7.8	(11.8)	底部は平底	口縁部1/2	764
第65図13	須恵器 ヘンプロ	4区西壁 実測	(19.4)	(5.9)	(16.8)	底部は凸状成形	口縁部1/4	762
第65図14	須恵器 ヘンプロ	4区南壁 1層	(17.6)	(6.7)	(18.0)	底部は凸状成形	口縁部1/4	763
第66図15	須恵器 エブタ	4区南壁 東端				径8.7、厚2.1.5		780
第66図16	須恵器 エブタ	4区北壁 東端				開丸小形、厚3.1.7		781
第66図17	須恵器 トチン	1区南壁 実測				径9.8、厚3.4		773
第66図18	須恵器 トチン	1区PIT				径5.2、厚3.0.7		779
第66図19	須恵器 トチン	4区南壁 実測						769
第66図20	須恵器 トチン	4区天端 南等分						776
第66図21	須恵器 トチン	4区東壁 南等分						775
第66図22	須恵器 フタ	4区東壁 南等分				手づくね		774
第66図23	須恵器 鉢	実測				長8.22.8、幅5.6		864
第66図24	須恵器 トチン	17区 表採				ロクロ成形、径6.0		781
第66図25	須恵器 鉢(ヘラドキ	17区 表採				すづくね、径4.0		789
第66図26	須恵器 トチン	17区 表採				手づくね、径8.0		782

(6) 動物遺体

貝層が出土した遺構は、SK3、SK11、SK39である。いずれも13世紀前半の遺物が出土している。このうち、ブロックサンプルを採集したのは、SK11、SK39である。

SK11（第1層）は、30cm×30cm×8cm、SK39（第2層）は30cm×30cm×20cmの貝層を土ごと採集した。資料館において1mm目のふるいを用いて水洗・選別を行ったのち、名古屋大学博物館新美倫子氏に分析をお願いした。

古沢町遺跡出土動物遺体の分析

新美 倫子

分析結果

SK11サンプルでは最小個体数でヤマトシジミが1044個体、ハマグリ16個体、アカニシ1個体が出土し、貝類以外の動物遺体は含まれていなかった。サンプルのほとんどを占めるヤマトシジミは、殻長が30mmをこえる個体はわずかで20mm以下のものも多く、全体に小さい。最も大きい個体の殻長は32.7mmであり、焼けたもの1点見られた。なお、ヤマトシジミについては左殻と右殻の出土数をあわせて2で割ったものを最小個体数とした。ハマグリもすべて割れていて殻長は計測できないが、小さな個体が多い。アカニシも小型の個体であった。なお、サンプル以外にSK11埋土の5層からは古墳時代に属する骨片が1点出土している。哺乳類と思われるが、保存状態が非常に悪いために種はわからない。

SK39サンプルでは最小個体数でヤマトシジミが2461個体、ハマグリ22個体、アカニシ15個体、サルボウ11個体、アサリ3個体が出土した。SK11と同様にヤマトシジミがサンプルのほとんどを占めている。ヤマトシジミは最も大きい個体でも殻長30.1mmであり、全体に小さな個体が多く、20mm以下のものが目立った。ハマグリは殻長2、3cm程度の小さなものが多く、アカニシも殻高50mm程度の小さな個体が多い。アカニシのうち1点は焼けていた。サルボウは最も大きな資料の殻長が46mmであったが、小さなものが多い。アサリはすべて割れているが、いずれも殻長30mm程度であった。その他にカキ類の殻頂部のない破片が含まれていた。貝類以外では種不明魚類の椎骨が3点見られた。

最後になりましたが、稲田望子氏に貝類の分類・計数を手伝っていただいた。ここに感謝いたします。

サンプルに含まれていた動物遺体

種	ヤマトシジミ	ハマグリ		アカニシ	サルボウ		アサリ		その他
サンプル	左右殻合計	左殻	右殻		左殻	右殻	左殻	右殻	
SK11サンプル	2088	14	16	1					種不明巻き貝1
SK39サンプル	4921	22	19	15	11	6	2	3	種不明魚類椎骨3 同定不可魚類脊椎骨破片2
計	7009	36	35	16	11	6	2	3	6/7118

註　二枚貝は殻頂部の残存する左殻・右殻の資料数を示し、他貝は芯の残存する資料の数を示した。

第4節　小結

古沢町遺跡調査の意義

昭和40（1965）年に地下鉄（名城線）工事の際弥生時代中期の貝層が発見され、3日間の小規模な発掘調査が行われたのが、古沢町遺跡調査のはじまりであった。昭和44（1969）年の市民会館建設工事にともない、市教委社会教育課もかかわった発掘調査が実施され、縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代にわたる良好な資料を得た（第1次調査）。その後、市中心部として街が発展していく中、遺跡の調査の機会は意外と少ない。平成に入った1994年に市民会館北側の音楽練習場など1,400m²を対象に発掘調査（第2次調査）が行われ、弥生時代後期から中世にかけての、豊富な遺構と遺物の発見があった。

少ない機会ながらも、発掘調査の成果は遺跡の豊かさを印象づけるのに十分であった。

◎ 縄文時代晩期末から弥生時代前期初頭の条痕文系土器が出土する、溝状遺構が検出。［1次］

◎ 弥生時代後期の方形周溝墓の検出。古墳時代の住居跡検出。［2次］。→古代までの土地利用の変遷

◎ 中世・居館跡にともなう大溝の発見。中国陶磁片など質的に豊かな出土遺物。［2次］

2次調査から10年近い空白期間の後、2003年の3・4次調査により、古沢町遺跡とその周囲の歴史的環境の豊かさを裏付けていく資料を上積みすることができたと思う。

古沢町遺跡の立地と周囲の遺跡群

古沢町遺跡の立地する現在の中区金山周辺は、名古屋城から熱田神宮に向けて約6kmにわたって細長くのびる台地のちょうど中ほどにあたる。700m前後と最も台地幅が狭くなる一帯であり、台地の東西両縁辺に沿って弥生時代～中世の集落遺跡が集中する（第2図参照）。この範囲には古くから「古渡」と呼ばれた付近が含まれていると考えられ、「古渡遺跡群」とも呼べるようなまとまりとしてとらえることが可能と思われる。台地西縁（堀川側）には北から正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡・尾張元興寺跡があり、東縁（新堀川側）には古沢町遺跡があり、少し南に離れて東古渡町遺跡が位置する。今年度（2003年度）には、古沢町遺跡と東古渡町遺跡の空隙を埋めるように、金山北遺跡が新規に遺跡とされ、2度にわたる発掘調査で大きな成果が上がっている。これらの遺跡間では、共通する遺構や遺物が多く、それぞれの地点での特色もまた指摘できるようである。

古墳時代の集落と土地利用の変遷

3次調査の結果、古沢町遺跡での古代以前の集落などの状況がさらに明瞭になった。

2次調査で、弥生時代後期の方形周溝墓がみつかったことから、古沢町遺跡の東半南寄りを中心に、墓域として利用されていたことが考えられる。3次調査区の最も南東寄りで検出されたSZ1は古墳時代前期の墳丘墓と報告した。周囲に方形に溝を巡らす平面形態は、基本的に弥生時代の墓制の伝統を引くものであり、現状では3次SZ1が最も新しい時期の墓といえる。

古沢町遺跡では、古墳時代前期後半の松河戸期（主に4世紀代）の遺構・遺物がめだたず、古墳時代後期の5世紀後半に須恵器が登場した後、竪穴住居からなる集落遺跡として変貌していくようである。SK9やSK31土坑群でみるように、竪穴住居からなる集落の中の土坑に土器類が廃棄されるようすは、伊勢山中学校遺跡5次調査のSK108・109の例を連想させる。

周辺の遺跡に目をむけると、古沢町遺跡とは対照的に、弥生時代後期の竪穴住居跡1棟が検出された東古渡町遺跡では、弥生時代末から古墳時代はじめにかけて方形周溝墓が造られるようになる。須恵器が登

場した後にも、墓域として積極的に利用され、すぐ西隣に古代寺院「願興寺」の造立される7世紀後半まで続く。

「願興寺」が創建された一帯（遺跡名としては尾張元興寺跡）は、建立前後とも周囲は竪穴住居を主とする集落だったことが想定される。寺院建立前の区画溝が方形にめぐることも指摘され、今後居館跡の証拠の発見も期待される遺跡である。

台地西縁の正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡から東縁の古沢町遺跡にかけて、古墳時代後期から古代の集落が広がっていたことが想定される。しかし、その境界付近の様相など、まだわからないところは多い。古沢町遺跡を含む古渡遺跡群は、水陸両交通路の結節点である可能性が高い。名古屋のみならず尾張の古代史の重要な鍵を握る一帯として、調査・研究を深めていくことが期待されよう。

中世

調査区各所で遺構を検出したが、特に南寄りから西側（1～3、7、9区）にかけて多い。また、ピット（小穴）も南西に顕著である。ピットの時期は、その性格から出土遺物が少なく年代を決定する決め手に欠ける場合が多い。しかし、例えば1区では検出した130基の内65基から遺物が出土し、そのなかで中世陶器（主に山茶碗）が出土したのは39基を数える。5区では217基の内88基から遺物が出土し、52基から中世陶器が出土した。土師器のみ出土するピット、無遺物のピットもあり、そうしたことを考慮すれば、ピットの多くも中世のものと推定される。特に1区で検出した柱穴列は、4間以上×2間以上の掘立柱建物1棟が復元できた。長幅の方向が、9区の溝（SK36、SK37）や3区・7区で検出した方形土坑SK16、SK17の南北辺とほぼ同じであることからも当時期の遺構と考えたい。

出土した遺物の多くは山茶碗で、少量の古瀬戸陶器がある。検出された遺構は、これらの遺物の年代観から13世紀前半代が多く、次に14世紀中頃～後半代である。SK2からは15世紀中頃の遺物が出土したが、大型遺構で埋土上位層と考えれば、後世の混入であろう。

したがって検出された遺構を有する集落は、13世紀前半代に興隆すること、15世紀以降は衰退していることが明らかになった。南東へ約150mの位置に当たる第2次調査地点（中区金山一丁目408番）では、幅約3mの堀が検出されている。居館の堀と推定されるもので、時期は13世紀代に人為的に埋められたものとされる。当地での集落遺構と同時期であり、注目される。金山付近は、かつては古渡と呼ばれるように交通の要衝地であり、居館とその周辺に存在する集落がいくつも点在する景観であったと想像される。

近代

東窯焼に関する情報は少なく、その詳細は明らかではないが、茶器や雑器などを焼成していたようである。東窯焼は1893（明治26）年に旧藩士木金年輝が興したといわれる。1924（大正13）年に廃業、これを惜しんだ横井米窯が買い取り作陶を始めた。米窯窯は、昭和戦前期まで続いていたようである（1941年没）。窯は、間口3尺に奥行き8尺の4房の登窯とされる。1929（昭和4）年、1933（昭和8）年の住宅地図には当地付近に横井の名前が見られる。調査終了間際に見つかった窯跡は、葵口付近のみ検出したが、位置を確定する決定的な証拠となった。住民の話によれば、戦前（空襲前）にこの窯屋で窯やその周辺に置いてある製品を目撃したという。すでに廃業して放置してあったようである。

太平洋戦争の空襲は、当地付近も焦土とした。検出した防空壕は地盤が赤く焼けており、床材の一部も炭化して残っていた。焼けて赤橙色に変色した瓦や土壁の塊は、火災のすさまじさを物語る。

参考文献

[古沢町遺跡報告書]

＜1次＞　吉田富夫・和田英雄1971『古沢町遺跡　Ⅰ縄文時代編』名古屋市教育委員会

＜1次＞　和田英雄・大参義一1974『古沢町遺跡発掘調査報告　―弥生時代編―』名古屋市教育委員会

＜2次＞　名古屋市教育委員会1995『古沢町遺跡発掘調査概要報告書』

＜3次＞　名古屋市教育委員会2003『古沢町遺跡第3次発掘調査概要報告書』

[その他]（五十音順）

愛知県教育委員会1983『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）　付・猿投窯の編年について』

赤塚次郎・早野浩二2001『松河戸・宇田様式の再編』『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要　第2号』

伊藤裕偉『南伊勢系土師器の展開と中世土器工人』『研究紀要　第1号』三重県埋蔵文化財センター

尾野善裕2000『猿投窯（系）須恵器編年の再構築』『須恵器生産の出現から消滅　発表要旨』東海土器研究会

木村有作2003『名古屋台地の水瓶考Ⅲ―干潟をのぞむ瓶小考―』『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要　第5号』

瀬戸市史編纂委員会1995『瀬戸市史　陶磁史編五』瀬戸市

田口昭二1983『美濃焼』考古学ライブラリー17

多治見市教育委員会1983『大畑大洞古窯跡群（脇之島2号窯）発掘調査報告書』

名古屋市教育委員会1994『尾張元興寺跡発掘調査報告書』

名古屋市教育委員会2003『尾張元興寺跡（第10次）』『埋蔵文化財調査報告書48』

名古屋市教育委員会1996『伊勢山中学校遺跡（第5次）』『埋蔵文化財調査報告書24』

名古屋市教育委員会1997『伊勢山中学校遺跡―第6次発掘調査の概要―』

名古屋市教育委員会1998『伊勢山中学校遺跡―第7次発掘調査の概要―』

藤澤良祐1982『瀬戸古窯址群Ⅰ』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』

村木　誠1996『名古屋市域の土師器について』『埋蔵文化財調査報告書24　伊勢山中学校遺跡（第5次）』

村木　誠1996『まとめ』『曽池遺跡発掘調査概要報告書』

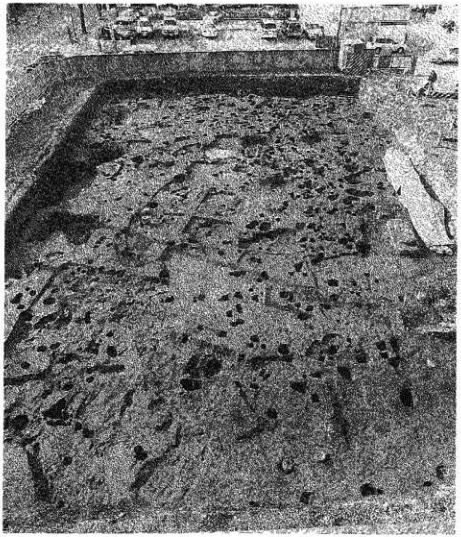


写真7　前半区全景（東から）

写真8　前半区全景（西から）

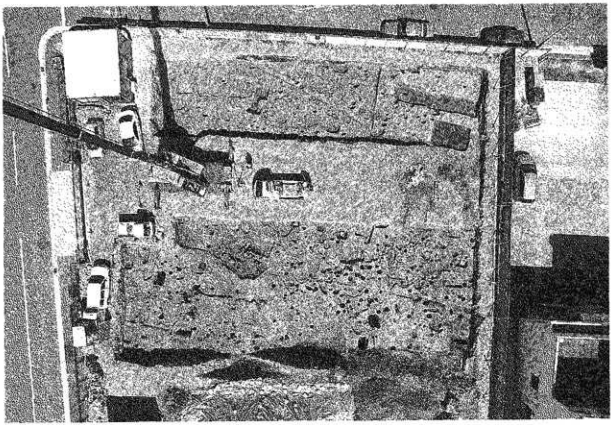


写真9　後半区全景（垂直）

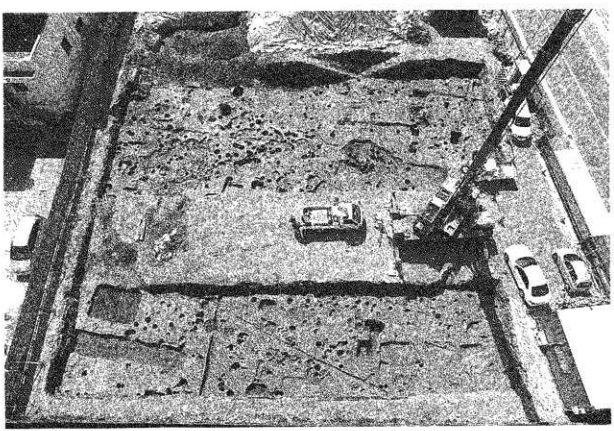


写真10　後半区全景（北から）

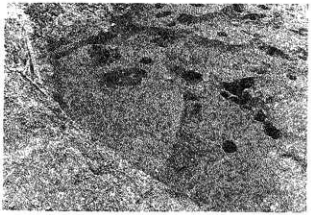


写真11　SZ1（北東から）

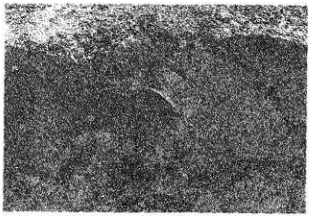


写真12　SZ1　器台出土状況

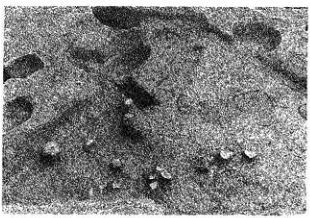


写真13　SB1　床面遺物出土状況（西から）

写真14　SB1　床面遺物出土状況（北東から）

写真15　SB1（南東から）

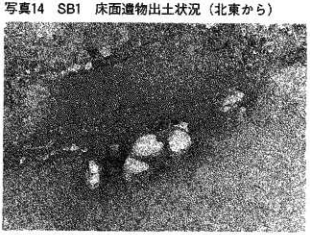


写真16　SB1内SK14　遺物出土状況（南東から）

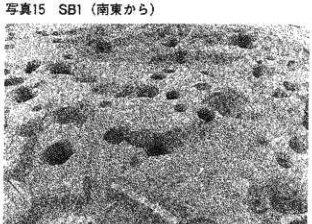


写真17　SB3（南から）

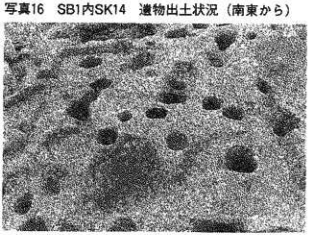


写真18　SB3（東から）

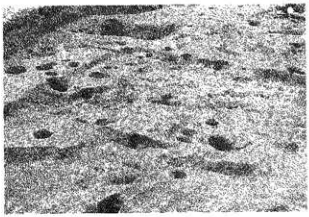


写真19　SB6（奥）・SB7（手前）（北東から）

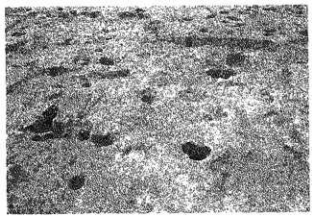


写真20　SB7（東から）

写真21　SB8（南東から）

写真22　SB9（西から）

写真23　SB11（白囲みの住居・ピット　東から）

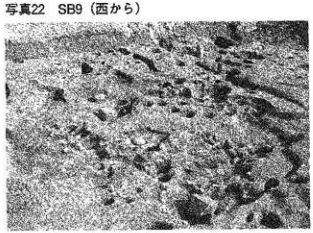


写真24　SB11（手前）とSB15（奥）（北西から）

写真25　SB12（手前）とSB13（奥）（北西から）

写真26　SB13（南西から）

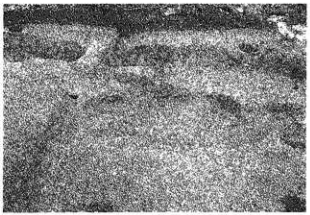


写真27　SB14　南辺壁溝（東から）

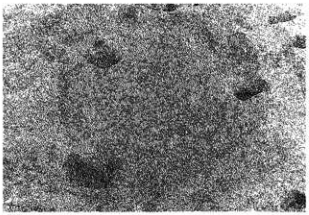


写真28　SK9　掘り上げ状態（南から）

写真29　SK31（北東から）

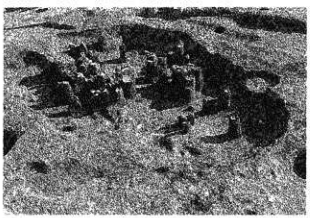


写真30　SK31･33･34･43･遺物出土状況（北西から）

写真31　SK31　作業風景（北西から）

写真32　SK32　須恵器出土状況（北西から）

写真33　SH1（白線で囲んだピット列、南から）

写真34　SD1西半（東から）

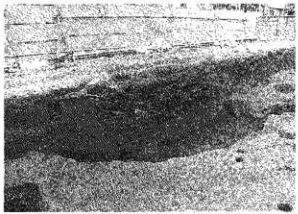


写真35　SK2

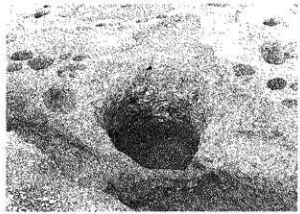


写真36　SK3

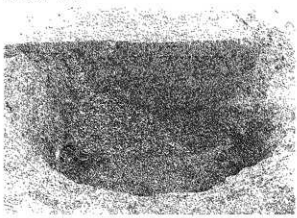


写真37　SK3　土層断面

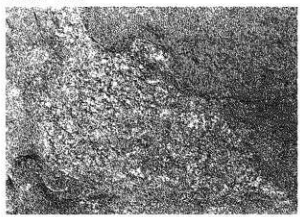


写真38　SK3　貝層

写真39　SK5

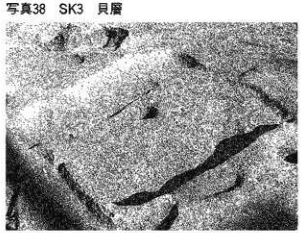


写真40　SK10

写真41　SK16・17

写真42　SK17

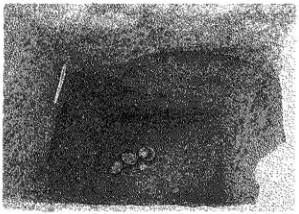


写真43　SK39

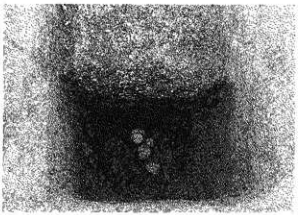


写真44　SK39　貝層

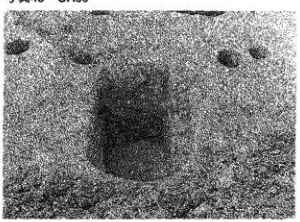


写真45　SK42

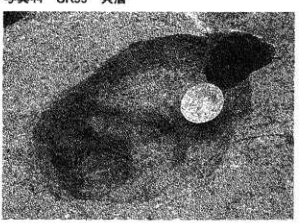


写真46　5区P57

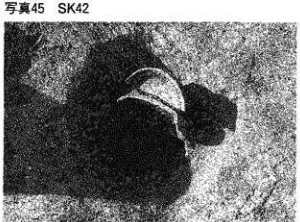


写真47　6区P55

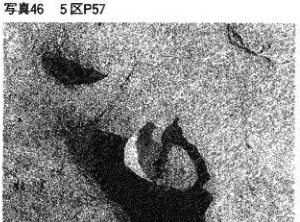


写真48　6区P123

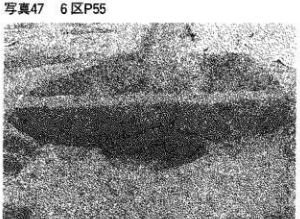


写真49　9区SK38・SK40・P116

写真50　18区P31

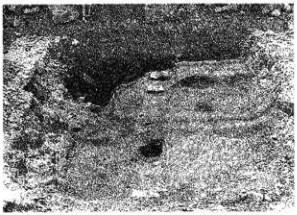


写真51　窯跡（北から）

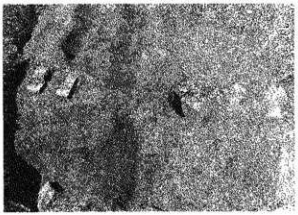


写真52　窯跡（東から）

写真53　SK20

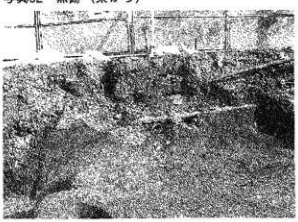


写真54　調査区東壁（南東隅）

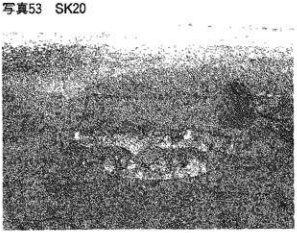


写真55　調査区南壁21層焼土ブロック

写真56　防空壕1

写真57　防空壕2　検出状況

写真58　16区P4・柱穴

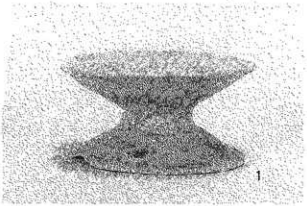


写真59　SZ1　周溝内出土　土師器・器台

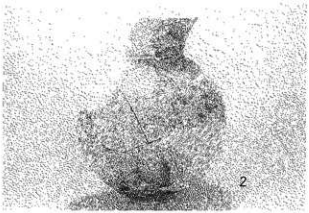


写真60　SZ1　周溝内出土　土師器・壺

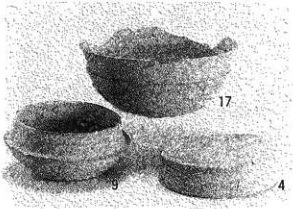


写真61　SB1出土　須恵器

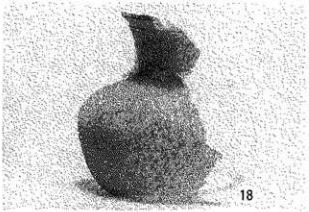


写真62　SB1内SK14出土　須恵器・壺

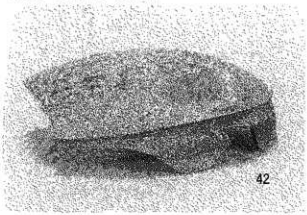


写真63　SB7内８区P1出土　須恵器・杯蓋

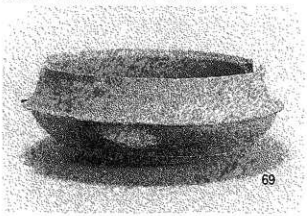


写真64　SK9出土　須恵器・杯身

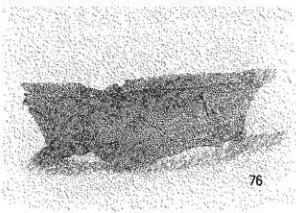


写真65　SK9出土　須恵器・甕（口縁部）片

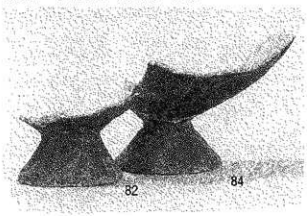


写真66　SK9出土　土師器・台付甕（台部）

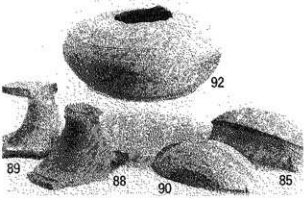


写真67　SK31出土　須恵器

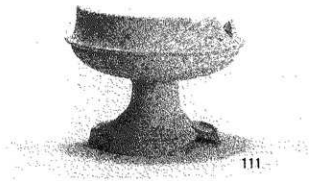


写真68　SK32出土　須恵器・有蓋高杯（杯身）

写真69　SK34出土　須恵器・高杯蓋

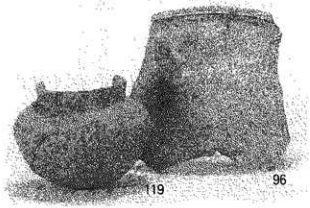


写真70　SK31（96）・SK34（119）出土　須恵器

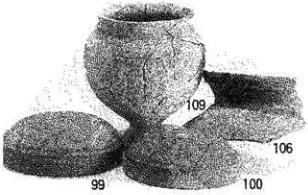


写真71　SK43出土　須恵器・土師器

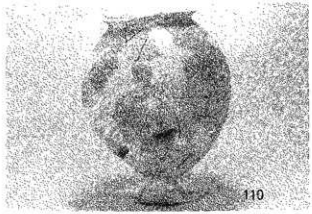


写真72　SK43出土　土師器・台付甕

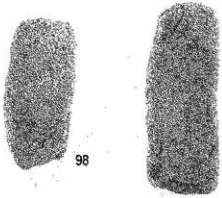


写真73　SK31（98）・SK34（120）出土　土錘

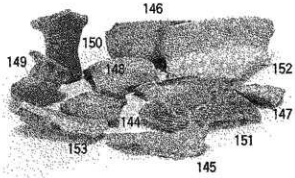


写真74　SD1　出土遺物

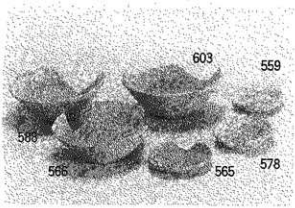


写真75　山茶碗・土師器（SK3）

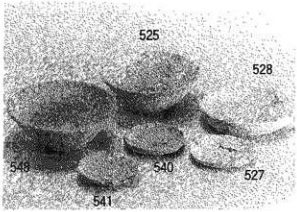


写真76　山茶碗・土師器（SK10）

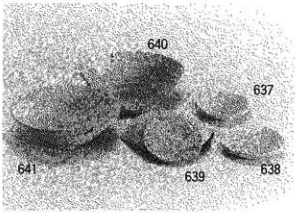


写真77　山茶碗（SK17）

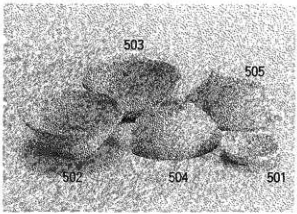


写真78　山茶碗（SK39）

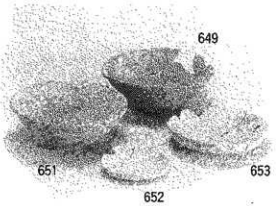


写真79　山茶碗・土師器（１区P53）

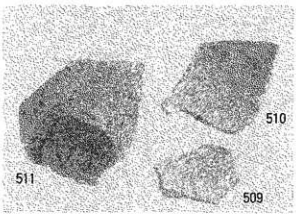


写真80　山茶碗・卸皿（SK41）

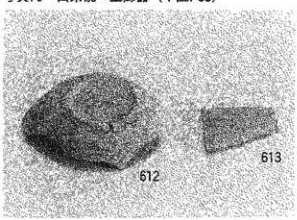


写真81　山茶碗・鉢（SK11）

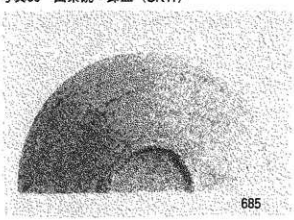


写真82　山茶碗（５区P106）

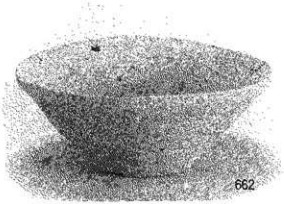


写真83　山茶碗（5区P57）

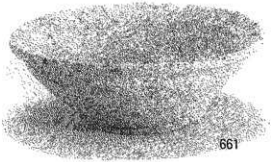


写真84　山茶碗（7区P14）

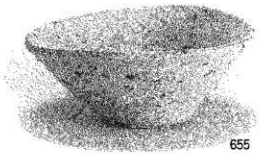


写真85　山茶碗（18区P31）

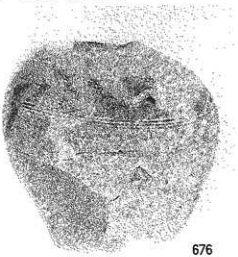


写真86　四耳壺（5区P169）

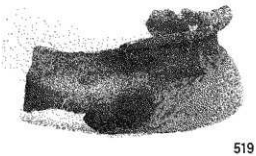


写真87　土師器（SK3）

写真88　合子（SK5）

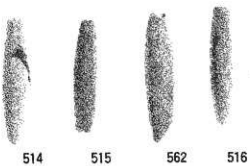


写真89　土錘（SK3）

写真90　土師器（6区P55）

写真91　急須（表土）

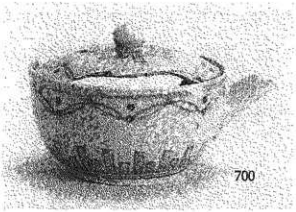


写真92　急須（SK20）

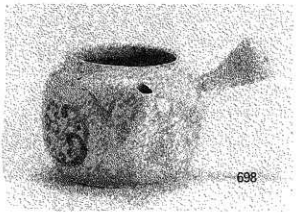


写真93　急須（SK20）

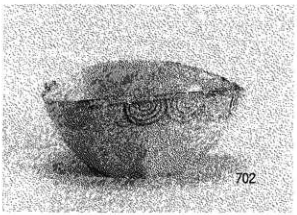


写真94　小鉢（SK20）

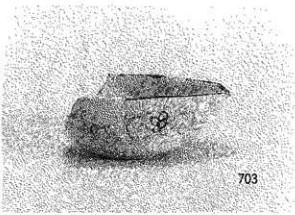


写真95　湯冷（SK20）

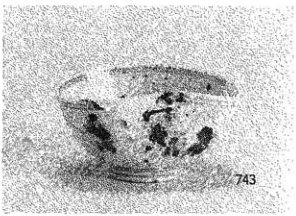


写真96　碗（SK20）

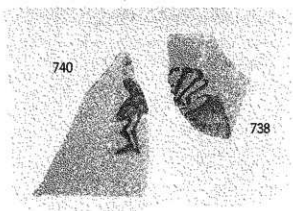


写真97　陶器（SK20）

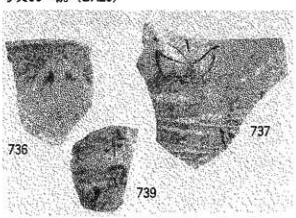


写真98　陶器（SK20）

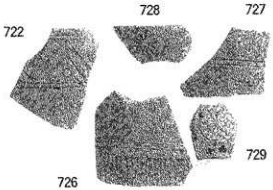


写真99　素焼（SK20）

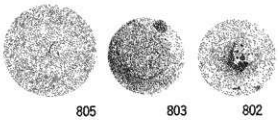


写真101　窯道具　トチン（SK20）

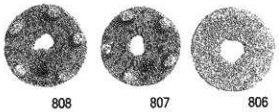


写真102　窯道具　脚付板ドチ（SK20）

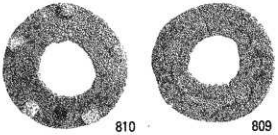


写真103　窯道具　脚付板ドチ（SK20）

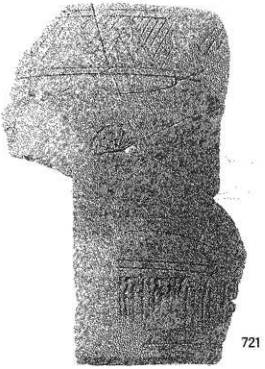


写真100　素焼（SK20）

写真104　土人形型（SK20）

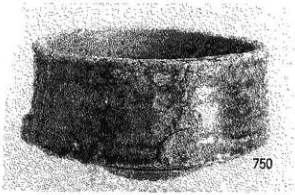


写真105　窯道具　エンゴロ（SK20）

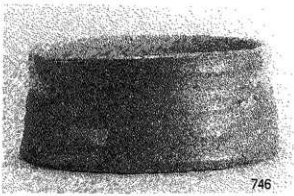


写真106　窯道具　エンゴロ（SK20）

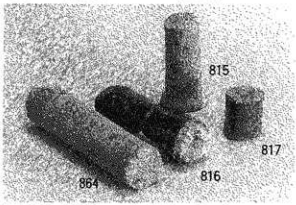


写真108　窯道具　ツク（表土・SK20）

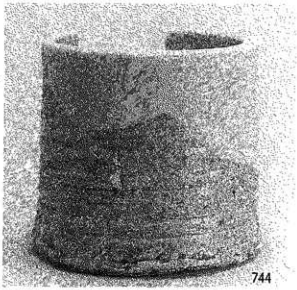


写真107　窯道具　エンゴロ（SK20）

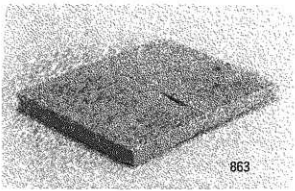


写真109　窯道具　タナイタ（SK20）

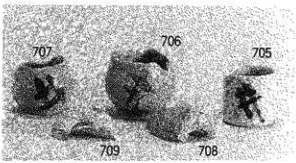


写真111　窯道具　色見（SK20）

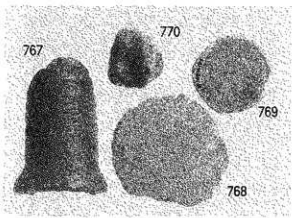


写真110　窯道具　（南壁１層）

767　ツク　　768　センベ
770　にぎりドチ　　769　センベ

第３章　第４次調査

第１節　調査の経過

今回の調査は、昨年度の調査地の東側にあたり、自走式駐車場の建設に伴うものである。調査に入る直前までは、日本たばこ産業株式会社の社屋があり、その部分はすでに遺構は滅失していることは明らかであった。また、自走式駐車場の基礎部分を対象とすることから、今回の調査は遺構の残存している可能性の高い基礎掘削予定地を対象として15か所の調査区を設定して実施した。調査区は、南西から反時計まわりに第１トレンチ～第15トレンチとし、第１トレンチから調査を実施した。昨年度の調査では、調査区南東隅で古墳の周溝が検出されており、第１トレンチにおいてその続きの検出が期待されていた。ところが、第１トレンチと第２トレンチ部分は、会社の貯水槽が位置しているところであったため、３分の２が壊され攪乱を受けていた。そのため、周溝の遺構は大半が滅失している状況であった。わずかに残る遺構から推定復元した（第17図参照）。この貯水槽攪乱土中から東雲窯に関係する窯道具、製品が出土した。第２トレンチからは１次焼成品（素焼素地）の廃棄ピットが検出された。

第３トレンチでは、南北方向の溝状遺構が検出された。区画整理前にあった旧東雲町を南北に通じる道路位置とほぼ同じ位置と思われた。溝を掘り下げたところ、同じ位置に下水管が埋設されており、戦前期には道路であったことは確実であった。溝の埋土中からは中世の陶器小片が少し出土したが、埋土の状況から近世～近代頃のものと推定された。この溝は、第９トレンチにおいて続きを検出することができた。

調査がすすむにつれ、敷地の東半部では遺物包含層はなく、また中世以前の遺構もほとんどない状況であった。すなわち南北に走る溝の西側では第３次調査と同様に古墳時代から中世の遺構や遺物が出土するのに対し、東側はほとんどないという対照的な状況がみられた。

近代の遺構は、東雲窯の関連遺物は、大半が第１トレンチ～第３トレンチから出土し、その他の調査区からは少なかった。窯跡は敷地南端中央付近で検出されたことと、空中写真や戦前の住宅地図からみても東雲窯の窯屋は、現在の南側を通る道路部分にまたがって所在したと推定された。そのほかには、戦時中の防空壕、戦災焼土層が検出された。防空壕は戦災瓦礫で埋め戻されたものとそうでないものがあった。

調査は調査区を順次掘削し、追いかけるように平面図、断面図を作成していった。最後に調査した第９トレンチは、西端部分に良好な包含層が残り、全体が遺構内という状況であった。

調査終了前の12月20日は、現地説明会を開催する予定で準備をすすめていたが、惜しくも積雪のため中止した。

第2節　遺構

今回の調査では、弥生時代から中世にかけてと、近代以降の遺構が検出された。調査は小規模な調査区を敷地の外周に沿って設定した形であるため、調査区ごとに記述をすすめる。遺構名、土層名は調査時のもので、変更した場合は併記した。

第1トレンチ（第67図）　P1は、西壁にかかって検出した。黒褐色土を埋土とする。位置的に昨年度検出したSZ1の周溝の一部と推定される。墳丘裾部で一辺約7.5～8mと推定される。P4～7も埋土は黒褐色土であった。この調査区は、包含層も良好に残っていたが、半分以上が貯水槽で壊された部分にあたり、攪乱土で埋め戻されていた。この攪乱土から東雲焼の製品、窯道具が出土している。検出面（地山面）の標高は、9.65～9.73mである。

第2トレンチ（第67図）　第1トレンチ同様、半分以上が貯水槽で壊された部分であった。またかろうじて残っていた南端部分も重機のツメ跡が残るように削りとられていた。それ以外の地山面はピットが検出されている。P3は、北側が滅失していたため、規模は不明であるが、東雲焼の素焼（1次焼成）の製品が多く含まれていた。埋土は灰褐色土である。深さ約0.28mを測る。

第3トレンチ（第67図）　溝2条が検出された。SD1はほぼ調査区の中央から西側、SD2は東端でいずれも南北方向である。SD1は東層のみ検出した。幅2m以上、深さ約0.6mを測る。溝底は平坦であるが、さらに西に深くなるようである。溝底の底面の高さは、わずかに南に傾斜している（標高は北端が9.17m、南端が9.01m）。溝底には下水管が埋設されていた。

下水管の埋設されていたことから、区画整理前には、南北の道があったことがわかり、地図で見ると東雲町内を南北に通じる道であることが明らかとなった。

SD2は、幅0.20～0.25m、深さ約0.10mのもので、埋土は灰青砂である。埋土中から窯道具が出土した。このことから、戦前の道の脇に接するように建っていた長屋の雨落溝ではないかと推定される。

第4トレンチ（第67図）　表土層が数層に分かれるものの、その直下で地山が検出される。中央に土坑1基（SK1）があるほか、ピット4基のみである。土坑は1.53m×1m、深さ約0.4mを測る。埋土中に瓦が充填されており、焼けた壁土や炭化材などが含まれていた。小規模な防空壕と考えられる。方形のピットは割石が充填された建物基礎部分である。

第5トレンチ（第67図）　敷地の南東隅に位置する。ピット、方形の建物基礎、排水管、攪乱坑である。地山面の標高は9.72～9.77mであり、第1トレンチと変わらない。遺構の希薄な地であったと思われる。

第6トレンチ（第67図）　西端は建物基礎で滅失していた。そのほかの大部分は戦前頃の柱穴、土坑、井戸である。黄橙色シルトの地山面は、南壁中央付近にのみ検出された。

第7トレンチ（第67図）　土坑2基、ピット1基を検出した。いずれも埋土は灰褐色砂で近代以降と思われる。東側半分は重機により削りとられていた。

第8トレンチ（第68図）　中央部で土坑1基（SK1）を検出した。長方形を呈するが、北西部が階段状になることから防空壕と考えられる。長さ2.4m以上、幅1.03mを測る。深さは0.55～0.7mを測る。底面は東端に低くなり、水が湧き出す状態であった。一番深いところで出土した植木鉢は、排水用のものであったかもしれない。SK1は黄褐色砂をはじめ、褐色土、黄色シルト、黄色砂などがブロック状に混じって埋められていた。階段部分で代用品の釜が出土した。

第9トレンチ（第68図）　ほぼ中央部において溝が検出された。第3トレンチで検出されたSD1の続きである。SD1は検出長2.2m、幅約2.5m、深さ約0.7mを測る。溝の東肩には杭を打ち込んだような小穴が溝辺に並行して検出された。溝の底面はやはり下水管埋設溝で壊されていた。旧地表面から下水管上端まで約1.65mを測る。また、東側に突き出た枝管は、未使用のもので、蓋がはめ込まれていた。蓋は山土と漆喰を混ぜたようなもので作られている（玉石垣の目地や井戸枠に見られる）。直径20.5cm、厚さ6cmを測る。将来の下水管取り付けのためにあらかじめ準備されているものである。

東端付近で検出した土坑（SK1）は、検出長1.4m、幅約1m、深さ約0.5mを測る。焼土、瓦が充填されていた。底面が凹凸であることから廃棄土坑と思われる。P15とした不整形な土坑は、深さ約10cmである。埋土は黒褐色土である。

SD1の西側は、包含層が厚く堆積していた。SK7は、形状不明ながら埋土は茶褐色土である。SK8は、SK7に東肩を壊されており、埋土は黒褐色土である。2基の切合いがあり、SK8a、SK8bとした。埋土中から出土した土器は、弥生土器、須恵器である。この付近は戦前の下水管、下水桝、便所甕などが埋設されており、遺構が調査区の幅より大きいものは、プランが明確に把握できなかった。

調査区西端部分東西約5mは、ほぼ遺構埋土である。東辺の一部を検出したのでSK10として掘りすすめたところ、その底面でさらに土坑状のプランを検出した（SK12～SK14）。さらにSK14とした部分でもピットが検出された。P46（深さ0.47m）、P47（深さ0.36m）、P48（深さ0.72m）などは柱穴であろう。須恵器、土師器が出土している。

第10トレンチ（第69図）　敷地の北東隅に位置する。中央付近で土坑（SK4）1基、東端で井戸状の土坑（SK2）1基、ピットなどを検出した。方形ピットは割石が充填された基礎である。そのほかのピットも戦前、戦後のものである。SK4は防空壕である。長方形を呈し、東側に出入口を設ける。検出長約2.55m、幅約1.1mを測る。埋土は淡褐黄色砂質土である。完掘していない。

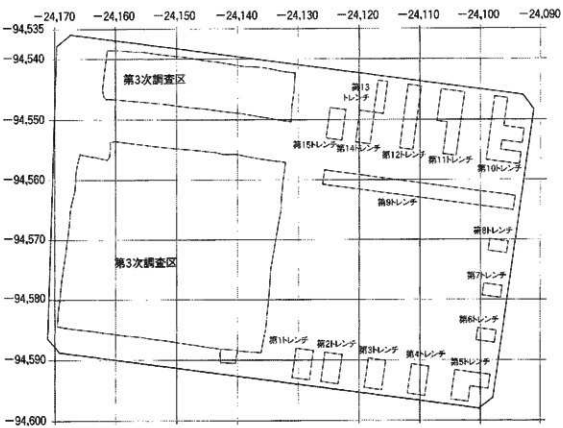
第11トレンチ（第69図）　土坑（SK1～3）は、焼土、瓦で充填されていた。いずれも防空壕である。SK1はL字状を呈し、南側が出入口となり、階段が造られる。本体（東西）の検出長1.4m、幅約1.1m、深さ約0.69mを測る。南辺側に段が付いている。SK2もL字状を呈し、南側に出入口が付く。本体部（東西）の検出長1m、幅約0.65m、深さ約0.65mを測る。SK3は検出長1.75m、幅約0.9m、深さ約0.9mを測る。東側に階段が付いていたと思われる。

第12トレンチ（第69図）　本調査区では茶褐色土が堆積した面で遺構検出を行ったが、この面で検出されたものは、近代の遺構であった。地山面において再度遺構検出を行ったが、南端において土坑、ピットが検出されたに留まった。土坑（SK21）は橙黄色土、褐色土、黄色砂がブロック状に混在した埋土である。東壁際で検出したP14は、第9トレンチで検出されたSD1の西肩である。南端で検出された土管も未使用のものである。

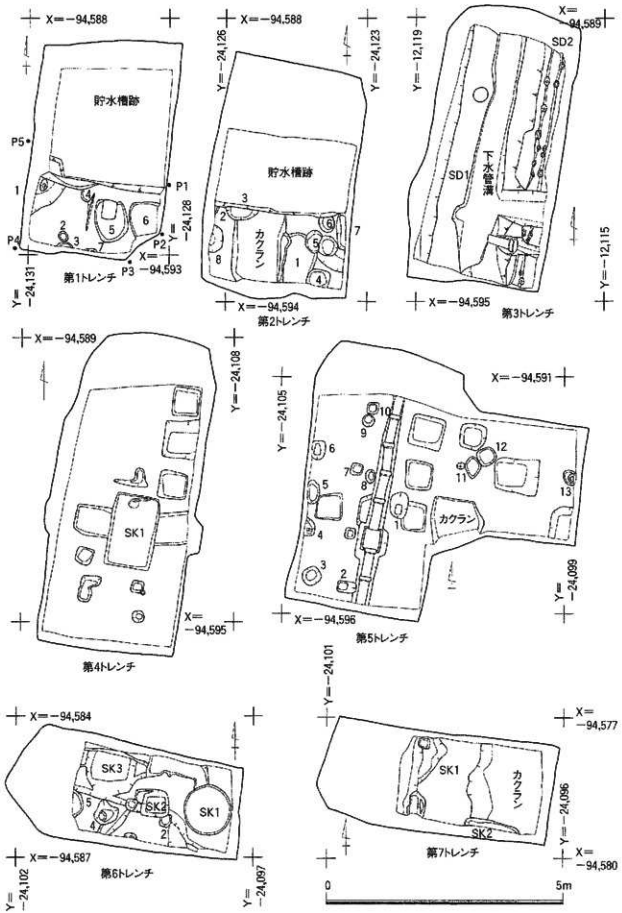
第13トレンチ（第70図）　SK1、SK2が検出された。SK1は、わずかに西壁際で検出されたもので、長さ約3.7m、検出幅0.4mを測る。南端は第14トレンチSK1に壊されている。埋土は茶褐色土である。地山土を含まず、均質土である。SK2は、茶褐色土のやや粘質土を埋土とする。埋土中から須恵器（蓋）が出土した（写真113）。土層観察の結果、この上位層も新たに掘削された土坑の埋土であることが明らかとなった。その上面は近世以降の茶褐色均質土で覆われている。

第14トレンチ（第70図）　上位の整地層で検出したところ、ピット、SK3（防空壕）が検出された。地山面ではSK1、SK2、SK4、SK5が検出された。SK5の埋土はブロック土である。SK2はSK1に切られ、埋土はより細かいブロック土である。

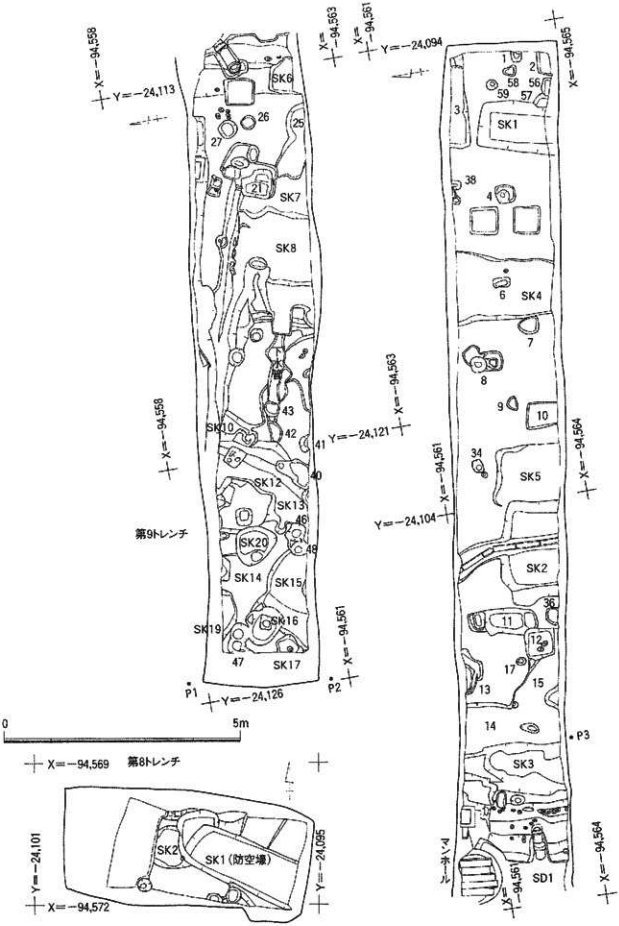
第15トレンチ（第70図）　北壁に沿って検出した土坑（SK4）は結果２基となった。東端は、長さ1.1m、幅0.4m以上、深さ約0.36mを測る。西側は長さ約0.8m、幅約0.2m、深さ約0.25mを測る。遺物はわずかであるが、中世頃と考えられる。SK3は検出長1.45m、幅約0.75m、深さ約0.17mを測る。SK1、SK2は形状や埋土から防空壕と考えられる。SK1は未掘であるが、南西部が突出し、出入口と考えられる。SK2は北西部の一部を掘削した。深さ約1.1m（地山面から0.6m）を測る。P10、P11は上位層面で検出した柱穴で、柱部分の径14～16cm、深さ30～40cmを測る。北西端の円形土坑は、溝が収まっており、便槽と考えられる。



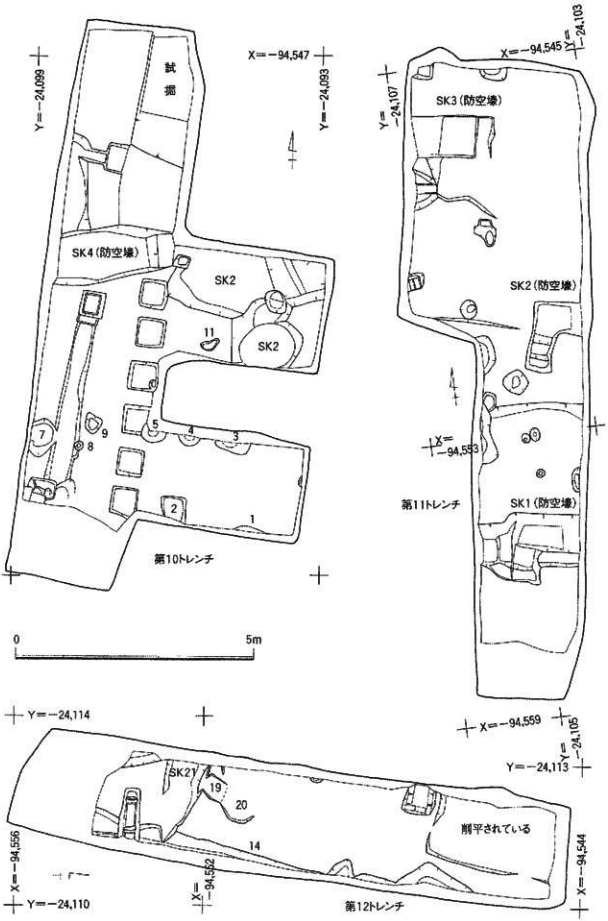
第66図　トレンチ配置図



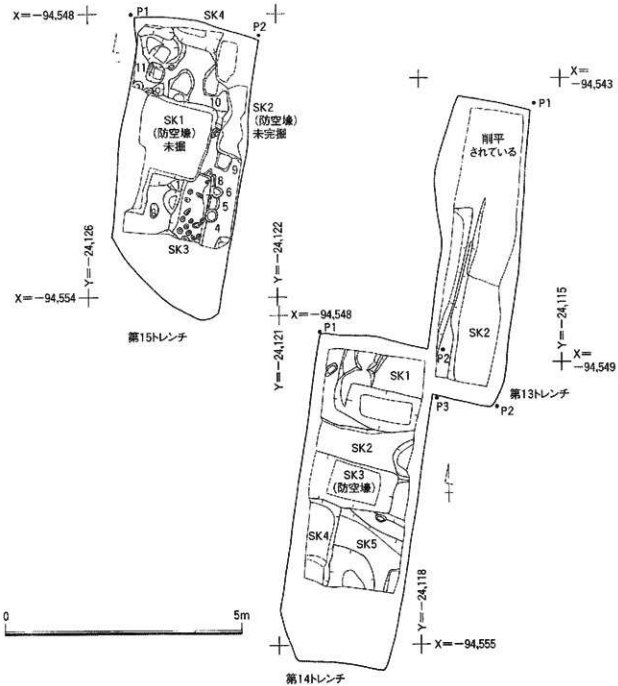
第67図　第１～第７トレンチ平面図（S＝１／80）



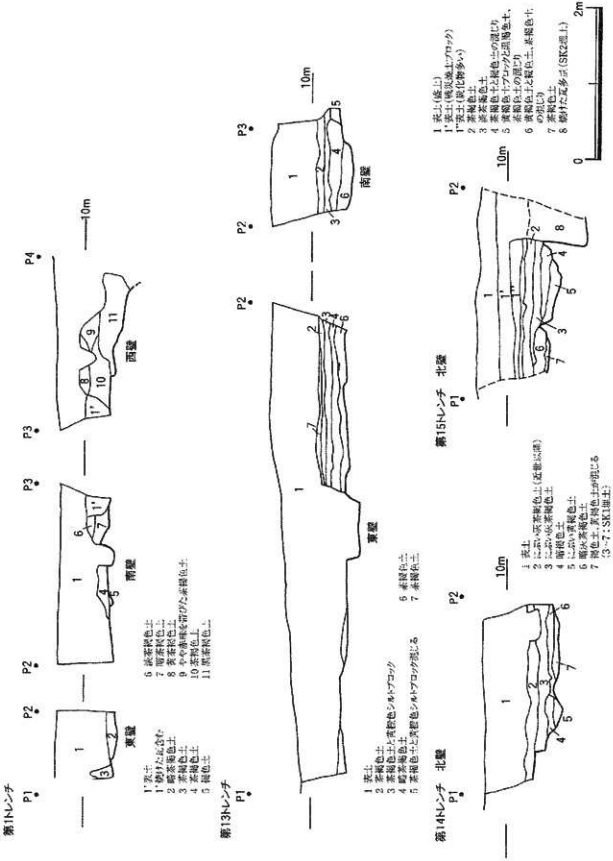
第68図　第８・第９トレンチ（S＝1／80）



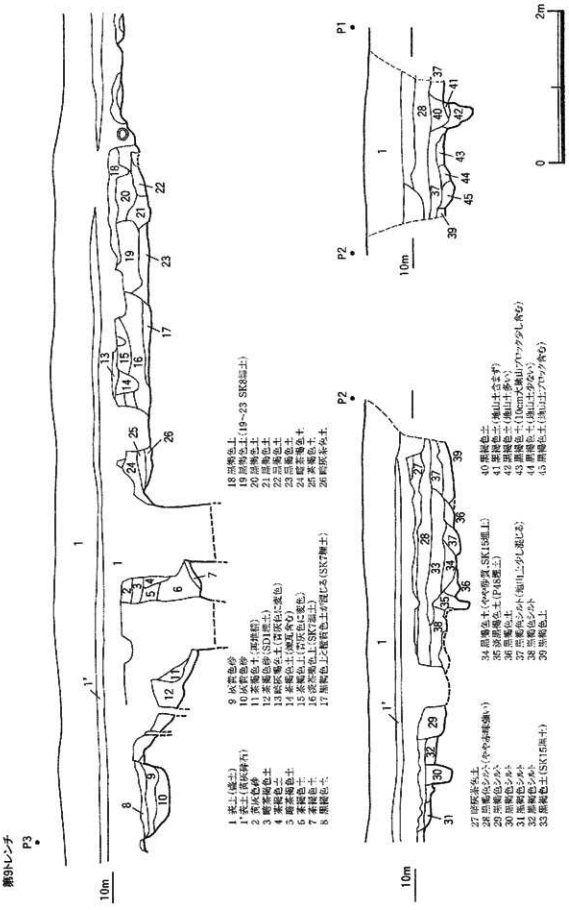
第69図　第10～第12トレンチ（S＝1／80）



第70図　第13～第15トレンチ（S＝1／80）



第71図　土層図 (1) (S＝1／50)



第72図　土層図 (2) (S＝1／50)

第3節　遺物

出土した時点でコンテナケース19箱分収納した。主要な遺物は、土師器、須恵器、東雲窯に関係する遺物である。特に東雲窯の製品は、貯水槽跡地から昨年度の調査よりも多くの製品が出土した。

第1トレンチ（第74図1～24）　P1は弥生土器、土師器の小片がある。弥生土器は、口縁部内面に扇形文が刻まれている。口縁端部が丸く作られている小片は、暗灰色で砂粒を多く含む。縄文土器であろうか。P4は土師器の小片がある。P5は土師器、須恵器（杯身）の小片がある。P6は土師器の小片がある。貯水槽跡からは、撤去後の埋め戻し土中から陶磁器、窯道具等コンテナケース3箱分採集した。陶磁器は大部分が東雲窯の製品と思われる。明橙白色ないし白黄色をした素焼素地のもの（1次焼成品）もある。蓋（1、2）、碗（3、5、9～11、13～15）、皿（16、18、19）、瓶類（4、12）、徳利（20～22、24）、汁次（23・写真132）、土瓶（写真133）などがある。17は1次焼成品で、「月見とて　月見る月・・」と詩が詠まれる。23は鳥形に造形し、鉄釉で目、羽が描かれ、体部下半部に「やはき　ふじ傳」と書かれる。店の名前であろう。土瓶（写真133）は外面に「(惟) □（衝）□□図」と人物が書かれている。窯道具は、エンゴロ、トチン、ツク、タナイタ等第3次調査で出土したものと同じものがあるほか、原材料と考えられる粘土塊（青灰色シルト）がある。

第2トレンチ（第74図25～32）　P1は土師器、須恵器の小片がある。P3は陶器、素焼素地（1次焼成品）がある。急須（29）、建水（32）は茶器である。25、26、28～31にみられるように「東雲」の刻印から東雲窯のものである。ただし、27は「不二」の刻印である。第3次、第4次調査をあわせても1点のみの出土である。不二は、上前津にあった不二見焼の刻印であろう。刻印については後にのべる。P2、P5、P6、P7でも東雲窯の製品、窯道具が出土した。

第3トレンチ　SD1からは、上位層から須恵器、山茶碗、近世陶器、東雲焼、窯道具が出土した。下位層から土師器、須恵器、中世陶器（大窯期の擂鉢片ほか）、近世陶器（皿）、古代の平瓦が出土した。いずれも小片である。SD2は、磁器、東雲窯製品、窯道具、瓦、焼土塊などがある。

第4トレンチ　P1、P2からは陶磁器、窯道具が出土した。SK1からは、焼土、炭化材、瓦、磁器が出土した。

第5トレンチ　P6は山茶碗の小片がある。

第6トレンチ　P2は須恵器（杯）の小片がある。P4は土師器の小片がある。SK2は磁器がある。

第7トレンチ（第75図12）　SK1は陶磁器がある。

第8トレンチ（第75図13～18）　SK1は陶磁器がコンテナケース1.5箱分ある。代用品の陶器（釜）は、煤が付着している。湯飲み茶碗には赤字で「谷村呉服店」とある。飯茶碗の高台内には、「岐304」、「岐45」とある。SK2は陶磁器、ガラス製薬瓶がある。表土中から磁器（皿）（第75図18）が出土した。直径14.2cm、器高3cmを測る。口縁内面に2本線、見込みに「カ」、高台内面に「岐1065」と書かれる。戦前の統制食器である。

第9トレンチ（第75図1、4、7、11）　SK2は東雲窯の1次焼成品がある。P11、P14からも1次焼成品が出土した。SK7は土師器、陶器（擂鉢）がある。SK8は弥生土器、須恵器がある。SK8b出土の弥生土器（第75図1）は、外面ヘラミガキ調整を施す。暗褐灰色を呈する。須恵器（第75図4・写真112）は、外面に波状文を施すが自然釉がかかりわかりにくい。これ以外は弥生土器（もしくは土師器）であった。

SK9、SK10、SK11、SK12、SK14、SK15、SK16、SK17、SK18、SK19、SK20、P15、P40、P46、P47、P48では土師器、須恵器（もしくはどちらか）が小片、少量ながら出土した。SK10の底面で検出したSK15、SK16、SK17も土師器、須恵器（杯、高杯の小片）が出土している。古墳時代後期の堀と考えられる。

表土から灰釉陶器１点が出土した。灰釉陶器は第３次、第４次あわせてもほとんど出土していない。

写真112　須恵器　壺（SK8）

第10トレンチ　P2は磁器片が出土した。SK4は陶磁器が出土した。

第11トレンチ　SK1（防空壕）から代用品（ガスコンロ）、ガラス瓶、陶器、防空壕２から陶磁器、碍子、瓦、SK3（防空壕）から陶磁器が出土した。

第12トレンチ（第75図５、６）　P14（SD1西屑になる）は須恵器、瓦、陶磁器が出土した。包含層からは土錘が出土した。

第13トレンチ（第75図２、３）　SK1、SK2から須恵器（甕）が出土した。２は薬壺の壺であろう。３は内面にかえりが付くことから岩崎17号窯式頃か。茶褐色土層からは、土師器、須恵器、中世陶器、陶器が出土した。

第14トレンチ　SK1は土師器、須恵器、陶磁器がある。SK4は代用品の陶器（釜）、磁器、陶器（通徳利）がある。

第15トレンチ（第75図８）　P10、P12、SK4からは、中世陶器が出土した。SK2（防空壕）からは、焼けたビール瓶が多量に出土した。コンテナケース１箱分採集した。

表土・その他（第75図19）　敷地からは煉瓦建物基礎が検出されたが、第13トレンチまたは第14トレンチの排土から煉瓦に「廿二」（縦字）と刻印があるもの１点を採集した。煉瓦の寸法は22.5×10.8×5.7cmを測る。

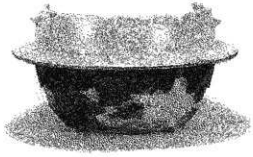


写真114　陶器　釜（第８トレンチ　SK1）

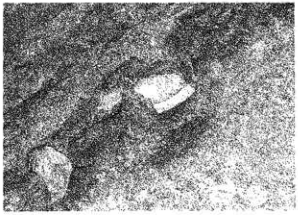


写真113　須恵器出土状況（第13トレンチSK2）

写真115　陶器　煙管（表土）

19は、陶器（壺管）で代用品である。「岐78」「実用□案」「電六九二九五」とエンボス文字である。

東雲窯刻印　「東雲」印の製品は第３次調査でも出土していたが、今回窯焼のものが多く出土したことから、文字を分類してみた。字体には楷書や行書（草書）など数種類のものがみられた（第73図）。

分類の結果、「東雲」印は、８種類を確認した。１、２は楷書、３～８は行書（草書）である。１は、はっきりと１画ずつ書く。２はやや太く、筆で書いたような感じ。３は「雲」の雨冠の「、」に特徴がある。４、５はよく似ているが「雲」の「云」に違いがある。６は少し太めな字である。７は「雲」が丸い感じを受ける。８は太い字で最もくずれている。

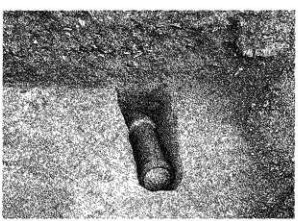


写真116　下水管（第12トレンチ）

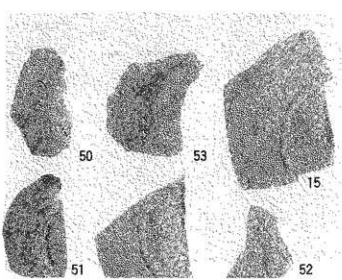
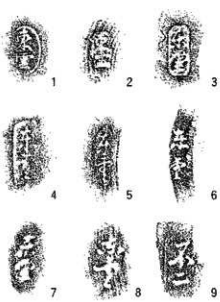
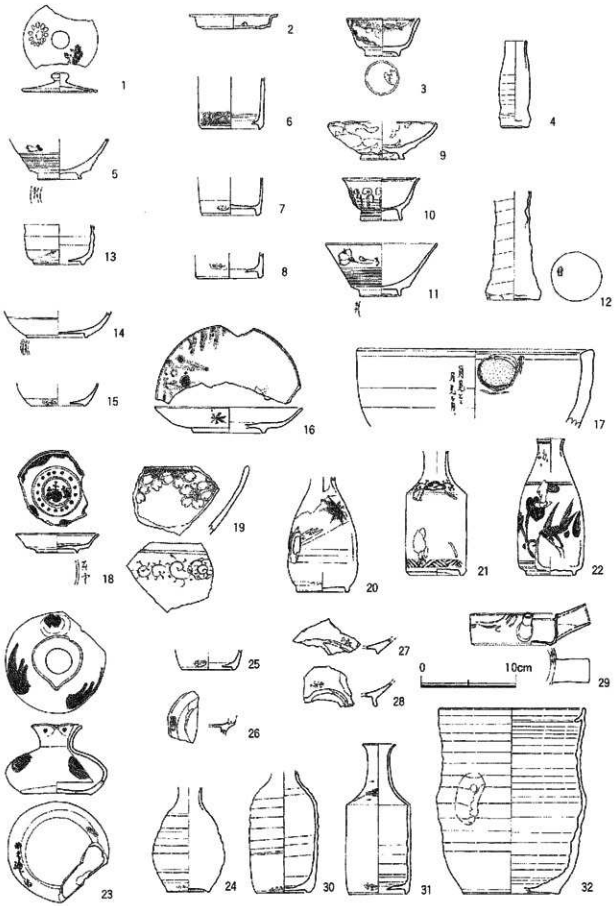


写真117　刻印各種（数字は実測図番号）

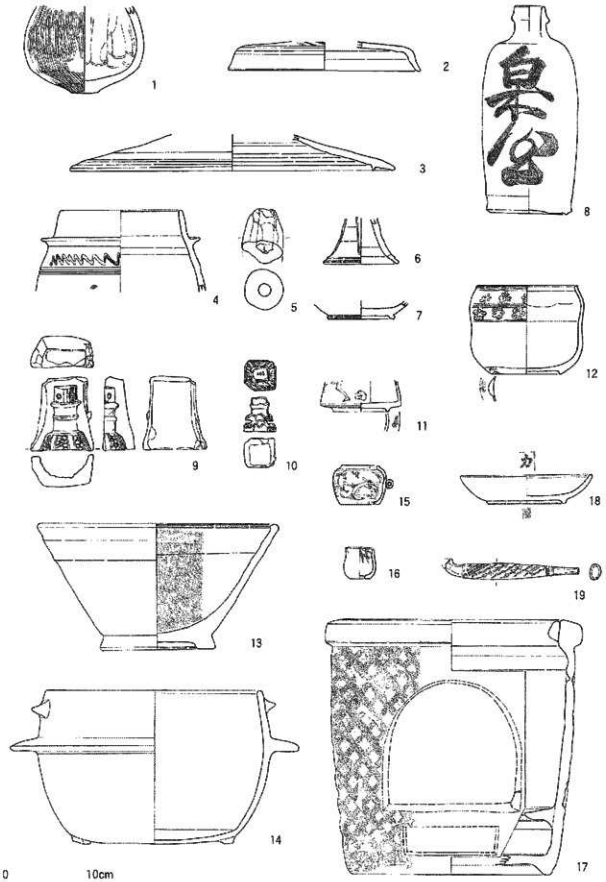


第73図　刻印拓影（S＝１／１）

1　1点　態利（第74図25）
2　1点　瀬脈（第74図12）
3　4点　既（第74図26・第75図９）等
4　2点　能町（第74図８）、機（第74図15）
5　17点　風（第74図15・18）、態利（第74図６・20・21）、別（第74図13）等
6　1点　急頻（第74図29）
7　1点
8　12点　雲利（第74図30・31）等
9　1点　風？（第74図27）



第74図　出土遺物（1）（S＝1／4）



第75図　出土遺物（2）（S＝1／4）

遺物観察表

掲載番号	器種名	出土遺構	法量			特徴	備考	掲載頁
			口径	器高	底径			
第74図1	陶器 瓶	1トレンチ 貯水槽カクラン		2.1		基部破片。灰釉系、白化粧土(梨)+鉄絵(横)	遺存20%	11
第74図2	陶器 茶入	1トレンチ 貯水槽カクラン		1.5		口縁部(9.4)、内面につまみ	遺存10%	10
第74図3	陶器 碗	1トレンチ 貯水槽カクラン	7.7	4.0	2.8	高台部破、鉄絵、「川」、「雨」「東雲」5類	完形	1
第74図4	陶器 鉢	1トレンチ 貯水槽カクラン	(23)	9.2	(3.2)	淵→うのみ鉢	口縁部40%、修復完存	36
第74図5	陶器 壺	1トレンチ 貯水槽カクラン		(4.3)	4.7	肩部・白化粧土(梅文)、刻印「東雲」5類 37と同形	底部完存	13
第74図6	陶器 徳利	1トレンチ 貯水槽カクラン		(5.5)	(5.1)	灰釉、鉄絵、刻印「東雲」5類	底部完	17
第74図7	陶器 徳利	1トレンチ 貯水槽カクラン		(4.0)	6.4	鉄釉「東雲」5類	底部完存	14
第74図8	陶器 徳利	1トレンチ 貯水槽カクラン		(2.7)	(7.2)	鉄釉「東雲」4類	底部40%	16
第74図9	陶器 鉢	1トレンチ 貯水槽カクラン	(13.4)	4.1	4.8	灰釉→うのみ鉢	口縁部30%	2
第74図10	陶器 鉢	1トレンチ 貯水槽カクラン	(8.2)	4.5	(4.4)	灰釉、鉄絵→白化粧土(雲文)	口縁部10%	3
第74図11	陶器 鉢	1トレンチ 貯水槽カクラン	(11.6)	5.6	4.9	灰釉(鉄絵)、鉄絵→白化粧(梅文)(雲文)、刻印「東雲」5類	口縁部50%	37
第74図12	陶器 (瓶か) 蓋	1トレンチ 貯水槽カクラン		11.6	5.4	鉄絵、刻印「東雲」2類	遺存良存	25
第74図13	陶器 鉢	1トレンチ 貯水槽カクラン		(4.2)	(5.4)	灰釉系、刻印「東雲」5類	遺存10%	18
第74図14	陶器 (灰皿) 蓋	1トレンチ 貯水槽カクラン		(2.8)	(11.2)	刻印「東雲」5類	遺存30%	15
第74図15	陶器 蓋	1トレンチ 貯水槽カクラン		(2.3)	(5.8)	灰釉系、刻印「東雲」4類	遺存20%	19
第74図16	陶器 蓋	1トレンチ 貯水槽カクラン	(15.6)	2.7	(7.6)	灰釉系、鉄絵、口縁	口縁部10%	4
第74図17	陶器 (灰皿) 蓋	1トレンチ 貯水槽カクラン	(25.2)	(7.3)		鉄釉「川」以下で「月」か「月」?	口縁部10%	33
第74図18	陶器 皿	1トレンチ 貯水槽カクラン	(8.8)	2.0	4.4	透明釉、鉄絵(梅文) 刻印「東雲」 背景不明	口縁部20%	5
第74図19	陶器 甕	1トレンチ 貯水槽カクラン		(7.3)		灰釉系、鉄絵1(ウロコ)?		37
第74図20	陶器 瓶か	1トレンチ 貯水槽カクラン		(12.2)	4.7	外面灰釉、白化粧土+鉄絵(もみ)、刻印「東雲」5類	体部遺存	7
第75図21	陶器 瓶か	1トレンチ 貯水槽カクラン		(13.2)	5.7	灰釉、鉄絵(花唐草文)	体部遺存	8
第74図22	陶器 瓶か	1トレンチ 貯水槽カクラン	2.9	14.5	5.2	灰釉系、鉄絵(縞を描き)、	口縁完存	6
第74図23	陶器 徳利	1トレンチ 表土	5.4	7.4	6.9	外面灰釉+鉄絵、内面灰釉+鉄絵、刻印「東雲」5類	底部70%	103
第74図24	陶器 壺か	1トレンチ 貯水槽カクラン		(11.1)	4.4	灰釉、刻印「東雲」5類	底部完存	9
第74図25	陶器 (瓶か) 加筆	2トレンチ P3 2層		(2.2)	(5.6)	刻印「東雲」1類	底部30%	50
第74図26	陶器 (壺か) 加工	2トレンチ P3 2層				刻印「東雲」3類		51
第74図27	陶器 (壺か) 加工	2トレンチ P3 2層				刻印「不一」		52
第74図28	陶器 (壺か) 加工	2トレンチ P3 2層				刻印「東雲」8類		53
第74図29	陶器 急須	2トレンチ P3 2層	9.0	3.4	9.0	灰釉系+鉄絵、白化粧「三」、刻印「天保」6類	口縁変形	54
第74図30	陶器 (壺か) 加工	2トレンチ P3 2層		(13.0)	8.6	底部、刻印「天保」8類	底部完存	44
第74図31	陶器 (壺か) 加工	2トレンチ P3 2層	3.5	15.9	6.4	鉄釉、刻印「東雲」8類	口縁部50%	44
第74図32	陶器 (灰皿) 陽炎	2トレンチ P3	15.4	19.7	10.0	施釉あり	口縁部50%	49
第75図1	陶器 土管 逆	9トレンチ SK8b		(9.4)	(2.8)	施釉あり、外面ヘラミガキ、内面ボタ、端面色	底部30%	60
第75図2	磁器 蓋	13トレンチ SK1				高台部(20.8)	高台10%	105
第75図3	磁器 蓋	13トレンチ 第表5層1面 (樹脂書き第1面)				瑞器碗(35.2)	高台10%	107
第75図4	磁器 皿	9トレンチ SK8	(13.1)			外面波状文、白磁釉	口縁部15%	108
第75図5	二彩	12トレンチ 包含層				底径(5.9) 花押1.4	高台$\frac{1}{2}$	106
第75図6	磁器皿 高麗	12トレンチ SD1			(8.2)	釉薬、貫入あり、内面白磁釉	遺存25%	104
第75図7	鉄鍋 鍋 (鍋)	9トレンチ 表1		(1.9)	(7.3)	内面に釉薬	底部40%	55
第75図8	陶器 徳利	15トレンチ ムネ内	3.2	22.5	9.3	施釉刷、灰釉、鉄絵「三四」二、「鶴亀」「大木屋」?	完形	48
第75図9	土人形	9トレンチ SK1				高さ8.0 幅5.7 厚さ3.4	完形	46
第75図10	土人形 (馬)	8トレンチ SK2		3.7		鞍2、馬頭型、型成形、背部・腹部・白磁	上半完存	38
第75図11	陶器 鍋	9トレンチ SK1		(3.4)	6.0	灰釉、鉄絵+丸印、刻印「東雲」3類	底部完存	47
第75図12	陶器 硯か?	7トレンチ SK1	(10.8)	9.6	7.8	灰釉系、象眼三角(砂粒)、刻印「東雲」5類	口縁部10%、底部50%	40
第75図13	陶器 瓶か	8トレンチ (陶器溜)	26.0	13.9	12.4	焼締	口縁部80%	42
第75図14	軟質器 蓋	8トレンチ SK1 (陶器)	(23.1)	16.55	17.8	代行窯、外面上部および内面波型釉、外部金具に厚くスス付着	口縁部90%	101
第75図15	須恵器 鉢か	8トレンチ SK1 (北側)	4.1	4.2	4.1	高台2重、焼付、透明釉	口縁部完存	45
第75図16	瀬戸焼 徳利	8トレンチ SK1南東隅	3.1	3.4	2.2	瑞器碗(あり、貫入釉薬、焼締	完形	32
第75図17	陶器 鍋	8トレンチ SK1 (陶器)	(27.3)	27.5	21.4	外面端子2、外面全体にスス付着	口縁部15%、底部30%	102
第75図18	磁器 甲	8トレンチ 表土	14.3	3.1	8.3	絵具変彩、透明釉、型成形、底面内「鶴1085」見込み「力」	完形	39
第75図19	陶器 灰皿	表採				代用品、長8(14.5) 高8.2、型成形、緑い白・海苔に絵柄、刻印「電気ホニ ホ」「東京工業」の刻印あり		58

第４節　小結

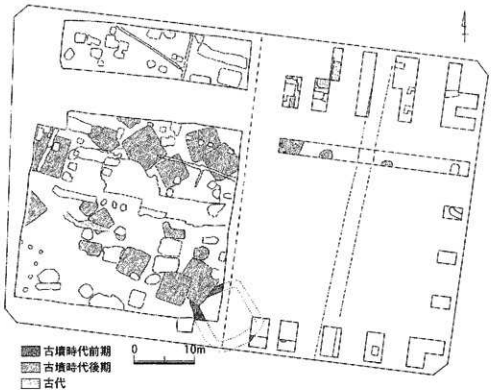
今回の調査は、わずかな面積であったが、敷地全体に分散して調査区を設定したことから、敷地内における遺構、遺物のあり方を把握することができた。特に注目される点は、敷地中央部を南北に走る近世の溝SD1を境として、様相が異なっていたことである。西側では第３次調査と同様な様相であったのに対して、東側では遺構、遺物は希薄であったことである。遺構検出面である地山面（熱田層上面）は、西側と同様に黄橙色シルト層であり、著しく削平を受けていたわけではなかった。元々人の手が加えられることが少なかったと考えられる。しかし、これをもって敷地の東側一帯に遺構がないことを示すものではない。第２次調査の行われた、東南へ約150mの地点では弥生時代以降の以降や遺物が多く見つかっており、遺跡が途切れているとは考えられないからである。

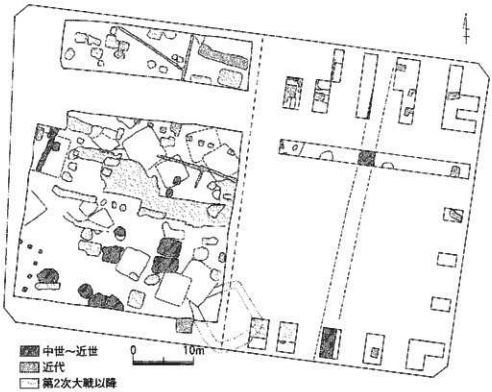
『庄内川治水地形分類図』により当地付近の微地形をみると、付近には９m等高線が走っている。この等高線を追うと、古沢町遺跡の北方には大きな谷状の窪地が所在している。また、東側は大津通付近ですでに５m等高線が走り、急な傾斜面となっている（第２図参照）。実際、敷地の西側を南北に走る現在の道路から東方、大津通に向けては坂道となっており、さらに大津通を越えて台地を下りる。

したがって、敷地の東半から道路にかけては、最も高くなる台地縁に該当していたと考えられる。台地縁という環境から、現在でも各地で見られるように雑木林のような地帯であったと推定される。集落の後背地として有り続けたのであろう。

SD1は、この森林地帯の西側を通じている。近世の頃は、城下町の南側にあたり、絵図をみても空白地となっている。まだ雑木林や藪地であったか利用されていたとしても畑地といった程度であったのであろう。近世の遺物もまた小片が出土する程度でこのことを裏付けている。明治24年の地図では、道路となっており、溝の跡地は境界線として生きたようである。太平洋戦争後、区画整理事業によって消滅するまで、東雲町の中心を貫く道路であったのである（江戸期～明治９年・古渡村　明治９年～東古渡村　明治22年～古沢村大字東古渡　明治31年～東古渡町、大正２年～東雲町）

東雲窯に関しては、窯道具、製品、素焼素地（１次焼成品）、原材料の粘土塊が出土した。また、興味深いのは「東雲」印のほかに「不二」印が１点出土したことである。このことはどのように解釈すべきであろうか。製品であれば、窯屋内で使用されていたものと思われるが、該当する遺物は素焼素地の１次焼成品であったので、東雲窯で釉薬を掛けて焼成する予定であったものと思われる。もしくはこの１次焼成品も東雲窯で成形し、「不二」を押していたのかもしれない。東雲窯を後継した横井米禽（本名兼吉）は、東雲窯を買い取る前には夜寒窯へ通い、陶芸を習っていた（『窯内』1974年）。このように融通のきくところが多々あったものと思われる。不二見窯から注文を受けて東雲窯で製作することがあったことが明らかとなった。以前から夜寒焼、不二見焼、東雲焼は、色調もよく似た製品であり、破片が出土してもどの窯かはっきりしないことがあった。よく似た製品を焼成していたことも、注文を受け易い理由の一つであったと思われる。





第76図　遺構変遷図（S＝1／625）

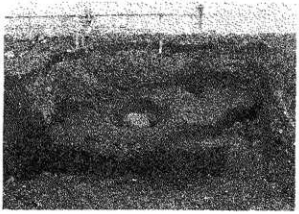


写真118　第1トレンチ（北から）

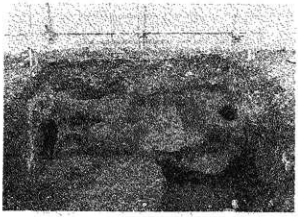


写真119　第2トレンチ（北から）

写真120　第3トレンチ（北から）

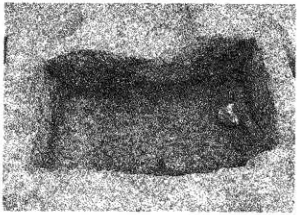


写真121　第4トレンチ　SK1（東から）

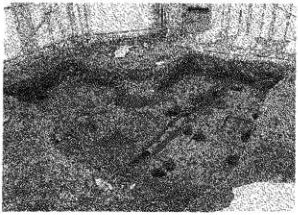


写真122　第5トレンチ（北西から）

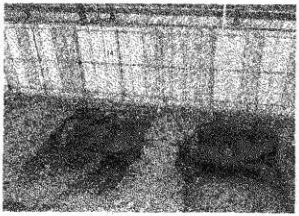


写真123　第6・第7トレンチ（西から）

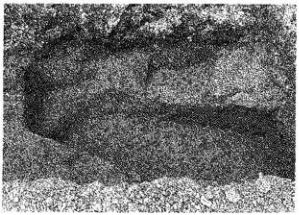


写真124　第8トレンチ　SK1（南から）

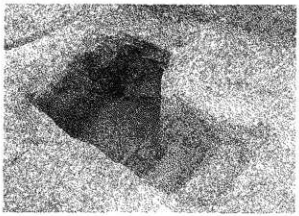


写真125　第11トレンチ　SK2（南西から）

写真126　第９トレンチ（西から）

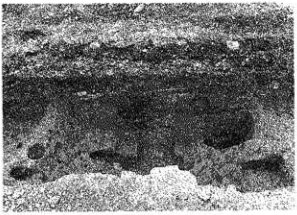


写真127　第９トレンチ　SD1（北から）

写真128　第９トレンチ　西端（南東から）

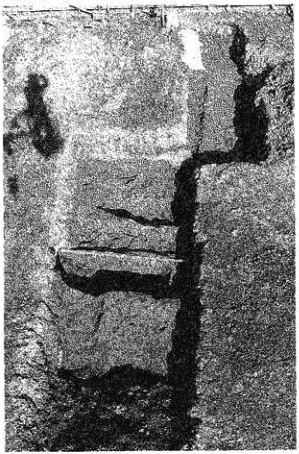


写真130　第13・第14トレンチ（南から）

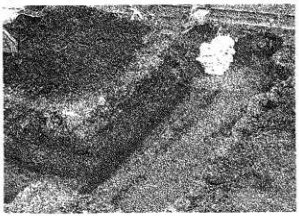


写真129　第13トレンチ（南から）

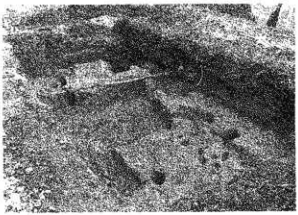


写真131　第15トレンチ（南西から）

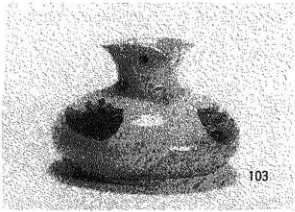


写真132　汁次（第１トレンチ）

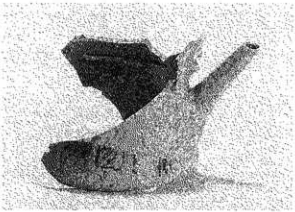


写真133　土瓶（第１トレンチ）

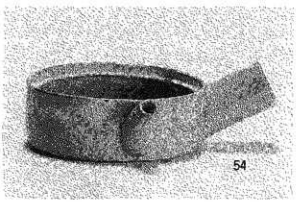


写真134　急須（第２トレンチ）

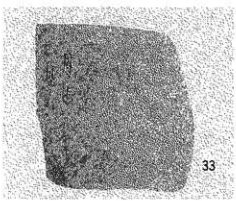


写真135　陶器（素焼）（第１トレンチ）

写真136　徳利（第１トレンチ）

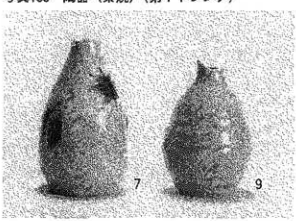


写真137　徳利（第１トレンチ）

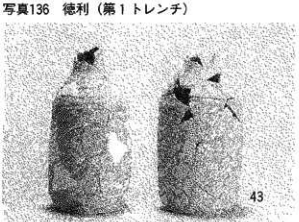


写真138　徳利（素焼）（第２トレンチ）

写真139
瓶（第１トレンチ）

写真140
土人形型（第９トレンチ）

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	古沢町遺跡（第3次・第4次）
巻次	50
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	64
編著者名	伊藤厚史・木村有作・新美倫子
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋市南区見晴町47　TEL 052-823-3200　FAX 052-823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号　TEL 052-972-3268　FAX 052-972-4178
発行年月日	西暦2004年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
古沢町遺跡（ふるさわちょういせき）	名古屋市中区伊勢山一丁目（なごやしなかくいせやまにちょうめ）	23100	7-21	35°8′49″	136°54′7″	（第3次）2002.12.2～2003.3.20（第4次）2003.11.4～2003.12.26	約1380 約 300	ビル建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古沢町遺跡	散布地 貝塚	縄文～奈良	竪穴住居跡 土坑	須恵器 山茶碗	東雲窯関係遺物

名古屋市文化財調査報告64
埋蔵文化財調査報告書 50
古沢町遺跡（第3次・第4次）
2004年3月31日発行
編集　名古屋市見晴台考古資料館
名古屋市南区見晴町47
TEL 052-823-3200
FAX 052-823-3223
発行　名古屋市教育委員会
名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
印刷　(株)アイコー社